

(四五) 怪しむべき製氷機の故障 (凍肉七百噸の腐敗)

「二月七日の演習は遂に不結果に終はれり。一隻の軍艦と雖も能く正確に針路を變換せる者なかりき。靜平なる海上に於て、單縱陣の航行中僅か二點乃至三點の針路變換にすら嚮導艦の航跡に對し、一は内に偏し、他は外に偏するが如き醜態を演ずるに至れり。殊に一齊回頭の如きは最も拙劣を極めたり。二月七日の大口徑砲の發射は、單に彈藥の空費に過ぎざりき。水雷艇防禦用としての小口徑砲發射の成績は、稍々進歩の跡を見ると雖も、而も第一戰隊のみにて、他は依然として進境の見るべきものなし。此場合に於ける第二戰團艦隊及び巡洋戰隊の不成績は、寛容すべからざるの失態といはざるを得ず。」

是等の艦隊命令に於ては、提督の意のあるところが充分に現はれて居ない。何故ならば艦隊命令は公文書體で書かるゝ、形式的のものに過ぎないからである。それにしても、徒らに「彈藥を空費」する「不規則な軍艦の團塊」を率ゐて、勝に乘じ、而かも吾々より遙かに強い、そして平時に能く訓練され、一年間實戰の經驗を経、休養と修練の餘裕ある敵艦隊に向はなければならぬ提督其人の胸の底は果してどんなであつたらう!

吾々がノシベに着いてから間もなく、提督は屢々故障を起して艦隊の行動を妨げた「マレー」を、本國へ追ひ歸してしまつた。斯ういふ厄介な「鹽」は「マレー」ばかりでない、フェルケルザム枝隊の「クニヤズ・ゴルチャコフ」も「マレー」同様役務を解かるゝことになつた。這麼汽船を誰が一體備入れたのだ? 歐羅巴中を捜せばどんな立派な汽船でも、備入れることのできない筈はない。何故なれば聖彼得堡政府は莫大な備船料を支拂つて居るからである。余は前にもいたことがあるが、スラビイ・アルコ會社の技師で、同會社の製造にかゝるスラビイ・アルコ式無線電信機の性能を監督する爲めに、各艦に乗組んで居た連中は、アングラ・ペクエナまで艦隊に同行する契約であつたが、艦隊が出發して見ると、彼等も職業上の野心から、實戰に臨むことを重要な經驗として、俸給は減らされても構はむから、何卒前後の目的地まで同行を許して貰ひたいといふことを提督に願つて、其中の或者は許容されアングラ・ペクエナを過ぎてノシベまで來たが、初めの元氣は何處へか無くしてしまつて、さつさと此處から歸國してしまつたのである。

是と同じく個人契約で備入れた料理人と、士官室給仕の中の或者とは、クロンスタットを出るときに突張らせた慾の皮を、生命惜さに弛ませたと見えて、續々解備を要求するやうになつた。

糧食船「エスベランス」の製氷機に、瀕々として故障が起り始めた。其都度工作船「カムチャツカ」の手で修理を加へるのであつたが、修理すればする程故障が激しくなるので、恐らく故意に何人か企てる仕業に相違ないといふ判断の下に、艦隊機長を委員長として調査委員が開かれたが、此原因を証明するに足る證據を發見することができなかつた。然しながら此疑惑は依然として晴れなかつた。

總ての故障は完全に修理された。そして調査委員の面前で試運轉を行ひ、有ゆる部分の検査を受けることになつた。

故障は決して起らなくなつた。總て機械は完全に動いて居る。と、不意に二三日経つてから、顯著な損害が機械の外面に起つた。

此汽船はアルゼンチン倫敦間の貿易船で、冷蔵肉を積み込んだところを積荷諸共、持主の會社から直接に買入れたもので、決して老朽船でも何でも無い。併し商務局で買つたのでも海軍省で購つたものでもなく、唯一儲けする積りで或商人が個人として買取つた船であつたが、製氷機の運轉が不可能となつたが爲めに、貯藏室の温度は急に昇り初め、冷蔵肉は忽ちの内に腐敗し出した。其上にいくら修理しても到底駄目といふことが解つたので、「エスベランス」は七百噸の冷

蔵肉を投棄して、悄然として佛蘭西へ歸つて行つた。是で滅亡の運命を有つた船から、鼠と蠶蝶とが悉皆逃げて行つてしまつた譯になつたのだ。

(四六) 噫！何たる醜態ぞや！（水雷發射の不成績）

二月十四日、全艦隊舉つて出港した。是は對抗演習を試むる爲めで、豫め與へられた一般方略に依つて行動するのである。

「顯著な効果を見ることはできまいが、何等かの利益はあるものである。」

余の日記の端には斯ういふことが書いてあつた。日没頃、ノシベに還る途中、久しく待つて居た「オレーグ」、「イズムルド」、「ドニエール」、「リオン」——最後の二隻は假裝巡洋艦で、「ベテルスブルグ」及び「スモレンスク」の姉妹船である——驅逐艦「グロムキール」、「グロズヌイ」の一隊が、初めて吾々と合した。

無線電信に關して提督は艦隊命令に於て次のやうにいつて居る。

「特務船「コリヤ」及び「キタイ」の二隻の有する無線電信機は、低架式單導線のマルコニ式なり。他の驅逐艦を除ける各艦の有するものは、高架式複導線のスラビー・アルコ式なり。就中「ウ

ラル」の如きは五百哩の通信距離を有するスラビイアルコ式を有す。然るに航海中能く九十哩を通信し得たるものは、單に「コレア」あるのみにて、殘餘の艦船は最大距離六十五哩を越ゆる能はず。而して今二月十四日、午前六時三十分、小丘を隔て、碇泊したるにも係らず「オレーグ」の通信を劈頭第一に受取りしは、「コレア」にして、「ウラル」の強大なるスラビイアルコ式を以てして、遂に同船は何等の感應にも接せざりしなり。而も「ウラル」は前日より「オレーグ」の通信接觸を保つべき命令を受取り居たるものにして、同船と「オレーグ」との間に陸地の介在するに非ず、途中電波の進行を妨ぐべき何等の障礙なかりしに、其受信機が何等の性能を發揮し得ざりしは遺憾なりき。」

考へて見ると難有い譯である。造船委員會は有効なマルコニ式を採用せずして、それ以上有効だと信じて、其弊甚だ不有効なスラビイアルコ式を以て、吾々を間誤付かさすほどの厚意を有つて居たのだ。

余はそれより前に旅順に於ける經驗に依つて、魚形水雷を裝備した小蒸汽艇隊を訓練する必要を提言して提督の承認を受け、それを監督して毎日のやうに操練を怠らなかつたのであるが、二月十八日、自分は殆んど虚脱的失望に陥るやうな事件に遭遇した。

余は水雷大尉が魚形水雷の調整に間然するところがないので、標的發射の必要はあるまいと斷言したに係はらず、それを信ずることができなかつたので無理に發射演習を強いたのである。無論其日の演習は靜穩な海上で行はれたものであるし、其距離とても僅かに五鎖即はち一千碼に過ぎなかつた。是等小蒸汽艇に就ても、余は第二戰隊附屬のものを、後は批評しやうとはしない。けれども、第一戰隊に屬する（戰團艦隊）六隻は總て新造にかゝるものであつて、造船委員會の理想通りに艤装されたものであつたのだが、驚くべし矣！發射の結果は實に次のやうな慘憺たるものであつた。

吾々は六發の水雷を發射した。ところが、其中の一發は發射管を辭した儘前進しなかつた。他の一發は直進することをしないで、大圓を描いて動き出し、時々海豚のやうに水面上に姿を現はして、吾々を脅やかすやうに見えた。小蒸汽艇の方では、其危険を免かれる爲めに、速力を高め

て逃げ惑はねばならなかつた。二發は右に偏し、一發は左に偏し、唯、僅かに殘餘の二發だけが、満足な結果を獲たに過ぎなかつた。而もそれは白晝の演習であり、他に何等の妨害物もなかつた上に、波は熨したやうに靜平であつたのだ。是が演習だからよかつたやうなもの、若し斯の如き水雷を提げて、暗夜敵艦

を襲撃するものとしたら何うであらうか。吾々は無残な目に遇はなければならなかつたのだ？

「何うも實に不可解しい。多分長濤があつた故だらう。レволь港内で試験を行つた時には素晴らしく旨く行つたが。」

「そりやさうだらう。港の内で行るときにはね。無論長濤も少しはあつたかも知れない。然し吾々が敵艦襲撃を行らなけりやならんときには、君、長濤どころか、怒濤が荒れ狂つて居るかも知れないぢやないか。這麼くだらない魚形水雷なら、舊式の圓材水雷の方が餘程有効だせ。あいつなら、あはよく行くと、敵艦に接近して、目的を達することが出来るかも知れないからね。」

水雷大尉は怒つたやうな風をして居た。然し其顔には慥かに「吾々を亡ぼすものはトランサンドなり」といふ表情が、彼の心を偽ることなく浮んで居た。

二月十一日、全艦隊は擧つて出動した。彈藥を積んで來る筈のイルチツシユがまだ來ないので、實彈射撃を行つることができなかつた。それで單に假設敵演習を行つたに過ぎなかつた。

吾々は豫定命令に依つて演習を開始した。然し、提督はフエルケザム及びエンキスト兩枝隊に、一般方略に依つて自由行動を許したが、演習の終はる頃に、全艦隊を收拾して、單縱陣、單橫陣

一齊回頭等の運動を行つた。けれども、支離滅裂で到底見られた醜態ではなかつた。

「何うですね。君は能く誰でも賞めますが、あの有様は何ほ君の樂天主義でも賞めやうがないでせう？」

副官エヌ大尉は余に向つて斯ういつた。余は是れには答へないで唯肩を揺がせたゞけであつた。

（四七）艦隊士氣の沮喪（提督斷乎たる處置を取る）

艦隊のノシベ碇泊中、教育訓練の缺乏を補ふ爲めに、行ふた演習の進行に就て、余が今迄試みた短かい評論は、不幸にも艦隊の臨戰準備の不完全を曝露する結果を生じたばかりでなく、艦隊の存在をすら呪咀ふやなことになつた。余は故らに兵員の内面生活や士氣に就ては、自分の日記に無盡藏の材料が誌されてあるにも係はらず、公言することを差控えて居たのである。

余が日記を時間的に順序正しく書き並べたといふだけでは、讀者に向つて艦隊の形而乃至形而下の状態に關する概念を明瞭に與へることができなかつたかも知れない。で、是等の概念は吾々波羅的艦隊の東航に加はつた者に取つては、余が日記に次のやうな出來事を漏らさずに書き入

れて置く程、密接な關係を有つたものであつたのだ。其日記の文句といふのは、次のやうなものであつた。

「午前三時より九時まで驟雨あり。——幸にも提督の容態は輕微であつた。殊に本日は稍々快き方である。總員集合で旗艦乗組の牧師は「吾々をして主エスの如く何等の苦痛もなく何等の怨恨もなく、死することを得せしめ給へ——」といつて祈禱つた。が、余は敢て彼に反對して叫びたい。そんな馬鹿な祈禱を捧げる奴があるか。吾等をして何等の怨恨なく死せしめ給へ、といつて祈禱ればそれで澤山ぢやないか。余はメンシコフの小冊子「改革委員會の掌中に置かれたる露西亞」が艦隊に於て、不正であり、空想的であり、風癪的であるとされつゝあるといふことを聞くのを面白いと思ふ。露西亞が其傷ける腕を差し伸べる」ときに、其傷が微かなものならば、それに豪薬を貼る必要も、繙帯を施す必要もないが、若し萬一それが重傷であつたならば、是非共傷の外に心臓に對して適切な手當をせずばなるまい。』

けれども、余は此日記の一節を讀者に示したところ、諸君が此言葉を諸君の眞意に觸れしむる爲めには、特殊な説明者を要するかも知れないと思ふ。

愈々吾々が増援艦隊を待ち合はすべき命令に接したことが、全艦隊に知れ渡ると、折角充實し

て居た士氣に再び一頓挫を來して、精神的刺激もなくなり、底暗い前途の不安が、全艦隊の元氣を包んだ。そして人々の頭上には頽廢の波が澎湃として襲ひ來つた。

此精神的危殆を炯眼な提督が見逃す筈がない。彼は之に對して彼一流の手段を取つた。彼は人々をしてくだらぬ事を考へる暇のないやうに、猛烈に働かせることを最良の策だと信じたので、一月中旬から、訓練を行ふ、操練を行ふ、石炭を積む、糧食を積むといふ風に、朝から晩までキビ／＼働かせた。それで必要に應じては夜間までも働かせた。

提督の此手段は忽ち効驗が顯はれた。艦隊の士氣は再び奮ひ初めた。吾々は何の希望もないので、唯ボンヤリ此處に待つて居る」といつたやうな不平の影がなくなつた。が、此應變の手段も亂用する譯には行かない、何故なれば人間の體力には限りがあるばかりでなく、赤道附近にあるマダガスガルの、熱鐵を沿びるやうな氣候の中にあつては、斯ういふ過激な労働は人間の體力を消耗し盡してしまふ。而して是に依つて起る反動は、過勞から生ずる元氣の疲弊であつて、此危険から免かれる爲めには、精神にも肉體にも、適當な體養を與へる必要があつたのである。

(四八) 巖の如き沈黙提督 (服従の價値なき上官の命令)

提督は將來の計畫とか希望とかに就ては、黙して一語も發しなかつた。副官エス大尉は提督の秘密信書を取扱つて、艦隊の機密に關して何も彼も知つて居る男であるが、此男が又海底の魚のやうな沈黙を守つて居るので――。

「オイ、君、秘密を捜り出す譯ぢやないが、何故提督が黙り込んで居るか、君は知つて居るだらう。話して聞かせ給へ。君も提督と同じやうに黙つて居やうとするのかい？」

或日余はエス大尉に問ひかけた。彼は暫らく考へて居たが、余に問ひ返して斯ういつた。

「君は服従する價値のない命令を上官から受取つたことがありますかい？ そしてさういふ場合に、規律の許す範囲内に於て、其命令に抗議を申込んだやうなことがありますかい？」

「左様、さういふことは時々あるね。」

「然し或る事柄が進行して居る場合に、君が其事柄に就て有望だと信するならば、君は上官に對する其抗議に於て、自分が部下であるといふ禮讓を守つて必要だと思ひますか。さういふ時には君は腹藏なく意見をお吐きになるであらうし、又、絶對にとはいはんが、大體に於て君の主張を貫徹されることができませう。さうではありませんか。」

「まア、さうだとして置いて――。」

「ところが、若し其上官がですね、君の部下の士氣を振作するに最善なりと信じて、多くの命令を下したのであるとしたならば、君の自信ある注意は何ういふ結果となつて現はれるでせう――秩序紊亂者として、軍人の最も忌むべき上官に反抗する者として、又上官を壓迫し、其計畫を抛たしむる爲めに、上官を脅迫した者として、取扱はるゝより外はないでせう。」

「或はさうかも知れませんが、それで――。」

「提督の沈黙を守るのは此理に外ならぬので、閣下はまだ「彼等」が閣下を了解するだらうと信じて居らるのですね。然しそりや全然絶望だ。尤も閣下は總てが絶望であるからといつて、徒らに沈黙を守るゝのではない。吾輩は君に秘密を曝露すのではない、唯吾輩の知つて居ることだけを話しますのです。吾々は事實に於て、露國民衆の壓迫を受けて出發したやうなものだ。當時彼等本國人は提督に旅順救援の意志がないといつて責めて居た。君が馬耳寒から巴里を通過されたとき、大使館でネリドフ大使と語られたことを話されたのを覚えて居ますか。總ての消息に通じて居る筈の大使すら、提督に東航の意志がないやうなことをいつたといふではないですか。君のお話に依ると、「ゼノビアス・ロヂエストンスキーは病氣でもして居るか、さもなければ決心することができないのだらう」といつたといふことだが、當時は艦隊のことに就ては何事も提督

自身の決断を俟たなければならなかつたので、何故かといふと、デユバノフ提督は年齢を老り過ぎて居るし、チユークニン提督は黒海艦隊から手を放すことができないし、ロヂエストンスキー提督を措ては他に絶對に適材がなかつたのだ。で、兎に角、吾々は出發した。出發したとして見れば、吾々の東航を無意味に終らせたくない。過日、君から旅順艦隊が陸正面から砲撃を受けて、滅亡に近づきつゝあると聞いたときには、吾輩は耳を蔽はずには居られなかつた。吾々はステッセルから幾多の英雄的報告を受け取つた。そして悉くそれを信ずることができなかつたにしろ、少くともそれを信じたと思つて居たのだ。早くいへば吾々は波羅的艦隊を有力なる豫備艦隊としか見て居なかつたので、吾々の東航は難攻不落の要塞と遺憾なき設備とを有つた軍港に建設された戦争劇場の立役者ともいふべき、旅順艦隊の應援に赴くものに過ぎないと信じて居たのです。然し旅順が既に日本軍の手に落ちたとして見れば、吾々の描いた最後の幻影は消去つたも同様です。そこで、大波羅的艦隊——拙劣極まる建造と不完全な艦装を有つた新造艦と、唯單に航行序列に加へられたに過ぎない老朽艦とを、だらしなく狩り集めたと思へない波羅的艦隊は、どんなに最良目に見ても初から豫備艦隊の價値しかなかつたにも係はらず、愈よ旅順艦隊の滅亡に依つて、勝に乗じて意氣昂然たる敵の戰團艦隊を覆すべき任務を有する常備艦隊に早替

りをしたのです。其上に吾々は浦鹽斯德へ入る前に、完全な設備を有する根據地に、手具脛引て待つて居る強敵を敗らなかりやならない。吾々は日本艦隊に比べて、數に於ても武裝に於ても又艦装に於ても劣つて居る。それどころか、肝腎な士氣に於ても——是は何人も否定することができない——敵に對して、大なる徑庭があつて見れば、吾々の東航は全然絶望に陥るかも知れない。が、「彼等」はそれを了解することができない。イヤ了解しやうとさへしない。そして相變らず奇蹟を信じやうとして居る。提督が黙して何事もいはないのは、それに呆れて居るからです。」

(四九) 唾棄すべき煽動者の妄論 (猛烈なる艦隊の反感)

然しながら、余は提督が石のやうな沈黙を守り、エス大尉が唯ぼんやり抽象的に話たゞけであつたにも係らず、本國から到着した新聞に依つて、初めて吾々の前進を中止して居る理由、又、何を目當に待つて居るかといふことを知つた。即ち波羅的艦隊に編入されて居るといふに過ぎない、「ニコライ一世」、「ウーシヤコフ」、「セニヤヴキン」、「アブラキシン」、「モノマク」のやうな「古盟」といはいはうか、「軍船」といはいはうか、兎に角、お話にならない老朽軍艦を吾々の増援艦隊として派遣するから、それを待合せよといふのである。

是等の軍艦は復讐艦隊の編制される當時、ロヂエストンスキー提督が、其麾下に編入することを頑強に拒んだ履歴付のもので、是に優る「ナツリン」、「ナヒモフ」、「ドンスコイ」の三隻すら、提督は血の出るやうな不快な思ひを忍んで同行を承諾した位のものだ。

「是ぢやア増援ぢやなくて脚程を縛り付けられるやうなものだ！」と氣の早い者は叫んだ。

吾々には本國政府が何の積りで、這麼「扁平鐵」や「木履」を派遣したか、全く不可解な神祕であつた。然し、吾々には此増援艦隊の派遣が何うも呑氣に暮して居る軍司令部其物の發意ではなくして、巴里から本國に還つたケー中佐に煽動された民衆輿論の壓迫が、斯ういふ結果となつて現はれたのであると思はれた。

「ヤコブの聲ではあるまいし、一體間違つた話だ！」

「一體、彼奴は自分の分際を知らなけりやならん筈だ。彼奴は多分氣が狂つたんだらう。でなければ、彼奴自身に責任がある。」或者は又激して斯ういつた。

「ロヂエストンスキー提督に語るに及ばない。躊躇することなく出来るだけの軍艦を送るがよい。一瞬も躊躇すべからず。然らざれば時機を失する虞がある。余のいふところを信せよ。時機に遅れる。此言葉が如何に恐怖すべき意味を有し、如何に災禍な綴を有つて居るかといふことを

諸君は想像することができるか。」とケー中佐は露西亞の社會に向つて絶叫して居るのだ。

ケー中佐は此不條理極まる妄言に飽くことを知らないで、絶対に無用なことまで放言して居る。それは「ミニン」、「ボヂヤルスキ」、「ピーター・ヅエリキー」のやうな、全く役に立たない軍艦までも出征せしめよと主張して居る。彼は這麼ことをいつて居る。

「——十八世紀に在つては浮砲臺「クレムル」さへ極東に派遣されて居る——焦眉の必要に迫られた場合には、活氣ある人間は不可能と見ゆることでも成し遂げるものである——。斯様な實例を擧ぐれば無數にある。全露國々民は今こそ覺醒しなければならぬ！ 而してそれより外に途がないことを覺悟しなければならぬ！ 諸君が若し此事を敢てすることを怠るならば、近き將來に於て怖るべき戦敗の危険が、澎湃として襲ひ來ることを知つて置く必要がある。誠に此際在つては、唯、邁往あるのみ、勇進あるのみである。斯の如くせば、世一つの不可能あることはない。」

這麼ことをいはれると、

「何といふ尊き言葉であらう！ 實に愛國的赤誠に充ちた殉國者の教訓だ！ 斯る經驗ある海軍軍人の口にするところを、信じない者があるだらうか？」

露國々民は斯ういつてケー中佐のいふところを賞讃するのだ。

「何といふくだらないことだらう！ あれで何も知らない陸上の人間を欺騙すのだ、何といふ面目ないことなのだらう！」

吾々艦隊の者共は是に對して押へきれない憤懣の情を漏らすのだ。

ケー中佐は第二艦隊の編成された當時、同艦隊が「成功する機会を有つて居る」といふことをいつたのであるが、彼は其増援艦隊を派遣すれば、此「機会」を「確實な公算」に變ずることができると主張して居る。が、其増援艦隊が今尙ほ僅かに波羅的海艦隊の所屬であるといふに過ぎない五六の「古壺」に依つて成立つて居るといふことには、氣が付かないと見える。

ケー中佐は海軍年鑑の材料と、總ての事務が整頓して居る」とか「臨戦準備は完全して居る」とか、殆んど空漠たる傳説に等しい報告を基礎として、社會に危険にして獨斷的な意見を發表して居るのだ。彼は輿論を唆かして、波羅的海軍の「塵埃」を掻き集めたものを、直ぐにも増援艦隊として派遣することを、海軍大臣に向つて強要せしめて居る。それで専門家にも似合はない、豫め艦裝検査の必要なることまでも主張しやうとはしないのだ。それどころか、彼はそれを以て不必要だとさへして居る。

「如何なる缺點ありとも、直ちに派遣する方が得策だ。航海さへできれば、必らず戦闘中に何

かの役には立つものである。』

彼は這麼ことをいつて居る。余は海軍々人は勿論、假令門外者であつても、彼のいふところが如何に妄誕極まるものであるか位のことは知ることができると信ずる。

波羅的海軍の「塵埃」！ それは一體何だ？ いふまでもない、だらしない軍艦のことである。何うしてだらしないのだ？ 機關も武裝もまるで成つて居ないからだ。機關と武裝が慥乎して居なくて、何うして「何かの役に立つ」ことができるものか。

ケー中佐もロヂエストーンスキー提督が、第二艦隊を編制する當時、是等の「塵埃」を麾下に加ることを頑強に拒んだことを、能く承知して居る筈だ。で、彼は提督に諮ると拒絶される虞があるから、「ロヂエストーンスキー提督に諮るに及ばない。何でも彼でも手當り次第に掻き集めて、波羅的海から送り出せ。一刻も猶豫すべきでない。」といつたのである。

一體、露國が日本と戦ふ目的は何であるか。ケー中佐は誰に——誰の爲めに働いて居るのだ？ 是等の疑問に關して中佐は、些しも説くところがない。彼が若し彼自ら其地位を無視し、徒らに衆愚を煽動することを専とするならば、彼の國家に對する責任は非常に重大な性質を帯びて來るといはなければならぬ。

艦隊では軍事上の機密が不知不識の間に漏洩することを防ぐ爲めに、提督の許可を経ずして、新聞雑誌へ寄稿することはできないやうにしてある。そればかりか、人々は全く自分一個の動靜に關して家族へ通信するときまで、現在及び將來に涉つて、艦隊の行動を忖度し得るやうな通信は、絶対に書かないやうに自制を加へて居る。それは命令でもなければ、所罰が可怖いからでもない、唯衷心より提督の人格を尊敬する結果に外ならないのである。

是迄、書信の檢閲といふ煩雜な手数を、さうでなくてさへ、幾多の重任を負ふた提督に、矢鱈に掛けるといふことはなかつたのだ。ところが、急に種々な文書が檢閲を受ける爲めに提督に提出された。そして是等の文書の要點は何れも期せずして同じであつて、唯其發表の形式を異にするのみであつたのだ。つまりケー中佐の所論に辛辣な批評を加へることに於て一致したものであつたのだ。或者はケー中佐のいふところを、愚人の空想の表現であるといひ、又他の或者は之を罪惡——といふより寧ろ一種の叛逆であるとして極言した。

提督は是等の駁論を讀む餘裕を有つて居た——提督は「乃公にはそんな時間がない」といふことを決していはず。彼は殆んど何でも彼でもできないことはないと思つて居るのだ——で、余は提督の麾下にある各將校の意見が、斯の如く期せずして一致したことに就て、提督が心算かに満

足して居るだらうと思つた。提督の此事に關する意見は、非常に好意的のものであつて、或意味からいつて嘉納的のものであつた。が、提督は同時に、向後艦隊からそんな議論を出さないやうにと注意するところがあつた。それは第一に三箇月も後れて發表する駁論は、一旦煽られた動搖を左右することはできない、のみならず、敵國たる日本の爲めに徒らに内兜を見透かるゝ虞がある。第二に聖彼得堡であのやうに感情的輿論が高潮に達して居ては、恐らく一の新報紙と雖も艦隊の駁論を掲載するものはあるまいからといふ理由に於てであつた。

ケー中佐の議論が艦隊側の猛烈な反感を挑發したと同時に、是が爲めに兵員の間にも、危険といふでもないが、非常に面白くない結果を齎した。

艦隊に送らるゝ新聞紙の數は随分澤山ある。が、兵員に對して、新聞紙上に發表されたケー中佐の論文の閲讀を禁ずることは、却つて彼等の興味を唆ると同じであつて、恰度煽の上に油を注ぐと同じ結果を生ずるのである。で、適當な機會に於て、權柄づくでなく、相談的に彼等の間に起つた不祥な空氣を拂ふより仕方がなくなつた。然し、斯うなると、非常に人望のある士官の言葉でも、水兵等の心の底に深く蝕つた疑惑の念を高める危険があつた。

「何うした譯だい？ 己等煖爐の傍にへばり着いて居て、俺等だけ戰爭を遣らうていのかい？

彼奴等は此處を出たくねえんだらう。そして此處にある軍艦を役に立たなくしやうてんだらう？
馬鹿にしてらア、俺等だつて人間ぢやないか。ねえ、オイ、お前達が初めて海軍に出るときお前
達の宣誓つた言葉を知つてるかい？ 飽くまで誠實と忠信とを守るといつてるぢやないか。俺等
も十字架に接吻してゐるんだ。ふざけちや困る。俺等だつて基督教徒だ？』
斯ういふ不平が時々聞えた。無論公然ではないけれども、水兵等は夜になると集つてヒソク
と囁き合ふのであつた。

(五〇) 死刑に値する犯罪 (各艦共に瀕々として起る！)

是等の單純な頭腦を有つた水兵等は、極く近頃までロヂエトンスキー提督の幕僚の一人であ
つたケー中佐の意見を信じない譯には行かなかつた。中佐が増援艦隊の派遣を躊躇して居る官憲
を猛烈に攻撃して居るのを見て、彼等水兵は中佐が依然として提督の參謀であり、且つ増援を求
むる爲めに提督が本國へ派遣したものだと思つて居たのである。

余は永く水兵と接近して居る間に、彼等が非常に機敏に彼等の戴く提督を月旦する不思議なそ
して確實な批評眼を有つて居るといふことを知つたのだ。彼等の判断は殆んど謬らなかつた。

余は此現象を興味あることだと考へた。

余が旅順に居た當時、水兵等はスタルク提督を評して、「あんな老人と一所に何ができるものか。
俺等は誰か適當な人間の來るのを待つて居やうよ。」といつて居た。

マカロフ提督は、「小さい祖父さん」、「お鬚髯さん」、「頭目」、「几張几面な人」だとかいはれて
居た。

アレキセーフ提督のことは、「あの人は飾物なのさ、自分で戦争へなんか出るもんか。」といつて
居た。

ウキツトゲフト提督のことは、「一人で日本人と戦争させりや素敵に強い人だが、露西亞人と一
所ぢやア到底勝てない。」といつて居た。

ところで、水兵等が段々ロヂエトンスキー提督を尊敬するやうになつたといふことの知れた
のは、單に提督を呼ぶに「あの人」とか「彼」とかいひ初めた時であつた。即ち「あの人ならば屹
度任務を仕遂げる」といふ確信を彼等が懐くやうになつてから、初めて提督を呼ぶに「あの人」
といふ親密な代名詞を用ゆるやうになつたのである。

それ以來といふものは、「あの人」と「吾々」との間には最早離るゝことのできない親密な關係

が成立した。して見れば「吾々」の利益を代表して、常に「吾々」と駆け離れて居る不思議な、そして不親切な権力を以て、「吾々」の利益に反対し、單に己の爲めのみ計らんとする本國の海軍當局に反抗してくれる「あの人」の命令が、常に賞讃を以て迎へられるのに不思議はあるまい。

ケー中佐の意見が、水兵等に非常に謬つた判断を持たせたのは事實である。其中でも提督が後援艦隊の派遣を請はしむる爲めに中佐を聖彼得堡に派遣して、却つて當局の拒絶に逢ふたといふ判断の如きは、最も謬れるの甚しきものであつたのだ。と同時に、彼等の上官に對する概念といふのが頗るアヤフヤなものであるが爲めに、彼等は其信頼して居る提督の崇拜者と、彼等の信を置いて居ない本國海軍當局の渴仰者との間に、劃然たる區別をすることができなかつたのだ。

で、此結果は水兵等をして殆んど總ての士官を信することができなくさせた。それが爲めに彼等の間には、不安と混亂とが持上つた。彼等は最う誰が敵だか味方だか判断することができなくなつた。彼等は各自勝手に離れ／＼なことを考へて居るより外に仕方がなかつた。それが爲めに各艦には、斯うした精神的離反が原因となつて、種々な問題が起つて來た。

が、是等の紛擾は提督の個人的仲裁に依つて直ぐに解決を告げるのであつた。が、矢張り中にはさう行かぬこともあつた。日課に關する犯則が最も屢々行はれた。それが爲めに軍法會議が毎日

のやうに開かれた。此の會議の開かるゝ場合に軍艦は軍艦旗を前部に掲揚して、一發の號砲を發射することになつて居るが、餘りに間斷なく號砲が發射されるので、人々は射撃場の鴉のやうに此不祥な音を些とも驚かなくなつてしまつた。

犯則は漸く重大な性質を帯びて來た。其中には戰時刑法に依つて、充分、死刑に處するに足るやうなものも數あつたが、提督は一人として彼等に此忌はしい極刑を科するやうなことをしなかつた。

或時檢察官が提督に向つて、寛大も度を過ぎると、却つて有害であるから、たまには他の者へのみせしめの爲めに、嚴格に所罰した方がいゝではないかといふことを注意したときに、提督は氣色ばんでいつた。

「ウム、過度の寛大は却つて害があるいふのか。乃公は徒らに惻隱の心を起すのではないのぢや。唯、乃公は死刑を不祥な方法であると信するのみぢや。刑法が命するからといつて、無闇に水兵を死刑に處して何うして彼等を戰場へ連れて行くことができるか。戰闘前には禁錮されたものも悉く放免することになつて居る。まア見て居れ。彼等は今に一生懸命に働くぢやらう。」

提督と檢察官との間に交はされた此會話は、誰も其場で聞いた者もないのに、其日の中に水兵

等の耳にすつかり入つて居た。で、不思議なことに、それ以來犯則者が急に減つたのである。勿論、會話其物が言葉通りに傳はつたのではない。其意味だけが彼等に知れ渡つたのであるが、それにしては、何といふ美しい物語のやうなことであつたらう。

「旦那、眞實でムいませうか。提督閣下は戰闘の始まる前には、すつかり罪人を放免なさるといひますが？ それでは、悪いことをした奴も戰闘に加はることができるといふものでムいませうね？」

余の給仕は斯ういつて訊いた。

「お前何處からそれを聞いて來た。」

「下甲板には専らさういふ噂さがあります。」

「お前はそれに就て何う考へるかい？」

「何うと申しまして、閣下がさういふ風になさうといふのは能く最う知れて居るのでムいませう、兎も角、閣下のことですから、仰有つたことは必ず實行されるに定つて居ませう。」

(五一) 滿洲軍幕僚憤る (是れ單なる罪惡に非ずして反逆也)

ケー中佐の所論は滿洲軍に於ける一部の將校の猛烈な反感に遇ふた。余は本國の海軍當局が

々を「大砲の餌食」と心得て居るといつたが、是は滿洲軍でも同じであつて、余が其處に居る友人から受取つた書信の中にも、安樂椅子に凭れて、敵彈のうなるのも聞かない、露國陸軍の英雄が、ケー中佐が能く似て居るといふことが書かれてあつたが、余は讀者の爲めに、其書信の一節を此處へ披萃することにしやう。

「有名なるケー中佐の議論は、滿洲軍に於ても、同じく憤懣の聲に迎へられ申候。一般の意見は同中佐の所論を以て、露國即ち吾等の祖國に對する反逆なりと致し居候。

聖彼得堡に於ける特派員は頗る機敏に是等の所論を報導致候。而してケー中佐の數字及び係數を基礎として打算したる樂天觀は、著しく士氣を阻喪せしめ申候。同氏の増援艦隊派遣に關する神經的絶叫に就ては、小生等の頗る不思議とするところにて、同氏の常規を逸したる不當なる言動が、聖彼得堡に於て如何なる反響を有するかを知らんと欲するものに有之候。

クロバトキン將軍幕僚の通信部長リンド大佐は、同幕僚に於ける海軍參謀長ルージン大佐と、屢々ケー中佐の不謹慎に就て意見を交換した結果、新聞紙上に於けるケー中佐の第二艦隊の現狀に關する罪惡的議論は、徒らに數字上より日本の優勢を指示し、吾が軍の士氣を衰頹せしむるの

みならず、殊に日本をして益々自信を強ふせしむる虞れがあるので、斯る意見の公表は宜しく禁止されたいといふ希望を、ロヂエストンスキー提督に通告する必要がある。』といふことに一致したのであつた。

リンダ大佐はルーシン大佐に向つていつた。

「第二艦隊を出來るだけ早く東航させて貰ひたい！ 悠々としてノシベにあつて、ネポカトフ艦隊を待つが如きは、正に一種の罪惡である！」

余の友人の書信には斯ういふ事實が書き列ねてあつて、其最後が次のやうに結んであつた。

『小生も亦ケー中佐の所論を以て、重大なる罪惡と見做すものに御座候。』

余は滿洲に於ける此輿論の聲を、マダガスカル島に於て認めた日記の裏書として、此處に載せることを余の義務と信するのである。

二月十七日、提督は突然健康を害して病牀に横はる身となつた。艦隊ではネポカトフ艦隊がリボウを出發したといふ電報に接したのが病原だと噂し合つて居た。兎に角、提督は急病に犯されたものらしい。然し二日ほど経つた後には、衰弱はして居たが甲板へも出られるやうになつた。吾々は彼の此痛々しい有様を見たときには、不安を感じずには居られなかつたけれども、聞き慣

れたあの強い調子の言葉を耳にしたときには、聊か安心することができたのである。

「閣下は決して病氣にはならない。然し、恐らく平和克復後は——。」

口癖のやうに艦隊軍醫長はいつて居た。噫！ 平和克復後は！ 平和克復後は！

ロヂエストンスキー提督の第二艦隊を援護すべき目的の下にリボウを出發したネポカトフ提督は、本艦隊と合した曉に於ては無論ロヂエストンスキー提督の指揮下に入るべき筈であるが、それまでは、ネポカトフ提督は直接軍令部の命令に依つて行動することになつて居た。

時々、聖彼得堡からの電報が遅れることがあると、提督はネポカトフ提督の行動と希望とを、ハザアスの特派通信員からの電報で初めて知ることができた。それはそして何時もまさかと思はるゝやうな電報ばかりであつたが、然し不思議にも悉く事實となつて現はれた。

二月二十一日以後、精しくいへば「オレーグ」、「イツムルド」、「ドニエーブル」、「リオン」、「グロムキー」、「グロズヌイ」が、提督の麾下に加はつてから、無用なる増援艦隊に對する一般憤慨の情——殊に多數の意見は増援艦隊を待ち合はすことを有害と認めて居たのだ——は、遂に提督をして止むを得ず其沈黙を破らしめ、幕僚及び前任艦長會議に於て、提督が一月中旬に受取つた第二百四十四號の電報全文を朗讀させるやうに強ひたのである。

が、案の定、此會議に列した面々は、此事を己れ一個の胸の底に潜めて、決してそれを外に漏すやうなことをしなかつた。けれどもハヅアス及びロイナル特派員は、其電報の概略を露西亞及び佛蘭西の新聞紙上で素張抜いた。彼等は其當時の消息の真相を傳へ、正確に其將來を豫言して居た。それに依ると、提督と聖彼得堡の間には、常に意見の衝突があつたらしく公表されたる。第二百四十四號の電報も又明らかに此判斷に裏書して居た。残念ながら余は此電文を正確に傳へることはできない。唯其概略の意味を公にすることはできる。

其電報は、既に旅順及び旅順艦隊全滅した以上、海上權力の喪失を恢復し、敵陸軍の後方連絡を斷つ必要から、波羅的艦隊の責任は頗る重大なものとなつた。而して、ロヂエストンスキー提督の意見に依れば、彼が麾下の艦隊は其責任を果すに不充分であるといふことだから、一刻も躊躇することなく、事情の許す限り、波羅的海に残された各艦を、悉く増援隊として派遣しなければならぬといふ意味のものであつた。之に對して提督は其計畫と意見を徴せられた。

ロヂエストンスキー提督は之に對して次のやうな要領の回答を送つた。

一、彼の指揮下にある勢力では到底海上權力を恢復する見込のないこと。

二、考朽艦の修理を要する面倒がある上に、既に第一次の計畫に於て、勢力増加の希望を以て、派遣されたものが却つて、艦隊の行動を妨害して居る事實があること。

三、此に於て、取るべき唯一の方法は、艦隊中で最良の軍艦を選び、浦鹽斯德に強航して、然る後に敵の輸送線を妨害すること。

余の記憶して居るところでは、マダガスガルに於ける、長い間の碇泊から生じた兵員の體力及び精神の疲弊に關する不結果に就ても、此三箇條の外に多少附加へられてあつたやうである。

是等の電報は極めて重要な性質を有つたもので、單にロヂエストンスキー提督と、本國政府との間に交換されたといふに止まらないので、海戦上の一般方略とそれに對する熟練した戦術家の、直截な批評とを含むものと見る事ができるのである。

ロヂエストンスキー提督の答電に對しては遂に何等の指令も來なかつた。唯、提督の答電に對する再應の電報は、ネボカトフ提督がリボウを出發したといふ報告に過ぎなかつたのだ——是が其中にも最も提督をウンザリさせたのであつた。

此間の消息が知れ渡ると、問題が一段落着いたやうなもので、外觀的には或る程度迄動搖も静まり、士官室でも餘り此事を話題に上す者もなくなつた。つまり、此「呪はれた疑問」を解決す

る爲めに、餘計な脳味噌を腐らせる必要も自然になくなつた譯なのだ。それからといふものは、謎もなければ判断もなくなつたのだ。總ての事柄は明瞭で且つ簡單になつた。吾々は唯命せられただけのことをすればいいのだ。

然し、自分は此靜平な状態を謳歌しやうとは思はない。何故なれば、それは眞の靜平でなく、一種の放任であつたからだ。矜りと勇氣とに充ちた戦場の夜の靜寂でなくて、死刑の夜に於ける絶望と不正の沈黙に似たものであつたからだ。

エス大尉は妙なことを余に物語つた。

それは提督が本國政府が、彼の報告を了解して、彼の意見に同意するか、若くは艦隊に召還命令を下すか、二者必ず其一に出づると信じて居るといふことであつた。

それに依ると、提督は自ら東航の不成功に終はることを信じ初めたやうに思はれる。而して提督は此見地から、本國海軍當局が正兵を用ひずして奇兵戦に依ることが、成功の點に至つて甚だ覺束ないといふことを了解しなへすれば、彼等もまさか其頑迷な増援隊派遣の主張を取つて動かないこともあるまいと考へて居たらしい。

聖彼得堡の市民は這處ことゝは夢にも知らなかつたであらう。又知らうともしなかつたこと

と信ずる。

（五二） 彈藥を望んで長靴を得（戯談ではない）

三月十一日、待ちに待つた「イルチツシユ」が着いた。が、同船は艦隊の翹望して居た彈藥は少しも積んで來なかつた。其代り石炭の外に一萬二千足の長靴を積んで居た。彈藥の代りに長靴！何たる滑稽な對照であらう。けれども、余は讀者が之を嘲らないやうに望みたい。何故なればそれが決して戯談でないからだ。

艦隊ではのべつに石炭積載を行つたので、此作業に用ひた長靴も短靴も、殆んど破れ果て、兵員の多くはヘンブヤーンで編んだ手製靴で我慢して居たやうな爲態であつたのだ。従つて一萬二千足の長靴は、彈藥ほどの必要がないにしたところが、決して滑稽な無用物ではなかつたのである。

三月十二日、ハヴァス特派通信員から、初めて奉天會戰の電報に接した。捕虜五萬、軍旗二十三、大砲五百門を奪はれたといふ、陸上敗衄の悲報が、人々の鼓膜に鋭い衝動を與へた。吾々は日本人が世界をして自國の成功を知らしむる必要から、甚だしく勝利を誇大に報導する癖を能く

知つて居た。併し此情報に二割か三割の懸價があつたにしろ、慥かに戦慄すべき戦敗であつたには相違ない。是れ或意味に於ける吾が陸軍の全滅といつてよい。けれども、此敗衄は不思議にも、艦隊には大した——少くとも外から見るところでは——影響を及ぼさなかつた。概していへば誰も彼も疲れ切つて居た。極く簡単な思索も並大抵の苦痛ではなかつた。マダカスガルに於ける二箇月間の碇泊に、體力に不相當な間断のない労働を課せられ、完全な慰安の設備が整つて居てさへ、歐羅巴人が二年乃至三年と住むことのできないやうなあのあくどい熱帯の暑熱に圍まれて、始終神経を緊張して居なければならぬとしたならば、人々の困憊するのは自然の數である。そして此上何時までも碇泊して居る結果は、怖べき貧血病の襲ひ來ることである。それは土地の醫師が公言するところ、是が唯一の救済方法は、錨場を他の溫和な氣候の處へ移すにあるのみだ。

土耳古斯坦やシリヤやアルゼリヤやサワラの炎熱に馴らされた人々は、肩を聳かしていふた。「華氏九十度の溫度が何だ？ 其位のことは何でもないぢやないか！」然し、北方の雪の國に育つた吾々が、此九十度の高熱で晝夜間断なく照り付けられ蒸し返されるのだ。それに殆んど九十八パーセントに達する湿度があるので、是が又實に怖るべき威力で吾を

苦しめるのだ。そして此驚くべき濕氣の包圍に逢ふては全く通るゝ途がないのである。毛口から泉のやうに湧く熱汗は、皮膚にたまり、それから玉なとつて體を流れる。最も苦しいのは蒸し暑いことで、水蒸氣の飽和した空氣を呼吸するのは、土耳古風呂へ入つて熱い霧を吸ふのと少しも異ならない。

三月十三日、自分は舷窓を開けた儘で就寝した。電氣扇は全速力で廻轉して居た。恰度正子頃變な感じ——それは始終慣れて居た呼吸困難であつた——がするので不圖眼を醒ました。殆んど空氣を呼吸することができない。人間は砂の上に放り出された魚のやうに、口をアングリと開けて、肺臓にいつばい呼吸はするが、其中に空氣といつてはいくらもありはしない。頭腦は割れるやうにワク／＼痛む。疲勞と倦怠は人間から一寸の身動きをする勇氣をさへ奪つてしまつた。空は古綿を積み重ねたやうに曇つて、死海の水のやうに沈滞した霧圍氣には、微かな風の囁きすらも起らなかつた。噫！ 此時沛然として大雪雨か驟雨か襲つて來たならば、此あくどい空氣を掃ひ去ることができらうであらうに——が、却々それもやつて來さうもない。自分は手當り次第に、毛布と空氣枕——普通の枕はしつとりと濕つて頭痛の原因になるばかりだ——を抱へて船室を逃げ出し、上甲板から後部艦橋に駆け上つた。其處は夜間だけ士官以上の散歩が許

されてあつたのだ。

蒸風呂で窒息しかけた人間のやうに、げんなりして手も足も自由に利かない。艦橋の楷梯すらグラ／＼して満足には昇れないのだ。それに頭脳は鉛を注ぎ込まれたやうに重い。が、何うにか斯うにか艦橋にだけは上ることができた。あるかないかのやうな風が左舷の方から吹いて来る。それでも、余に取つてはどんなに難有いか知れなかつたのだ。

(五三) 跛足の「家鴨」と「蹇者」(前途には屈辱的滅亡あるのみ)

曇つた空が今にも落ちかゝるかと思ふ程低く垂れて、其上に霧が霏々と罩めて居た。

余は左舷六吋速射砲の側に毛布を廣げ、砲架に空氣枕を寄せかけて其處へ横にならうとした。

「オイ／＼氣を付けろ！ 馬鹿だなア！」

「イヤ、失敬々々、蹴飛ばしたかい？」

「何有、さうでもないさ。然し、最う少しそつちへ倚つてくれ給へ。」

エス大尉の聲で、

「やア、君もやつて來ましたね？」といふのが聞える。

「船室は到底我慢できない、殆んど窒息しさうだ。」

「左様、此處なら少しは我慢ができる。」

余の眼が少し闇黒に慣れると、エス大尉が腹這になつて、手で顎を支へて居るのが見えた。四圍は寂乎として、死靜の状態にあつた。然し船室よりは遙かに凌ぎよい。余は少しは元氣を恢復した。そして段々心地のよい睡眠を催して來た。

不意にエス大尉が興奮したやうな調子で、

「聖彼得堡の人間は愈々決心したと見えますね。最う躊躇も何もしないでせう。斯うなると艦隊は跛足の「家鴨」と「蹇者」を連れて、滅亡、左様、屈辱極まる滅亡に急がなければならなく

なりました。幸運？ 成功？ それ等は悉皆お伽噺の中に現はれる文字に過ぎなくなりましたよ。

實際恐なる者は幸なりですなア。何故なれば賢者は愚者それ自身より遙かに愚ですからね。お伽噺の大團圓といふやつは、最う大抵定つて居ますからなア。君が旅順でアレキセーフの十八番とかいふ、慎重の態度を取り必ず危険を犯す勿れで惱まされたといふことを聞きましたが、今の場合は少々危険……イヤ少々どころではない非常な危険がありますせ。然し、吾々の行動は危険を犯すのではなくて、寧ろ純然たる狂亂の渦中にあるといひたい。イヤそれより一種の罪惡

を犯して居るといひたい位です。』

「然しだね。吾々としては——吾輩のいふことを善く聞き給へ——最うそれより外に詮方がないのだらうか。先づ艦隊といふものから離れて、吾々自身のことを問題として、そして本國に自由に還ることを許されたものと假定したときに、君は果して其連中に加はることが出来るだらうか。まア君のいふことに誤りがないとしても、艦隊は無意味に亡ぶることが出来るだらうか。此事は世界に向つて、露國艦隊の無價値を證明するに均しいばかりでなく、雖ては露國の滅亡を意味することになるではないか。吾々の祖國の屈辱を雪がうとする復讐戦に加はることを拒む人々が、何うするかといふことは吾輩の知つたことではないが、吾輩は敢て君に問ひたい。若し君が今此處から本國に還つたとして、君は艦隊が近き將來に於て必然遭遇しなければならぬ戰場から、無事に凱旋して來る連中に平然として顔を合す道徳的勇氣を有つて居るか何うかといふことを——。』

「まア、そんな事は止さうぢやないですか。』

「イヤ、止す必要はない。例へば賭博を行ふ奴にしても、中途負けさうになつたからといつて、決して止めるものぢやない。必ず最後の運試しに、財布の底をはたいても、所持金總てを賭けるものなんだ。そして其場合に其奴が必ずしも負けるとは定つて居ないからね。』

「ハ、ハ、ハ、ハ。」とエス大尉は笑つて、

「然し、吾々の艦隊は例へば資本金ですからね。君は旨い譬喩で僕を凹ましたましたが、何卒暫らく僕のいふことをお聞きなさい。君の仰つたやうに運試しに賭けたやつが、アツよく勝目が出て來りやいゝが、罷り間違つて乾徳が違つた上に、取られた金貨が贋造であつたり何かした日には、いゝ耻の掻き捨ぢやないでせうか。君は賭博を行ふ奴は存外義理堅いからといはるゝかも知れない。或はさうでせうが、彼奴等は自分に不利益だとなると、何をするんだか解りやしないですからねえ。』

「さうだ、さうだ、そいつは全く論理的だ。然し、さう大きい聲を出さない方がいい。却つて宜しくない。聖彼得堡で安樂椅子に寄り掛つて居る英雄連（？）や、吾々の艦隊行動を計畫した戦術家なんて奴は、吾々のいふことを聞かうとしやしまいからねえ。吾々はつまり「大砲の糧食」に過ぎないんだ。だから吾々は吾々の仕事さへすればいゝのだ。何も他人の頭痛を疝氣に病む必要はない。さうでなくてさへ吾々は最うウンザリして居るではないか。」と不意にビー大尉が嗚聲でいふた。

(五四) 死の形式論 (苦しむまいと思つたら短銃が一等だ)

暫らく誰も何ともいはなかつた。エヌ大尉が極く低い聲で静かに落着いて語り出した。
 「マカロフ提督が君にいつたといふではないですか。死は易し。而も無益の死は、愚中の愚なるもの也」とね。君は今から三十六年前に、有名なセメチキン大尉が、其講演にいつて居る言葉を思ひ起すことができますか。大尉は「死其物は決して怖るゝに足らず。吾人はそれに就て論議の餘地を有せず、さりながら無益に死すてふことは怖るべきこと也。祖國の爲めには何人と雖も喜んで、其生命を捧ぐるに躊躇せず。而も貴重の生命を安價に且つ無益に捨つるが如きは、堪ゆべからざる困難也。」といつて居るではありませんか。是は三十六年前の大尉の意見であるが、吾々は今の場合にそれを當て嵌めて考へることができるのです。随分一度の戦争で安値な彈丸の爲め、無益に無意味に殺られたものがある。僅かに残つた力で其處等にボカ／＼浮いた物に一生懸命に掴まり、勝ち誇つた敵の慈悲心に依つて救ひ上げらるゝ、蟲のいゝ機會を待つ者があるかと思ふと、最う少し酷いのは、轉覆した艦の中で窒息して死ぬ者などがあるが、是などは馬鹿らしいことではないでせうか。イヤ、寧ろ戦慄すべき悲劇ぢやないでせうか。」

余は殆んど彼の聲が聞き取れない位であつた。余は彼を揶揄し始めた。
 「成程ね、君が死の形式をそれほど重大視するならばだね。海軍將校になる代りに、騎兵將校になればよかつた。聯隊旗を持つた儘馬上で討死するなどは、随分華々しいぢやないか。」
 「さうだね。」と隅の方からダブルユー大尉がいつた。「そいつが一等簡單でいゝね。然し死ぬるまでいやな思をしまいと思つたら、非常にいゝ方法がある。それは、短銃をポケットの中へ入れて置くことなんだ。」
 「君達は僕のいふことが解からないんだ。」とエヌ大尉はいつて一寸言葉を切つて、「僕はそんなことをいつてるんぢやないのだ。君等は單に不愉快な感を除かうとして居るのだが、それを除き得ないものがあるからね。一萬人——最う少し多いかも知れぬが、兎に角、二十歳から三十歳の間の露西亞人が一萬人以上も死なうとして居るんだぜ。それも戰場ではない。犠牲の祭壇に於てだ。彼等はさうだといふことを知らないで居るが、君等にはそれがチャンと解つて居るぢやないか。彼等は唯吾々に信頼して居る。然し、君、君等は彼等に今艦隊の立場を明かすことができるか。恐らくできまい? それぢや何うしたらいいかだ? 吾々は今彼等を暗黒界に導ひて居ると同じだ。吾々——彼等の嚮導者たる吾々は彼等の士氣を衰へさせる虞があるので、彼等に事實を暴露する

ことはできるものでない。實際、吾々の大部分はそれができないのだ。然し最後の日に彼等が吾々から説明を求めるやうなことがあつたら、吾々は何の言葉を以て彼等に答へることができらうか？」

「その時は彼等に吾々と同じく死ななければならぬといふことを告げるまでのことさ。そしてそれが罪悪者であるか、賣國奴であるかは、神様の判断に任すより外はないよ。」

何處からか若い聲で斯ういふ者があつた。

余は聲の主が少尉のゼット公爵であることを知つた。程遠からぬ處に小銃の臺尾で甲板を叩くやうな音がする。

「噫！ 噫！」といふやうな嗟嘆の聲が聞えた。

「オイ、最う止め給へ、衛兵が聞いてるせ。」

ビー大尉は英語で斯う怒鳴つた。

(五五) 吾々は一萬二千哩來た (後もう二千哩だ)

沈黙は再び永く續いた。海岸の方から強い朽葉の臭がして來る。大雷雨が來さうで却々來ない

遙かな暗い地平線の上には、凄惨な電光が曇つた空を鋭く射貫きつゝあつた。

「實に不思議な思想だ！ 馬鹿な思想だ。」

エヌ大尉は靜かにいつた。彼も半ば睡眠状態に在つたのらしい。次のやうな言葉が途切々々に聞えた。

「恐らくそいつは天氣の故だらう。吾々は最う一萬二千哩來た。あと最う六千哩だ！ 行先は何處か。肉架でもあるか。足を縛られて荷車で屠殺場へ運ばれる積を君は見たことがあるかい？」

彼奴等は最う自分の自由意志では何をすることもできないのだ。さうかといつて、ダブルユー君のいつた短銃は持つて居ないしね。昔、斷頭臺に上つた佛蘭西の一候爵夫人が、刑の執行者に一分間猶豫してくれといつたさうだが、一分間でも生きて居たい程彼女の生命は美しかったのだ。

然るに、吾々は——？ 吾々は積たること能はず、侯爵夫人たること能はず。だけれど、どうせ刑罰を受ける結果に於ては同じだ。それも場合に依つてはいゝかも知れない。それだからといつて態々そんなに遠方へ出掛ける必要があるだらうか？」

突如として満天を燦くかと思はるゝ大電光が閃いた。をどろ／＼しい雷の音が暫らく續いたと思ふと、聽て瀧のやうな驟雨が降つて來た。こゝ、上甲板には歡び叫ぶ聲が、裸足で駆ける無数の

登音の中に亂れて聞えた。人々は思ひがけなく待ち焦がれて居た淡水浴をやる事ができたので大喜びでガヤ／＼騒いで居た。

天幕を貫く利刃のやうな電光が、青白く其處に群がる人影を照らした。彼等はゴチャ／＼と天幕の外に立ち塞がつて、心地よい雨を剥き出した肌を受けて居た。彼等の立つたり、蹲踞んだり手を挙げたり、突き出したりして居る姿が、恰度、闇黒の中へ不意に幽霊が滅茶苦茶に踊り出したやうな具合に見えた。

「まるで百鬼夜行の體ぢやないですか。」

ダブニュー大尉は余に向つて話しかけた。余は彼の聲のする方を振り向いた。途端に次の電光がピカリと彼を照し出した。見ると彼は丸裸體で艦載小蒸汽艇の上に立つて居た。

「さうとも？ さうとも？ 君は旨いことをいふよ。して君は何の役をやつてるんだい。」

「無論、フォーストの役ぢやありませんね。」

闇の中から戯談のやうにいつて、

「何しろ今の場合ぢやメフキスヘルスだつて構ひ付けぢやアくれないますからなア。」

（五六） 提督と水兵の精力充實（玉菜の必要は玉菜で充たせ）

糧食庫から鼻を突くやうな不愉快な臭ひが漏れるので、鹽漬肉の樽を出して開けて見ると、すつかり腐敗してまるで鼻向もならない。殊にそれが一樽や二樽でない、殆んど總ての樽に腐敗の徴候が見えて居たので、今度はそれをボカ／＼海の中へ投げ捨てる騒ぎだ。イールチツニューが一萬二千足の長靴を積んで來てくれて、石炭積載に不自由をしなくなつたと思ふと、直ぐ此體態で悲惨なこと夥しい。

鹽漬肉は航海中は勿論、浦鹽斯德へ着いてからも、水兵に食はせることができるだけ積んで居た。當時浦港では一般に食料品が缺乏して居て、陸軍への供給すら不自由で、鐵道輸送の如きは全然信頼するに足りないといふ情報があつたので、それに應ずる爲めに餘計に用意をした故もあるが、提督が水兵の健康を慮つて、ノシベ砲船中糞澤な生糧品ばかりを彼等の食卓に上せて、些しも貯藏品に手を附けなかつたことも、慥かに腐敗の原因となつたのである。

提督は水兵の精力を充實することに周到な注意を拂つて居た。が、彼の麾下の大艦隊に悉く生糧品を供給するといふことは、却々容易なことではないのだ。若し艦隊がノシベに長く碇泊す

るといふことを商人が豫斯して居れば、彼等はどんなことをしても供給の方法を講じたのであらうが、提督がノシベに來てあれほど永く碇泊するといふことは、思ひがけないことであつたものだから、マダガスカル海岸や亞非利加東海岸の各港から、引掻くやうにして群めた糧食を艦隊に供給して居た。それでも、到底莫大の需要を充たすことはできないので、利に敏い商人等は歐羅巴の市場へ注文して、財布の底を重くする苦心ばかりして居た。

然し、生肉の供給だけは潤澤であつた。何故なればマダガスカル北部の平原が、絶好なる牛羊の牧場であつたからだ。彼等牧場主は牛や羊が高い値でドシ／＼賣れて行くので、何れもホク／＼喜んで居た。其代り野菜の産額が少いので、従つて価格は驚くべく高いものであつた、鳳梨や芭蕉果や、其他の熱帯性の果實は澤山あつたが、それ等は露西亞人に無くて叶はぬ野菜汁の材料にならない。玉菜や馬鈴薯も珍しければ玉葱やスピナも此地の氣候では、旨く生きないと見えて非常に稀であつた。で、是等の野菜類は南部亞非利加——其處の高原には歐羅巴の野菜が潤澤に生きる——の諸港及び歐羅巴から、それ／＼適當な貯藏法の講じてあるのを購つたので、価格はかなり高いものであつた。それでも、到底必要な需要を充たすことはできなかった。さういふ風であつたので、吾々は物資の供給の自由な處に居ると同じ嗜好を満足させることは

できなかった。吾々は已むを得ず代用の材料で我慢をしなければならなかつた。尤も代用される材料は、固有の材料よりも、其量に於て優つて居た。例へば玉菜の代りにマニョカを用ふるにしても、代用材料のマニョカは玉菜の量の三倍はあつた。粥にする黒麥の代りには米が用ひられた。二月の初旬からコース・ビスケットとライ麥粉とが、嗜好品として貯藏されるやうになつた。蕎麥粥の代りにマカロニを食はせると水兵等は、大牢の美味でもあるかのやうに舌鼓を打つて喜んだ。

或時、提督の命令で面倒臭い糧食船の供給係を行つて居たダブルユー中佐が、提督公室から出ると兩手を高く上げて、士官室の安樂椅子の上に轉げ込んで來た。

「ア、やりきれない、水を一杯くれ——。」

「何うしたんだい？ 何うしたんだい？」

其處に居た士官は笑ひながら中佐に訊いた。

「君なんか呑気に笑つてるが、吾輩の身にもなつて見てくれ。一體何うすりやいゝんだい？ 實はね、吾輩今提督にさういつて來たんだ。閣下、吾輩は科學を信すること聖書に異らないです。軍醫は營養上玉菜が非常に必要だといひます。無論我輩もそれに異議はありません。然し、玉

菜が若し聖彼得堡でアーチチョクスを得るよりも高價のものに付いた場合は何うしたものでせう。其時は蕪菁よりも安價い鳳梨で我慢するより外仕方がないでは無いませんか」とね。すると、閣下曰はくさ。「そりや或はさうかも知れないのう。が、玉菜の必要は何處までも玉菜で充たさんけりやならんのぢや。價格が高いといふのか？ それが何ぢや。此場合に於ける兵員の健康は何物よりも貴重なものぢや！」斯うなつて來ると、挨拶のしやうがないぢやないか。そりや、閣下が斯ういふのは造作もないことでもあるし、自分自身が劈頭第一に死ぬものと覺悟して御座るからそれでいゝやうなものゝ、若しも吾輩が生き残つたとしたら、此事だけは海軍當局へ報告して置く必要があるだらうぢやないか！」

(五七) 何？ 至急出港だ？ (艦隊の夢は醒めた)

三月十五日。小蒸汽艇隊の夜間哨戒運動を終へて「スワロフ」へ歸艦つたのが午前六時、余は給仕に晝餐まで起きないやうにいひ付け、夜氣に打たれて疲れた體を寢臺の上に横へると、其儘誘ひ込まれるやうな熟睡に陥つた。

と、午前十時頃であつた。何となくザワ／＼するやうな氣配がするので、余は不圖深い熟睡か

ら醒めた。そして凝乎と耳を澄ました。

と、上甲板から艦長の號令を下すが、意識を恢復したばかりの鼓膜へ鋭く響く。艦側を通る小蒸汽艇からも、誰だかメカホンで「スワロフ」の上甲板へ話しかけて居る。副長が給仕の後を追ふて士官室を駆け出した様子だ。ステアレーヂで誰だか石炭庫係の機關士を見ないかといつて通る奴を悉く捉へて訊いて居るのも聞える。

で、是等の雜然として騒音に混じて、階梯を昇つたり降りたりする蹺音が、旋律のない野蠻人の音樂のやうに、余の意識を段々明晰と甦らすのであつた。

何事が起つたのだらう？ 尋常事ではあるまい！ が、人々の叫喚も蹺音も、昨日つ大驟雨の中に起つたやうな規律のないものではなくて、何うも特別の意味が表現されてあるやうに思はれてならないので、余は眠つて居るどころの騒ぎでない。跳ね起きて軍服を着け、脱兎のやうに船室を出たが、其途端にイヤといふほど機關長に衝突かつた。

「オツと危い！ 全速力後退だ！」と余は笑ひながらいつて、

「時に、何事が起つたのかい？」

「至急出港だ！」

「何？ 至急出港だ？」

「そんなことをいつてる暇がない！ イヤ失敬！」機関長は斯ういつて駈出して行つてしまつた。余は士官室の方へ急いだ。と、又向ふから息せき切つてやつて来る副長に衝き當つた。彼は一言二言何かいつて、忙がしさうに階梯を降りて下甲板に姿を消した。

士官室にはビー大尉が居た。彼は自身で恰度巻き終はつたばかりの、太い巻煙草をブカ／＼と喫んで居た。余は彼を捉へて訊いた。

「オイ、君、君、一體何うしたといふのだ？ 悉皆氣でも狂つたのぢやないかね？」

「ところが、氣も狂ふだらうぢやないか？ 艦隊は是から出港するといふんです。」

「出港？」

「さうです？ ネボカトフ提督に追付かれぬやうにね？」

「吾輩今起きたばかりで何が何だか藩張解らん。一體何ういふ譯なんだ？」

「昨夜、糧食船の「レヂナ」が入港つて來たんです。主計官が分配監督の爲に「レヂナ」へ行つたのが彼は拂曉でしたらう。と、不意に各艦は二十四時間内に「レヂナ」から、必要の糧食を積み取れといふ命令を受ける。それから、不用品は特務船へ積載するといふ騒ぎで、何が何だか些とも解

らない。——餘りに突然だものですから、面喰つて口も利けないやうな譯でした。すると、出港用意といふ騒ぎなんです。何が何だか一寸も解らないので、吾々は顔を見合はせたなり言葉も出ないやうなことでした。ところが、ハヴァスからの電報で、「ネボカトフ提督の艦隊がクリート島で急速に石炭を積み、今明日の中にポートセッドに入港するだらう」といふことを知つたので、初めて至急出港の理由が解つたので、天手古舞を行つながら大に快哉を叫びつゝあるところなのです。士氣は大に昇りましたよ。オットしやべつて居る暇なぞはなかつた。何しろ仕事が出ほどありますからね。」

「フーム、そいのは急に面白くなつたね。昨夜の様子ぢやア、斯う突然に錨を抜かうとは思はなかつたが——。」

余は跳躍するやうな胸を押へて參謀會議室に行つた。と、此室は又裂れかへるやうな騒ぎである。ビー大尉のいふた通り手も足も踏ん込めない。余はエス大尉の手の隙くのを待つて居た。間もなく余は彼を船室に訪ふて、

「吾輩は君の忙しいといふことを能く知つて居るんだから、敢て秘密を探り出さうとするんぢやない。其邊は了解してくれないと困る。吾輩は唯簡單に艦隊がネボカトフ提督から通れやうとし

て居るか何うかを訊きたいのだ。」

エス大尉は例に依つて其事に就て直接な答へを拒んだが、其代り彼の個人的印象を余に對して物語つた。

「提督は到底僕等風情に其意圖を明かされるやうなことは決してないのです。従つて僕は何も知らんです。假令、多少知つて居たにしても、それをしやべることは絶対にできません。貴下も御承知の通り、提督がネボカトフ枝隊と合することを、望まないのは蔽ふべからざる事實ではあります。さればといつて、提督にはネボカトフ枝隊を追返す権限もなければ、其東航を禁止する職権もないですからねえ。ネボカトフ枝隊は聖彼得堡からの直接命令に依つて行動して居るので、提督はそれに對して一指も染むることができないのです。が、それが幸福であるか不幸であるかは別問題で、僕は唯今日どんな運びになるかといふだけをお話しやうと思ふので、それを知つてるのは僕一人ではないですから、無論秘密を意味して居ないものと見ることができたらうと思ふのです。提督がハヴァスから電報を受取られたときには、常例の通りそれを私室に持つて行かれた様子だったが、直ぐ出て來られたときには、ひどく懊惱されてるやうに見えまして。それで、出來るだけ早く石炭と糧食とを積んで、廿四時間内に出港するやうに命令を下され

たのです。僕は最初ネボカトフ提督の枝隊を、此所で待ち合はせて居るより、此方から出向つて途中で會合する爲めに出港するのだらうと思つたので、何人に會合地点と豫定針路とを電報したら、か訊ねると、提督は不審しやうに僕を見て、「何人にも知らせる必要はないのぢや」とキツといつてのけられたやうな譯で、僕は今艦隊が單に「東に向けて抜錨した」といふ意味を暗號電報に綴りつゝあるところなのです。」

「それぢや、針路も記されてなければ、何の海峡を通過するといふことも——？」

「さうです！ 絶対に——！ 唯「東に向けて」といふだけです！」

「併し、一體何うなるのだらう？ ネボカトフ提督は何を目的に進むだらう？」

「それです。それが唯一の問題です。僕は考へるに提督は本國政府がネボカトフの増援を無益だと悟つて、其枝隊をジブチーに留めて置くか、さもなければ、本國へ召還するだらうといふ期待をまだ捨てないで居るやうですがね。さうすれば本國政府は提督の本來の意見に従つて優勢な軍艦だけを浦鹽斯德へ強航させるか、それとも——尤も是は少し信じ難いが——波羅的艦隊の東航が無義意であるといふことを悟るの外はないのでせうと思ふのです。」

余はエス大尉が是程自信に富んだ口吻を漏らしたのを聞いたことがない。何れにしても全艦隊

は惰眠の状態から覺醒したのである。

「幸に天佑に依つて印度洋を超えることができたなら、西貢へ老朽艦を残して、全速力で北上するんです。何有、足手纏ひさへなければ、吾々は屹度浦鹽斯德へ入ることができに定つて居ますよ。」

エス大尉は斯う旗艦の士官室で語つた。然し是は「スワロフ」ばかりでない。どの艦でも同じやうな意見が行はれた。それは其日の午後二時、各艦から小蒸汽艇隊の艇長が余の許に集つて來たので知ることができたのであつて、彼等も各艦が悉く「スワロフ」と同じく士氣を興奮させて居るといふことを語つて得意の色があつた。

（五八） マダカスガル島出發（戦闘艦隊ぢやない船幽霊だ）

三月十六日、午後一時、艦隊は擧つて錨を抜いた。補助船隊はタンヂールでも混乱したが、此處では更に一層大仕掛けに紛雜したので、午後二時四十分、漸く航行序列を整へることができた。

午後六時、錨場を圍んだ島嶼や岸壁や珊瑚礁が視界の外に去つた。艦隊はマダカスガル島の北

角に針路を定め、舳艫相銜んで黄昏の波に乗つた。と、不意に「アリヨール」の左舷機に故障が起つた。艦隊はそれが爲めに午後八時まで、殆んど同一の場所に漂泊しなければならなかつた。間もなく五哩の速力が出るやうになつたが、八哩半に増すことができたのは正子頃であつた。

噫！ 戦闘艦隊が聞いて呆れる！ 是ではまるで闇に浮んだ四十五隻の船幽霊みたやうなものである！ それとも、海上市街とでもいふべきであらうか。何國かの十八番の水雷襲撃には絶好の機會である！

吾々の種々な方面から受けた情報に依ると、英國漁船に裝ふた日本の假裝水雷艇が、艦隊の前途を窺つて居るらしかつた。潜航艇を伴ふた敵の假裝巡洋艦香港丸及び日本丸の二隻も、吾々を襲撃する目的で派遣されたのは事實で、セイチエル群島、デゴ・ガルシア、スンダ海峽などは、此怖るべき海上伏兵の、絶好なる陣地として目されて居たのである。

ノシベを出發するまでは、提督の意圖はスンダ海峽を通過して、スマトラのランボン灣で石炭を積み、水兵を休養させるといふにあつた。ところが、此豫定計畫は何時か敵國に漏れたと見え、日本は和蘭に向つて嚴重な抗議を申込むと同時に、若し同國が波羅的艦隊の碇泊を默許して、中立宣言を破るやうな場合には、日本は相當な報復の手段に出づるから、豫め其積りで居て貫

ひたいといふ懐い文句を並べたのだ。和蘭は日露兩國の間に板挟みの形となつたのである。何故なれば日本は和蘭をして、厳正に中立宣言を守らしむる権力と権利とを有つて居る。一方に於て露國は切實な必要から、和蘭の中立宣言などは平氣で破るやうなことをすると信じて居たからである。事實、吾々がランボン灣に寄港する決心を何處までも有つて居たならば、吾々の目的を達することは何でもなかつたので、亞非利加西岸の大魚灣で、偉大(?)なる小砲艦「リンボボ」が示した威力(?)を、あの當時と同じ程度に尊重して居れば、それで済むことであつたのだ。然し、唯茲に一つ大魚灣と異つた點があつた。それは亞非利加西海岸には日本艦隊が徘徊しなかつた代りに、爪哇、スマトラ附近では、何時敵が現はれて襲撃を加へるか解らないといふ懼があつたことである。若し吾々が強猛な敵艦隊の襲撃を受けるやなことがあつたとすれば、吾々が國際公法の神聖なる原則を汚瀆した劈頭第一の罪惡者であることを、世界に向つて公告するに均しいのである。して見れば、和蘭が露國に對して其領海を攪亂さるゝことを防ぐことができないとすれば、露國の世界に對する面目は甚だまづいものとならなければならぬ。

大陸の新聞は——露西亞の新聞を除いて——マダカスガルを出發した波羅的艦隊が、如何なる航路を擇ぶかといふことが、興味ある問題として取扱はれて居た。で、此事に於ける有名な各國の

提督——中には有名でないのもあつたが——の意見が、殆んど全紙面を埋むるばかりに掲載されてあつた。然し、何人もスンダ海峽通過説を唱へるものはなかつた。マラツカ海峽の如きは問題にもならないほどで、多くは爪哇の南方を迂回し、ニュギニアと濠洲間に横はるトーレス海峽を通過するだらうといふ説に一致して居た。英國で有名なフリーマントル提督でさへ、「自分が若しロジエストーンスキー提督の立場にあるならば、艦隊を提げて濠洲南部の迂回航路を取る。此航路は距離に於て不利益な點がある代りに、艦隊の安全は充分に確保される見込がある。殊に露國に對して厚意を有つて居る、カロリン群島中の獨領に寄港して、北航の準備を整へることができるとの特典がある。」と主張して居た位であつた。

然るに余等は艦隊が外洋に浮び出た後に於て、ロジエストーンスキー提督が、斷然マラツカ海峽を通過する決心を有つて居るといふことを聞いた。

旗艦「スワロフ」には歡呼の聲が湧き立つた!

「一面からいへば無論冒險だ。けれども、斷じて行へば鬼神も避くでね。慥かに成功するさ。狡猾な日本人はまさか提督が、そんな暴虎馮河の勇を揮はうとは、思ひも寄るまいからねえ。萬一是が成功して見ろ! 功名手に唾して爲すべしだ! さうなつた日には、大陸の新聞に勝手な誤

託を並べた、フリーマントル等一派の提督連は、開いた口が塞がるまいテ！」
士官室では斯ういつて居た。余も全く是と意見を同じうして居た。
四十五隻から成る大艦隊が、二十八日を費して茫漠たる大洋を横断するといふことは、蒸汽航海史上、前古未曾有の企圖であつて、慥かに世界に誇るに足ると信する。で、極く簡單ではあるが日を追ふて此間の事を叙することにする。然し、其前に艦隊の生活状態に就ての概念を、讀者諸君に與へて置くことが必要だと思ふ。

余が幾度か繰返していつたやうに、水兵の訓練には慥かに蔽ふことのできない缺陷があつた。で、此缺陷を補ふ爲めに石炭積載の時間を除くの外、毎日の日課は殆んど戦闘操練ばかりで充たされた。就中照準と距離測定には嚴密な練習を強いたので、それが爲めに、「アウラ」、「ドンスコイ」、「ゼムチュグ」、「チヅムールド」、「ドニエブル」、「リオン」の諸艦船は毎朝艦隊の兩側に位置することを命ぜられた。それは針路と速力を絶へず變じつゝ、艦隊の爲めに標的となることが爲めであつた。

それと同時に吾々は標的として前衛偵察枝隊をも利用した。同枝隊は晝間シエイン大佐指揮の下に特別訓練を受けつゝあつた。そして是等十隻の艦船は、絶えず艦隊の視界の内に在つて、充

分信頼するに足る艦隊の防護障壁となつて居た。

(五九) 印度洋上の警戒航行 (荒天は吾々を敵の襲撃から救ふた)

三月十七日、夜は静かな裡に更けて行く。

が、提督は艦橋に立つた儘一睡をも貪ばらなかつた。航行席列は不規則極まるものであつた。それが爲めに提督は絶えず信號で各艦の注意を促して居た。或艦は著しく落伍し、或艦は艦首を席列の外に突き出し、或艦は衝角で前續艦の艦尾を脅かした。

午前八時、マダカスガルの北方に達したるとき艦隊はセイチエル群島の南へ針路を定めた。午後二時、マダカスガルの島影が模糊として視界の外に消えた。間断なく機關に故障を生じたので、航程は非常に後れた。併し故障の性質は些細なものであつた。長く碇泊して居た後に航海すると、斯ういふ小故障が續出するもので、二三日も経つたら調子が好くなる筈である。日没前、左舷後方の地平線の上に、雲を望んで昇る淡い五六の煤煙を認めた。提督は直ぐ驅逐艦を派遣したが、それは獨逸汽船であつた。

三月十八日、午前二時三十分、余は不意にザンプと水を浴びたやうな心持がして、ハツと深い

夢に入つた熟睡から醒めた。見ると開け放たれた舷窓から、印度洋の波が躍り込んで居るのだ。余は一旦船室を去つて、潮水の乾くのを待たうと思つた。ところが、それが駄目だ。雨が降つて上甲板に上ることができない。

午前六時、豫定計畫に依つて、各驅逐艦は特務船に曳かるゝことになつた。曳索をとるのに一時間半を要するので、其間艦隊は機關の運轉を中止して漂泊した。午前八時、再び進航を始めたが、混亂した序列は殆んど收拾することができなかつた。大袈裟にいへば各艦は隨意の針路を進んで居るやうであつた。各隊の嚮導艦は機關を停止して、陣形の整ふのを待たなければならなかつた。

午前九時頃、漸く序列が整ふたので、艦隊は再び進航を始めたが、不意に「イルチツシュ」の曳索が切斷した。吾々はそれが爲めに一時間の漂泊を餘儀なくされた。十時から十一時の間に於て、艦隊の速力は八哩に増した。と思ふと「シンイグエリキー」の舵機が破損した。

同艦は直ちに列外に去つた。けれども、兩舵機を巧みに運轉して、進むことだけは進んだ。其代り速力は五哩より出なかつた。それも、「シンイ」に取つては少し苦しいかと思はれた。

午後一時から二時の間に於て、艦隊は「シンイ」を待合はせる爲めに漂泊した。午後四時、舵

機の故障が漸く修理されたので、艦隊は速力を八哩に増した。

余等は愈々斯うして敵に近づきつゝあるのであるが、余は水兵等が多少の不安に襲はれつつも、少しも恐怖して居なかつたといふことを喜びたい。是が全艦隊の現象であつたか何うかは知らないが、少くとも「スワロフ」だけはさうであつたといふことを斷言する。それも艦隊が世界の一端から切り離されて、風浪の音を除いては何物も人々の耳を煩はすものがなくなつたからで、怒り碇泊して種々の忌はしい風説や情報が傳はると、人々は唯徒に氣を腐らせるばかりであるのだ。それよりか、何事も聴かないに限る。吾々は日々の義務を怠らないで、神の御旨にさへ従つて行けばいゝのである。

三月二十日、紺青の大傘蓋が波靜かな印度洋の上に押つ被さつて居た。吾々は唯一度極く短時間漂泊したきりであつた。それは驅逐艦「プレスチャスター」の曳索が外れたが爲めであつた。過去二十四時間の航程は百八十七哩で、一時間の平均速力が七・八哩である。

三月二十一日、午前五時四十五分、旗艦は全艦隊に對して、
『石炭積載を開始せよ。』といふ信號を掲げた。

午前七時十五分、石炭船から石炭をいづばい積取つた短艇が還つて來た。それから午後四時迄

積めるだけ積み取つた。短艇を全部揚げ、序列を整へて進航を始めたのが、彼は午後七時であつた。漂泊した時間が十三時間と十五分とである。此内八時間と四十五分だけ石炭積載に費されたので、残餘の四時半だけ其準備と、航行序列の整頓とに費された勘定になるのだ。「スフロフ」は二百噸を積み取つた。即ち一時間の積載力が二十四噸になる。

一時間二十四噸といへば餘り大した積載力ではない。極く輕微な西風と幽かな長濤があつたので、都合の好い状態に於けるものとしては殊にさうである。然し、洋上に於ける石炭積載は是が初めてであつて、成績の擧るのには將來に俟つより外はない。

午後十時頃、吾々は左舷及び艦尾の方に當つて數個の燈光を認めしたが、間もなくそれは視界の外に去つた。水雷士官は無線電信機が不明の通信を感じたといつたが、それは多分空電であつたらう？ 然し、果してさうであつたか何うかは解らなかつた。

三月二十二日、曳索が屢々外れかゝつた位のもので、新奇の出来事は些しも起らなかつた。

三月二十四日、日没後、「オレーグ」が制規の燈光を點じない數隻の船影を認めたと報告した。

同艦のいふところに依ると、それが敵の驅逐艦であるらしいので、提督は月の昇るまで總員を戦闘配置に就けた。が、何處にも怪しい物は見えなかつた。恐らくそれは錯覺的幻影であつたらう。

三月二十五日、夜間「カムチャツカ」が機關を故障を起した。然し、それは間もなく修理された。「シナイヴエリキー」と「ナヒモフ」二艦の復水機管に漏洩を生じた。二十四時間の平均速度は七哩半であつた。ニコライ・ウゴトニツクは艦隊に恵むに、二十二哩の追潮を以てした。空は曇つて居たが海は静かであつた。

三月二十六日、正午位置はチャゴス群島中のペロスパノスから二百哩の南方にあつた。明日はアヅ・アートルを六十哩の距離に見て通過する筈である。此島は日本に取つて絶好なる水雷艇の潜伏地である。日没頃から疾風が闇に荒れて、波の音が騒がしく聞えた。ア、此天候こそ正に天の賜物ではあるまいか。日本人が如何に大膽であつても、此天候では航海しつゝある吾々を襲撃することは全く不可能である。

三月二十七日、暗黒の波を煽り立てた風は、朗らかな曉の色に追はれて、緩やかな長濤を名残りに、何處ともなく消えて行つた。

午前中行はれた艦隊運動の結果は左程拙くはなかつた。いつも見るに堪えない醜態を演ずる艦があるのに、此日は些の紛糾も混乱もなかつた。練習と經驗の効は顯著ものである。吾々はそれに依つて何事か學び得るものである。追潮を受けなかつた爲めに、廿四時間の航程は僅かに百

六十五哩を超えなかつた。日が暮れてから遙か前方の地平線に當つて、數個の燈光を認められた。

三月二十八日、地球表面は吾々艦隊を除いて、總ての生氣を失つたやうに靜穩であつた。あるかなしかの長濤が幽かに「生氣の絶滅」を否定するやうに動いて居た。午前六時、全艦隊は此處に於てしたやうな平波の上に漂泊して、吾々の「使命の糧」ともいふべき石炭を積み始めた。此處にも練習と經驗の効は現はれた。各艦の積載力は殆んど倍加された。「スワロフ」の如きは一時間四十噸を積み入れた。

航程百四十四哩、北方の逆潮流があつた爲めもあつたが、一晝夜百四十四哩の航程は、望ましくない結果である。が、それも自然力の反抗であつて見れば仕方もないのだ。

（六〇） 海峽の強航通過（英國汽船の蔭に隠れた敵水雷艇）

三月二十九日、曉の雲は平和の色に照り榮えて、吾々をして流血の悲劇に加はる過程にあることを忘れしめた。

艦隊は一齊に漂泊して石炭を積み始めた。餘り高くはないが週期の短かい長濤が、洋上を縦横に入り亂れた各艦の小蒸汽艇や短艇を翻弄した。「シソイヴエリキー」の小蒸汽艇は、此長濤に煽

られて母艦の舷側で沈んでしまつた。然し何人も此不幸な小蒸汽艇と運命を共にするものはなかつた。

罪は長濤にばかりはない。小蒸汽艇の片舷が防禦網桿の附根にかつたのは、艇員の操縦が不注意であつたが爲めで、反對舷から起つた長濤はそれを知らずに掬つたのだ。顛覆は此場合に於て、蓋し免かれべからざる運命であつたのである。艦隊は石炭を積み終つて、莊嚴な序列を作つて進んだ。ソヨ〜と波面を撫でた微風は、日没が近づいて大氣が黝んで來ると、急に活動の舞臺が幕開きになつたやうに、悽慘な疾風と變つて過敏になつた人々の聽覺を煩はした。

噫！ キルルウラヂミール太公が 旅順黄金山上に親ら露國々旗を樹立てから、今日で恰度滿七年目である！ 何といふ憂鬱な記念日であらう！ 當時皇帝陛下は宣ふた。

「吾が露西亞國旗の一度樹立られたる處は、如何なる敵國と雖も決して攻撃する能はず。」

噫！ 此大御言葉は忘れられてしまつたのか！ 「露西亞國旗の一度樹立られたる旅順は」渺たる極東の一小島帝國の爲めに、無残にも屠り盡されてしまつたではないか！ 噫！ 痛ましくも

悲しき限りではないか！

吾々は此憂鬱の記念日を印度洋上で迎へたとき、總て露國の歴史を汚瀆した惡魔——日本人で

あると露國人であることを問はず——に對する、限りなき怨恨と復讐の情を新にしない譯には行かなかつた。

三月三十日、吾々はいゝ鹽梅に午前の内に石炭を積み終つた。午後は北西疾風が吹き出して、大洋の浪が切りに荒れ狂ふた。

四月五日、午前九時、吾々の視界にニコバル島が現はれた。艦隊は針路を此島とプロ・プラスの間に定めた。吾々は愈よマラツカ海峡に近づいたのである。日本人は艦隊と接觸を保つて居るだらうか？ 若し敵にして吾々に乗ずる意志があれば、其機會は幾つもあつたのだが——。

正午頃、艦隊はマラツカ海峡に乗り込んだ。そして針路をスマトラの沿岸に取つて進んだ。

氣温は四度ばかり昇つた。と同時に、濕氣が著しく加はつた。息塞りのするやうな不愉快な天候であつた。

敵が假令吾々と接觸を保つて居るにしたところで、何人も此近傍で其主力に遭遇さうとは想像しなかつた。勿論敵が其根據地から遠ざかるといふことは、大した冒險ではないに相違ないが、どのみち吾々は其處へ進んで行くのだから、敵は吾々を邀撃する爲めに、此邊に陣客を整へるやうなことはしまし。其代り水雷艇の襲撃は豫期する必要があつたのである。で、是に對して艦

隊は海峡を下のやうな航行序列に依つて通過することにした。二列縦陣の特務船を中央にして、其左右兩側を戦闘艦隊で護衛し、「ゼムチュエグ」、「イヅムールド」の二艦を前衛偵察艦として、遙か前方に位置を取らしめ、曳索を遣り放した驅逐艦の一隊は自力で汽走して豫定の位置に就かせられた。

午後八時三十分から十時四十分まで、「アリヨール」の蒸汽輸送管が破裂したので、警戒を嚴重にして不安の海峡に漂泊した。

四月六日、夜は静かに明けた。視界が濃氣に閉ざされて、夢の國を彷彿ふやうに思はれた。聴て午前八時頃雨が降り出して、雷霆がをどろ／＼しく鳴り響いた。然し、それも直き止んで、雨も又乾いたやうに霽れた。

まだ夜の明けない内に、吾々は一隻の汽船に遭遇した。同船は「ゼムチュエグ」が探海燈の電光を浴びせかけたとき、巧みに其針路を變へた。

夜が明けてからは無数の汽船を見た。それ等の汽船の行先地は何處だらう？ そして何時頃手近な寄港地に着くだらう？ いひ換れば吾々の、マラツカ海峡通過が何時頃世界に發表されるのであらうか!? 若し日本人が今まで吾々の行動を知らなかつたにしても、それに依つて吾々の意

圖を知ることができれば、尙ほ充分吾々に對して取るべき途はある筈だ。
四月七日、風も浪もない暗い海の上に、煙のやうな霧が低く降りて居た。吾々は其間から無数の船舶を見た。人々の感情は宛ら眼前に敵を見たやうに興奮して、細肥の總てには緊張した力が充實して居た。

「アルマーズ」から信號があつた。それに依ると、同艦は十二隻の日本驅逐艦（或は水雷艇）が英國印度會社の汽船の陰に潜伏して居るのを明らかに見たといふのである。此信號のあつたときには、艦橋には提督も艦長も其他の多くの士官も居たが、孰れも其信號に軽々しい信用を置く者にはなかつた。而も其日本驅逐艦は北東に向つて去つたといふのだ。或は敵が驅逐艦を派遣して吾々に其本隊の接近を豫測させやうとする一種の示威運動であつたかも知れない。でなければ、さうした驅逐艦の行動を説明すべき途は外にないのだ。

「オレーグ」は他の各艦よりも度々不思議の幻影に惱まされた。同艦は潜航艇をすら見たといふことを報告して居る。

午前二時、吾々は「一尋海岸」を通過した。自分は此處が水雷襲撃に持つて來いの場所であると考へて居る。夜が明けるまで、吾々は屢々海峡が五哩以内に狹まる海面を通過しなければなら

ぬ。何たる危険な夜だらう！

四月八日、吾々は幾度か汽船に行き會つたが、些しも訝しむべきものを見なかつた。狹水道は總て過ぎた。艦隊は新嘉坡に向ひつゝあるのだ。島は幾つも連つて居るが海は深い。殊に海上は戦闘の餘裕も充分である。日本艦隊は何時現はれるかも知れない。

艦隊は特務船隊を後尾に位置させて、海峡に入る以前の固有隊形を形造つた。此隊形は戦闘陣形に移るに便利であつた。

午後二時、艦隊がラツフル島の燈臺を過ぎると、新嘉坡がパノラマのやうに吾々の視界に擴がつた。艦隊は二隻の英國巡洋艦と遭遇した。是等巡洋艦は吾々の行動を監視する爲めであつた。艦隊の陣容は實に莊嚴なものであつた。一隻の落伍する者もなく、整々乎として舳艫相銜み、初めて目指す太平洋の波に浮んだのである。此刹那！人々は何となく胸の迫るやうな思ひをした。屈辱も光榮も、今や眼前數歩の間にあるのだ。何人の心臓も興奮に躍つた。全艦隊として一語を發する者もなかつた。

「艦隊の行動は直ぐに全世界に知れ渡るのぢや。」
艦橋に立つて遙かに新嘉坡を望みつゝあつた提督は、こゝろもち聲を顫はせて斯ういつた。

「フリマントル先生怒つてやしないかい？ 全く突如にマラッカ海峡を通過するなんて悪いよ。奴さん今頃吾々が濠洲の南にあるとばかり思つて居るだらうに、フン、古狐奴！」

艦長ゼー大佐が斯ういつたときには、其處に居た者で腹を抱えて笑はぬ者はなかつた。

人々は全く不意に快活な情調に襲はれた。信號兵までもニヤ／＼笑つて居た。彼等は上官の顔を憚つて、無遠慮に聲を出すやうなことはしなかつたが、彼等が艦長の絶妙な諧謔に對して笑神経を唆かされるのに無理はなからう。

此時、露國領事旗を掲揚した小蒸汽艇が、新嘉坡から出て来て吾々の航路を遮つた。艦隊では領事を艦に迎へて、種々の情報を聞きたいのは聞きたかつたが、さうするには艦の運轉を中止しなければならぬ。で、驅逐艦を其小蒸汽艇へ近づけ、速力を緩めて領事の手から、書類を受け取る外仕方がなかつた。

小蒸汽艇は一個の包装を驅逐艦に渡すと、速力を疾めて艦隊に追ひ付き、暫らく「スワロフ」の艦側に沿うて、吾々の北航を送るやうに見えた。領事はメカホンで、

「集められるだけの新聞を大急ぎで集めたのだが、或は多少の手落があるかも知れん。」といつて念の爲めに主な出来事を附け加へた。

それに依つて、日本巡洋艦隊が三日前に新嘉坡に入つて、今ボルネオの北方に居るといふことが解つた。して見ると、敵は吾々をむざ／＼と見落したものと見える。

午後七時、艦隊はベドロ・ブランコ島の燈臺を過ぎた。茫漠たる南支那海が豁然として吾々の視界の前に現はれた。

(六一) 戦争と有機的生活 (基督教徒と戦争)

四月九日、曉は平穩の間に來た。午前六時、全艦隊は擧つて漂泊した。驅逐艦は最早曳行されることができなないので、總ての此處で石炭を積み取つた。午前十一時、艦隊は進航を始めた。人々は益々緊張した氣分に襲はれた。

四月十日、午前二時、昨日晝間餘り能く睡つたので、何うしても夢に陥ることができなかつた。日本人は無論吾々を搜索することに努めて居るだらうが、それにしても明日までは大丈夫であらう。吾々は今ラブアンの南六百哩にあるのだ。

どうせ戰場は吾々の眼前にある。余は注意して余の思想を書き留めて置くと同時に、戦友十官の會話を窺つて、艦隊の精神状態を知らんことに力めた。が、それは安外に勇氣に富み且つ冷靜

なものであつた。

彼等は全く冷静に過ぎるほど沈着であつた。彼等は来るべき運命に對して全然無關心であるやうに見えた。然し要するに運命其物は彼等の眼前にブラ下つて居るのだ。

斯の如く彼等が平気で居ることのできた原因は、恐らくは過勞の結果であつたかと考へられる吾々の肉體は實際困憊して居た。吾々の精神は弛んで居た。何して息を吐く暇もないのだ。最後の日が來ればそれは早い方がよかつたのだ。

が、不意にマダカスガルを出發したといふことは、人々の心をどんなに引立たせたか解らない加之、殆んど全世界の輿論が不可能としたマラツカ海峡の通過に成功してからは、全艦隊の士氣は俄然として昂つた。さりながら、余が前にいつた通り、人々の肉の力は消耗せんとして居た。間斷なき警戒と訓練と勞働とは、シヨベルで土を削り取るやうに、人々の肉から力を運び去つた。著しく目に立つた人々の静平と無關心と斷念とは、肉の力の缺乏した結果であつて、若し一旦敵彈の洗禮を受ける時には、彼等の勇氣は勃然として頭を擡げるに相違ない。それでこそ吾々は戦争ができるのだ。

敵は目前にある。吾々は各自の力を信じ過ぎてはならない。何故ならば今や將に盡きんとして

居るからだ。で、余は休養の無聊を慰める爲めに、南亞戦争に従軍したと思はる、ジョンソンといふ人の著はした「アブラハムの犠牲」といふ小説の露譯を讀んだ。それを見ると不思議にも余の旅順に於ける經驗と一致したことが書いてある。殊に始めて敵と遭遇した後の情調が能く出て居る。例へば負傷者に對して「オ、！」とか「ア、！」とかいつて同情が注がれることが書いてあるが、是は旅順に於ても余の心を深く刺激したことであつた。余は將校に就ては何事もいはない。彼等は好んで戦闘に加はるやうな職業を擇んだのであるから、其肉に剝られやうが、屍を野末に曝さうが、それは初めから豫期された必然の運命であるのだ。が、兵士はさうでない。彼等はイヤ／＼ながら召徴されて、餘儀なく戰場に追ひ遣られ、それで理由も解らないのに、知りもしない敵と戦ふことを強ひられるのだ。で、若し赤熱した敵彈に肉を削ぎ取られて血に爛れた軀を病院に横へると、看護婦といふ奴が、やれ茶だ、菓子だといつて、無暗に兵士の御機嫌を取らうとする。

『ほんとにまアお氣の毒ですことねえ。』

這麼事を彼女等はいつてはチャホヤする。余は茶とか菓子とかに就て彼はいはうとは思はないが「ほんとにお氣の毒ですことねえ」だけは、慥かに偽善的同情であることを斷言する。斯うい

ふ憐憫は負傷者に對する侮辱といふべきである。
 『今になつてチャホヤいつたつて最う遅いぢやないか。斯うなることは初めから解つてゐるんだ。馬鹿々々しい。そんな管らないことは廢して貰ひたいね。やれ「氣の毒だ」の「憐憫さうだ」のといつて、涙をこぼしてゐる奴等が、兵隊の大事なことを知つてたら、初めから最少し氣を付けりやいぢやないか。』

同情と憐憫に對して、斯ういはれても無理はあるまい。全く其通りである。「最う少し氣を付ける」がいのだ。然し氣を付けたからといつて、全然戦争を避けることはできない。言葉を替へていへば幾千幾萬の人間の生命を奪ひ、手足を断つやうな悲劇を除く譯には行かない。

余は平和論者の説に同意することはできない。戦争は有機體の生活に必要なものであつて、無機的生活を行つて居る地球に時々地震のあるのと、全く其意義を同じうして居るのだ。「アブラハムの犠牲」の著者ジョンソンは、全く戦争の意義を解することができないのだ。

「眞摯な基督教徒をして其隣人を殺す爲めに戰場へ出させることができるか。」

彼は斯ういふことをいつて居る。つまり此思想が全篇に漲つて居るのだ。彼の著書は基督教的非戦論の表現と見るべきものであつた。彼は聖書の中から無數の例を引いたが、それは悉く矛盾

せるものばかりであつた。

一面に於て、吾々は教會で兵士が忠義を誓ふのを認める。彼等は軍律に依つて教會で祈禱を捧げて居る。のみならず、彼等は「敵を全滅し破壊せん」ことを祈る特殊の教會さへ有つて居るのだ。が、他の一面に於て聖禮に加はる前、復活祭の行列に加はる時、聖衣に禮拜する爲めに祭壇の前に跪く時などには、兵士は必ず其武裝を解かなければならぬ。此事は聖場に劍の存在を許さないことを意味するのであらうか。若しさうであるならば、神に向つて彼等兵士の祝福を祈ることはできない筈である。然し、考へやうを變れば此矛盾は直ちに除くことができる。

『外敵に對し其身を犠牲にして隣人を守るために、基督教徒を戰場に送ることができるか。』

斯ういへば答は自ら明瞭ではないか。

基督教徒は慥かに戰場へ赴くことができる。のみならず、さうすることが彼等の神聖な義務である。「其友の爲めに身命を抛つことほど大なる愛はない」といふことが神の御旨である以上は、基督教徒の武器を取るのに敢て不思議はあるまい。

民衆を亡ぼし、其財産を奪ひ、基督教の教義を破壊する戦争ならばいざ知らず。祖國を守り、祖國の利益の爲めに、其身を犠牲にする事は、愛と信仰の最も神聖な行爲といはなければならぬ。

(六二) 斷乎たる前進論 (俄羅苦多軍艦が待てるか)

四月十日、今朝、余は意外にも提督から參謀會議に招かれた。余の外には參謀長とエス大尉とが居た。余は提督が余を招んだのは、エス大尉が口添へをした結果であると思つた。

「諸君は何卒腹藏なく意見を吐露して貰ひたいものぢや。」と提督は親しげにいつた。然し、余に取つては、意見を吐くなどいふことは思ひも寄らないことであつた。余は艦隊の機密に與かる人間でもなし、唯、艦で他の士官よりも餘計に艦の事象を知つて居るといふものは、全くエス大尉が余に話してくれるのと、提督の食卓で種々な談話を聞くからであつて、惟幕に加はつた參謀連と共に事を談ずるといふことは全く寢耳に水とかいふべきであつた。

參謀長の意見は極めて漫然たるものであつた。余が判斷する處に依ると、彼の意見は艦隊は戰術的根據を固め、然る後に敵艦隊の情報に應じて、それに適應するやうに行動する必要があるといふにあるらしかつた。余は彼に「戰術的根據を固める」といふのは何うすることであると訊いて見た。

「いふまでもないさ、四月七日、ネボカトフ提督はデブチーを出發したといふぢやないか。」

參謀長はつ、ま、りネボカトフ提督の艦隊を加へて、然る後に敵に當らうといふのである。四月七日、ネボカトフ提督がデブチーを出たといふことは、新嘉坡領事が知らせたので――。

「それでは、矢張りお先眞暗運次第で、ネボカトフ提督を寄越したんだな？」

余は斯う叫ばざるを得なかつた。提督は顔を擧めて俯向いた。エス大尉は余の耳に囁いていつた。

「到底駄目ですよ。吾々は到底通れることはできませんね。本國の海軍當局には權力があるんです。兎角、弱い者は強い者には頭が上らんです。吾々は彼等に報告するだけで、吾々に命令するのは彼等ですからねえ。」

余は最うウンザリしてしまつた。それでは矢張りネボカトフ提督は東航の命令を受けて居るのだ。吾々は敵の嚴重な警戒を逃れることに成功して居る。けれども此上成功するか何うかは問題である。

吾々は五隻の戰艦と一隻の裝甲巡洋艦と二隻の輕快な小巡洋艦とを有する。假令老朽艦も全然勘定に入れないとしても、是だけの勢力は決して侮るべきものでない。然るにネボカトフ提督麾下の艦隊は、俄羅苦多軍艦の集團に過ぎないのだ。吾々は是を何う取扱ふべきであらうか。待

つか。そんなことはできるものではない。それでは、彼の自由意志に任せて、吾々は構はず進んで行くか。それも戦友に對して取るべき道でないやうにも思へる。が、それはそれとして、吾々が若し前進するとしたら、日本人はネボカトフ艦隊を追撃する爲めに、其勢力を二分するだらうか、余は恐らく敵がそんなことはしまひと考へる。

吾々が日本海で獲る成功が假令不完全なものであつても、日本に取つては尠なからぬ打撃である。若し敵がネボカトフ艦隊に備ふる爲めに、其勢力の一部を割いて置くに於て、形勢が不利であると解れば、ネボカトフ提督が何處か中立港に入つて武装を解除すれば、それで何でもないことだ。あの艦隊のことは運に任せるより外仕方がない。吾々は前進あるのみだ。例令、艦隊の安全は幾分か傷けられ、十分な勝利は獲られなくとも、浦鹽斯德に入ることができれば、それで敵に絶大なる打撃を與へたと均しい結果になる。前進だ、前進だ、吾々は唯之より外に手段も方法もないのだ。

余の決断は此點に到達した。提督は鉛筆で紙の上になにか書きながら、時々顔を上げて余を見た。それは明らかに余に答へを促す彼の表情であつた。

余は大膽にネボカトフ艦隊の來援を待つ不利を極言して、断乎たる前進説を主張した。余が

其夜記した日記には、

『吾々はマラッカ海峡通過の成功に依つて、昂然として緊張し來つた士氣の興奮を利用することを忘れてはならぬ。此精神状態は如何なる疲勞にも困憊にも打ち克ち、兵員をして大膽に強猛に健全ならしむることができるとだ。忌憚なくいへば此有望なる状態は決して永續するものではない。肉體的疲弊は當然其權力を要求するに定つて居る。精神的興奮が激しければ激しだけ、來るべき肉體的類廢も酷いと見なければならぬ。吾々は断じて躊躇することはならぬ。唯一の道は前進にあるのだ！ 前途に如何なる困難と危険と障害があつても、そんなことに構つては居られないのだ。』

余の次にエス大尉が彼の意見を隠すところなく吐いた。

『吾々が浦鹽斯德へ入る迄には、必ず勝ち誇つた日本艦隊と、一大決戦を交へなければならぬまい。いふまでもなく、日本艦隊は波羅の艦隊より優勢な旅順艦隊をさへ全滅の憂目に遇はして居る。吾々は最早長途の航海に疲れ、間断なき勞働に困憊しきつて居る。而も艦はといふと未だ一度も實戰の経験もなければ、戦慄すべき敵火の洗禮をも受けて居ない。明らかにいへば吾々は來るべき海戦に於て、假令全滅しないまでも、絶大な損害を蒙るものと覺悟しなければならぬ。或は

吾々は敵前通過を希望することはできやう、良好の天候も希望することができやう、又、敵の不注意と失策も希望することはできやう。けれども、成功といふことは断じて、吾々の希望を許さないものである。日本は總ての點に於て有利な地歩を占めて居る。其敵に對して成功を希望するといふ事ができるだらうか。或は敵火に碎かれる殘餘の艦が、浦鹽斯德へ入ることができるといふかも知れないが、さて其處へ入つたに於て、果して何だけの事ができるか。お互に順番の來るのを待つて、唯一個の船渠へ入つて修理を了へ、彈藥石炭糧食を補充して、活動の機會の到るのを待たうといふのか。西比利亞鐵道の輸送力は、浦鹽斯德守備隊の需品すら、辛うじて補給するに過ぎないといふではないか。そして其間特務船隊は何うしやうといふのか。ネボカトフ提督は厄介な考朽軍艦を抱えて、何うしたらいいといふのか。第二百四十四號の電文に書かれた海上權力の覇者には果して誰がなるといふのか。』

提督は黙して何事も語らなかつた。彼は余とエス大尉との互に相異つた二様の意見に對して彼自身の意見を基礎とした判断を加へやうとしなかつた。が、余には慥かに彼が余の意見に——或は余の誤解かも知れないが——同情して居たやうに見えた。彼はエス大尉の悲觀論を述べるのを、絶えず不審しげに見守つて居た。殊に彼の結論に第二百四十四號の電文を引用したときには、

(六三) 敵艦見ゆ！敵艦見ゆ！（幻影に驚いた哨艦）

四月十一日、午前六時、英國裝甲巡洋艦「グレッツセイ」が艦隊の右舷を反航して、提督に對し十九發の禮砲を發射した。旗艦でも直ぐ答砲を以て酬いた。

午前八時、今一隻の英國巡洋艦が左舷に現はれたが、彼艦は決して五哩以内には接近しなかつた。

吾々は此二隻以外に英國軍艦を見なかつたが、彼艦等と他の同國軍艦との間に交換された無線電信は、屢々「スワロフ」の受信機に感應した。無線電信の素養を有つて居る水雷士官は、ヅキゴーからタンジール及びダカールの間に於て、英國式無線電信に慣れて居たので、彼艦等が日本艦隊の爲めに偵察艦となつて居ることを、明らかな事實と認むる事ができたのである。

吾々は並航若くは反航する無数の汽船を見た。然し是は別に驚くに足りない。何故なれば此邊は新嘉坡、香港間の洋上公路であるからだ。

艦隊は准戦陣形で進んだ。此陣形であると敵と遭遇した場合に、咄嗟の間に戦陣形に變ることが出来るのだ。シエイン大佐の指揮下にある「スヴエートラナ」、「キユバン」、「テレーク」、「ウラル」、「ドニエール」、「リオン」の各特務船は、艦隊の前方に鶴翼を張つて、敵や見ゆると警戒を堅うしつゝ、波を蹴つて北上した。

午前十一時、提督は病院船「アリヨール」を西貢に派遣した。需品を補給する爲めである。船長はカムラン灣を會合地点として指令を受けて居た。若し「アリヨール」が同灣に艦隊の在泊を見なかつた場合には、有ゆる手段を盡して艦隊に關する情報を求むるか、左もなくば聖彼得堡に電報して艦隊の所在を覺かめ、旗艦に出會すべく最善を盡せといふ命令を受けた。

午後五時、「スヴエートラナ」から無線電信があつた。

「敵艦見ゆ！」

敵艦見ゆ！

全艦隊は直ちに戦闘準備を整へた。提督は「ゼムチユグ」と「イ

グムールド」の二艦を、「スヴエートラナ」に加はらしめたが、一向敵艦隊らしいものは見えなかつた。「スヴエートラナ」は明らかに何物かを見誤つたのである。

日没後、偵察隊指揮官シエイン大佐は、豫定の如く艦隊の前方を二列單横陣で進むべきを命ぜ

られた。「ゼムチユグ」と「イグムールド」の二艦は偵察隊の兩翼端に位置した。

「テレーク」からの無線電信に依ると、日没前、艦隊に同情を有する某國の汽船が、艦隊針路の東方に當つて、日本の水雷艇隊を見たまうである。して見ると、「スヴエートラナ」の見たのは或はそれであつたのかも知れない。

午後十時、「ナワリン」の右舷機に故障が起つた。全艦隊は速力を四哩乃至五哩に減じた。四哩乃至五哩といへば這つて歩くふやうなものだ。それでも「ナワリン」は落伍しやうとする。が、一時間の後には、故障の修理が成つたといふので、艦隊は速力を八哩に増したが、矢張り「ナワリン」は後れて、殿艦から二哩も後方を喘ぎながら跟いて来る。

四月十二日、「ナワリン」は修理に全力を盡したので、午前二時には序列の中に加はることができた。艦隊は原速九哩半で進航した。

夜は静かに曉に近づく。此朝全艦隊は漂泊して石炭を積んだ。余は不思議に思つた。次の寄港地カムラン灣までは僅かに六十哩を餘すのみである。石炭は外洋で積まなくとも、錨を投れて比較的樂に積み取ることが出来るのに、提督は何故殊更に洋上積載の困難を敢てするのだらう？

不思議だ？ 可訝しい？

加之、提督は此日、平生とは餘程様子が違つて居た。無論是迄とても間斷なく活動はして居たが、それがもつと激しい、猛烈だ。元來が口敷を餘り利かない人だが、今日は殊に堅く口を結んで一語も發しない。それでイラ／＼して非常に怒りばい。彼は始終落ち着かないで、足を引き擦るやうにして、其處邊中を駆り廻はつて居た。今前艦橋に居たかと思ふと、次の瞬間には後部艦橋に姿を現はす。さうかと思ふと、提督室に降りて行くが、又直ぐ上甲板に上つて来る。そして手帖を開いて見て何かそれに記入して憂はしく俯向いて黙想に耽る。かと思ふと、時々發作的に微笑を漏らす。然し、多くは沈んだ顔をして、くどくど何か獨語を始める。

「閣下は何うかしてやしませんか？ 顔面に虱でも這つて居るやうですね。」と、ダブルユー大尉は余に訊いた。

提督は艦隊が進行を始める前に、艦隊航海長と何か暫らく話して居た。然し、余等にはそれが何だか無論想像もつかなかつた。

艦隊航海長は急いで海圖室へ入つた。そして香港浦鹽斯德間の海圖を抽出しから引張り出した。彼は熱心に機關長と何か相談して居た。各石炭船の給炭量が調べられた。突如として全艦隊信號は旗艦の桁端に翻つた。

「各艦の汽機及び汽罐は能く長途の航海に堪ゆるや否や？」

各艦は是に對して短時間の猶豫を乞ふた。それは一應汽機汽罐の現狀を検査する必要があるからであつた。「ナワリン」だけは比較的長い猶豫を求めたが、それでも午後三時までには其結果を報告した。

余は艦隊の運命が吾々の運命に決斷を與へる時が來たことを悟つた。エヌ大尉もさう考へたこと勿論である。

「君は何う思うね？ 何だか閣下は浦鹽斯德へ直行する決心らしいぢやないか。何うもさうらしいぞ。日本人が吾々の踪跡を見失ふのは確かだ。假りに敵が吾々を追跡するとしても、何うする事ができるものか。恐らく英國艦隊は安南の沖合で吾々を見たといふ事を、明日は日本艦隊へ知らせるだらう。西貢には病院船「アリヨール」が入つてゐるしね。彼等も吾々が指呼の間に居ることを知ることが出来るらう。が、敵がそれに對する手段を講じたときには、吾々は最う臺灣を後にして居るからね。」

「仰有る通りです。前進！ 前進！ 我等は最う戦ふの外はありません！ 斯うなりやくづ／＼待つてなどは居んられませからね。そんなことをしたら大變です。兎に角、途中の何處でも石

炭を積まず、通信を交換することもなく、此儘此處から——吾々の今漂泊して居る外洋から、霧進に北進するです。」彼は斯ういつて西貢の方に拳を指し向けながら、

「恐らく西貢には吾々に對する本國政府の難有い命令が届いて居るでせう。が、吾々はそれを見なければいゝのです。吾々がそれを讀まなければ、吾々の行動は自由ですからね。若し碇泊でもして御覽なさい。それこそ萬事休矣ですよ。さうなつた日には、吾々は直ぐ海底電線へ縛り付けられます。」といふのであつた。

(六四) 浦鹽斯德直航の絶望 (不埒な「アレキサンダー」)

食卓に就いてからも提督は何人にも話しかけなかつた。彼の胸の底には夕雲の湧くやうに、無量の感慨が蟻まつて居たのでらう。彼は黙々として寂しい食事を終へた。

全艦隊が動き始めると、彼は直ぐ私室に降りて行つたが、午後一時頃、不意に最上舷橋に昇つて來た。全艦隊信號は掲げられた。

「正確なる石炭現在量を報告せよ。」

各艦は毎朝午前八時に石炭現在量を報告するとなつて居るので、今斯ういふ信號が掲げらうと

は全く思ひがけないことである。余は其意味を悟つた。

「ウム！ 提督は愈よ決心したのだ！ 旨く行けばいゝが！」余は斯う呟いた。

各艦は午前八時の報告量より、百噸乃至五十噸を超過した炭量を報告した。然るに「アレキサンダー」だけは何故か信號を躊躇して居るやうである。何か起つたかと思つて居ると、聽て同艦は信號を掲げた。旗艦の艦橋から吾々はそれを見たが其意味を了解することができない。で、セマホア信號機で質問した。

「信號に誤りなきや、其艦は午前八時の報告量より三百噸を減少せるに非ずや。」

アラス！ 信號には何等の誤りがなかつたのだ！ それどころか、此信號に依つて却つて同艦の午前八時の報告量に誤謬があつたといふことが解つた。同艦は實際炭庫の現在量を計量つて報告したのではなくて、それ以前の五度に互つて（ノシベで二度洋上で三度）積載した量から毎日の使用量を數學的に差引いた残高を報告したのであつた。それで此日の積載量は無論此計量の中には入つて居ないから、數學的には當然の残高より四百噸不足して居る勘定になるのだ。

「四百噸足りない！ チョッ！ 糞ッ！ 「アレキサンダー」奴ほんどに何うしてくれやう！ 一つも真先に石炭を積む癖に——。一度に八十噸宛不足した勘定になる……四百噸……今是从からそ

れだけ補充するにしても二三日はかゝるんだ。何うしてそんなことができるものか。敵は何處に居ると思つてるんだ？ 直ぐ近所に居るだらうぢやないか。仕様がないな。是ぢや何うしてもカムラン灣に入つて、海底電線に縛り付けられなきやならないんだ。』

是を知つたときの提督を仰ぎ見る者はなかつた。極く些細なことでも提督は直ぐに怒る。艦隊運動で操縦の拙い艦があると、彼は固めた拳を其艦に向けて、それをブル／＼と震はせるのが常だ。そんな風だから、艦隊の使命に對して重大な影響を及ぼす事體の起つた場合に、彼の激怒が如何に猛烈であるかは想像に難くない。

提督は僅かに俯向いた儘、兩手で槓乎と艦橋の欄干を握り締め、沈鬱な眼光で凝乎し「アレキサンダー」の桁端に翻る信號旗を見入つた。彼は宛ら吾と吾が視覺を疑ふが如くであつたのだ。噫！ 此刹那の彼の胸の中！

「應旗をいづばいに揚げろ！」

提督は呻吟るやうにいつた。信號の了解を示す應旗は「スワロフ」の桁端に詰められた。

「アレキサンダー」はそれを見て、ヒラ／＼と其不祥な信號旗を撤した。

提督は漸く色を和らげ、絶望したやうに手を振つて、悄然として艦橋を降りて行つた。

「野獸奴！」

エス大尉は「アレキサンダー」を睥睨していつた。其面には冷たい笑が浮んで居た。彼は嘗つて他の多くの人々と共に——余もさうであつたが——「アレキサンダー」を艦隊中の模範艦だと信じて居たのであつた。彼は余を振り向いていつた。

「何たる醜態でせう？ えん？」

「フム、實に言語道斷だね。是ぢや閣下も何うすることもできまい！」

いふまでもなく、此故障の爲めに、浦鹽斯德直航は絶望に終らんとするのである。

余は或程度迄提督の性格を了解して居り、又、彼の絶大な精力を以てしても、全く宿命説から解脱することができないといふことも知つて居るのだ。余は彼が此故障を單純な過失と見るこ

ができないで、一種の宿命的因縁に歸するだらうと信じない譯には行かなかつた。

午後二時、無線電信機が感應を始めた。が、それは英國軍艦の發信とは思はれなかつた。發信者は慥かに接近しつゝあるのだ。艦隊は直ちに石炭積載を中止し、卸した短艇を悉く引き揚げ、戦闘陣形に移るに便利な、豫定航行序列を整へやうとしたが、午後三時頃には無線電信の發信者が遠ざかり始めたので、午後四時三十分、艦隊はバンダラン燈臺に針路を定めて進航した。

(六五) 波を蹴る一萬六千餘哩 (成功か將た不成功か)

四月十三日、不安を包んだ闇は事無く明けて、艦隊は午前七時前方に灣口を望むことができた。艦隊は運轉を中止した。驅逐艦は錨場に於ける敷設水雷の有無を偵察する爲めに派遣された。各艦の小蒸汽は艦隊碇泊の混雑を避けるために、浮標投下の任務を帯びて驅逐艦に従つて灣内に進んだ。吾々は此間に石炭を積んだ。殊に「アレキサンダー」は一生命に馬力を出した。

午後一時頃から、艦隊番號に依つて、特務船隊が入港し始めた。繫留浮標は敷設されてあるし、最も慎重な訓令が下されてあつたにも係らず、彼船等の投錨に手間が取れたので、各艦は爲めに日没前に入港することができず、止むを得ず外洋に一夜を過さねばならなかつた。

午後四時、艦隊は石炭を積み終つた。それから翌日午前六時まで、吾々は極めて微速力で灣外を彷徨ふて居た。

夜は極めて静かであつた。視界も亦明瞭で敵水雷艇の襲撃を受けても、充分それを未前に發見することができるとはなかつた。

四月十四日、午前一時から二時の間に、小形の汽船が北から南に去つたのを見た。で、驅逐艦

と「ゼムチユーク」が直ぐにそれを追跡して、探海燈で照らして見ると、支那國旗を掲揚した沿岸航路の汽船だといふことが解つた。が、各艦は同船が視界の外へ去るまで、探海燈の大電光を浴びせながら追跡した。

午前十一時、全艦隊はカムラン灣内の豫定錨地に就いた。艦隊はノシベを出港してから此處まで一千五百六十哩の間を、途中何處へも錨を投れることなく、危険な印度洋の波を乗り越えたのである。斯の如きは航海史上未だ嘗つて見ることもできない大成功といはねばならない。英國人は吾々の此異常な成功を猜んで居はしまいか。艦隊は途中に一隻の落伍者もなく、船艦相銜んで堂々と此處に到着したのである。若し「アレキサンダー」の失態さへなければ、吾々は二週間後には浦鹽斯德へ入港することができたのであるに——。思へば實に殘念千萬である。然し吾々の意氣は昂然たるものであつた。余は士官室へ入つて行つた。

考へて見給へ。クロンスタットから此處まで一萬六千六百二十五哩あるせ。そいつを旨く乗り越えたんだからね、大々的成功を謂つべしだよ。而も全艦隊が揃つてだからなア。ロヂエストーンスキー提督は實に偉大い！此提督を措いて斯の如き大事を爲す者があるか？ チュバンウ提督？ チュークニン提督？ 這麼連中に何ができるものか。」

ビー大尉は盛んに提督を嘆美しつゝあつた。彼のいふ通り航海は平凡な成功ではなかつた。然し、是を數字的に批評すると、一日の平均航程が百八十里に過ぎない。言葉を変へていへば、一時間の平均速度が七哩半を出ない。是から追潮の加速を引き去ると、純粹の速度は僅かに七哩をこゝである。是が我が偉大なる波羅的艦隊の航海速度である。絶望ではあるまいか！

艦隊は碇泊すると直ぐ水雷防禦網を卸した。

吾々と前後して漢堡亞米利加汽船會社の汽船が四隻入つて來た。彼船等は三萬噸の石炭を吾々に供給することができると等である。噫！若しも艦隊が是だけの石炭を積み、聖彼得堡と何等の連絡を保たずして、此儘北の方浦羅斯德に向つたならば——！！

晝間はかなり強い風があつたが、日没後はバタリと歇んで、灣内は黒布を敷いたやうに静かであつた。二隻の巡洋艦は哨艦として灣外に在つた。探海燈の十字火は斜に暗黒の海上を照らした。四隻の驅逐艦は絶えず灣内沖合を警戒し、四隻の小蒸汽艇も灣の防禦を固ふした。

余は是で日記體の記述を止めて、再び物語を進めて行きたいと思ふ。それが爲めに。余は比較的讀者に興味の少ない、専門的に細目に渡ることを避けなければならぬ。

(六六) 佛國提督の露佛同盟論 (危險なる日本の野心)

四月十五日から始つて十七日まで三日間、艦隊は全力を盡して獨逸船から石炭を積み取つた。

十五日、病院船「アリオール」が西貢から入つて來た。

余は挿話として不思議な出來事を物語らなければならぬ。

艦隊がマラツカ海峽を通過しつゝある時「ナヒモフ」から一人の水兵が突然姿を隠した。初め此水兵は海中に落ちて溺死を遂げたのであらうと噂されてあつたが、不思議にも西貢から某汽船に送られて、母艦「ナヒセフ」に歸艦つて來た。

マラツカ海峽で忽焉姿を没した者が、何うして西貢から現はれたのであらう？ 此點が不可解な謎である。余は今それを物語りたいのだ。

此水兵が艦から海中に落ちたことは事實である。然し、それが偶然の過失であつたか、故意の企てがあつたかは、にはかに斷言することはできない。けれども、余は彼が期するところあつて波へ躍り込んだのではないかと思ふ。どんな場合であつても海中に墜落する時には、必ず驚いて絶叫するものである。此疑問の水兵が假りに呵ッといふ間もなく波に没はれたものとしても、舷側

には隙間もなく哨兵が張られてあつて、四邊に嚴重な注意を拂つて居るのだから、故らに場所と機會とを擇んだ者でなければ、是等哨兵の眼から通れることはできない筈である。然るに隼のやうな鋭い眼を輝かして、惨たる夜の暗黒を確めて居る哨兵すら、彼の墜落に氣が付かなかつたとすれば、故意に冒險的逃亡を企てたものと判断するより外はない。

恐らく彼は「ナヒモフ」の甲板からマラツカ海岸の市街に輝く灯を望んだ時、其距離が僅かに指呼の間にあるのに思ひ付いて、海岸に泳ぎ着くかさもなければ漁船か汽船に救ひ上らるゝ見込で、斷然逃亡を企てたのに相違ない。彼が某汽船に救はれたときには、救命帯を纏ふて海上を漂ふて居たといふことである。彼は此救命帯が偶然手に入つたといつては居たが、さう恰度好い機會に救命帯が落ちて来る筈もあるまい。

斯ういふ出来事は戦時には決して珍しいことではない。或者は將來に於ける死の怖しさに戰慄して、戰場から逃亡する。甚だしきに至つては自殺を企てる者すらある。是に就て余は旅順で起つた出来事を思ひ起さずには居られない。それは一人の士官であつたが、實戰の經驗も數度あつたに係はらず、死を怖れて狂亂してしまつた。彼の眼は異様な輝きを帯びて常に怖しい幻影をびえて居るやうであつた。彼の上官と軍醫とは最早一刻も猶豫することはできない、恐らく次

の戦闘には最初の砲聲を聞いた刹那に於て、自殺を企てる懼があるといふ處から露西亞へ後送したが、此「ナヒモフ」の水兵の場合には、運命の神が意地悪く彼を翻弄した。

彼は来るべき戦闘の慘劇に死の役を振り付けらるゝのを厭ふて、生の誘惑に應じて海に投じたには投じたが、彼は陸岸まで泳ぐことができなかった。彼が腕を拱ぬいて疑乎と見入つた陸上の灯は近かつたが、實際の距離は優に六哩を越えて居た。彼は著しく總ての距離を近く見せるといふ「夜」の詭計に欺かれて海に浮んだのであつた。が、六哩の距離は彼に取つて餘りに遠きに過ぎた。さうかといつて、彼は瘴猛な熱帯の鱈の胃腑にも葬られなかつたし、附近に網を卸しつゝあつた漁船にも救ひ上げられなかつた。

さて、彼は假令マラツカに泳ぎ着くにしても、或は汽船に救はれるとしても——其汽船が西貢へ入港するものでなければ——彼は恐らく波羅的艦隊の囚はれた運命に殉することなくして済んだのであらう。マラツカ海峡は人も知る如く、非常に汽船の往復が頻繁しい。で、彼は其孰れかの汽船に救はれて、怖しい死から免かれる道を見出すことができる筈であつたのに、意地悪い運命の魔の手は、さういふ汽船から彼を掻き除けて、十一時間も波の上で弄んだ上に、海峡を一箇月に僅か二度以上通過することのない、佛國通運汽船會社の汽船に拾ひ上げさせたのである。佛

國通運汽船會社の汽船、それは彼に取つて鬼門ともいふべき貢西に入港する使命を帯びて居たのである。ア、奇しくも不思議なる力よ！ そは佛國汽船に依つて此臆病なる逃亡者を、露國領事に引渡したのであつた。

彼は無残々と、需品を積んで、カムラン灣に赴くべき、次の汽船に乘せられて、聽て懐しくも怖しい「ナヒモフ」へと送られたのである。勿論、彼は墜落が全然過失であつたことを主張したので、軍法會議に附せらるゝやうなことはなかつたが、彼の忌避した運命から通れることだけは遂に絶望に終はつたのである。

四月十五日、佛國支那艦隊司令官ジョンキール少將が、巡洋艦「デスカルテス」に坐乗してカムラン灣に來た。

余は六箇月以前「デイヤナ」が西貢に入つた時に少將とは面識がある。彼は中春の瘦せぎすな中老人であるが、元氣のある水銀のやうな快活な性格を有つて居る。年齢？ 四十代それとも五十になつたか、然し精力の旺盛な點に至つては、少しも青春い士官に譲らない。

少將は、「日本の露西亞に對する攻撃は、亞細亞に於ける白人追放運動の第一歩である。而して、此目的の爲めに全亞細亞同盟が成つたとすれば、其中心的盟主は旭日帝國であらねばならぬ」と

いふ意見を有つて居る。

「何うかすると、吾輩も日本人の性格を了解することができなくなる。要するに日本の前進運動は其地理的必要に基くのもあらうが、主として露國がバルカン半島に延びる必要があるのと同じ理由であると思はれる。露土戦争で貴國の民衆の間に愛國的熱狂が勃發したやうに、日露戦争の最初の砲火は日本が其民族的奮起を促す絃樂のやうなものだつた。日本の教育ある社會では數世紀前から其國家的使命を自覺して居たので、露西亞に長劍を揮つて君斯坦府の軍門を打つたオレーグ將軍あれば、日本には英傑秀吉がある。單純なる戦争といふ見地からいへば、日本は最も抵抗の薄弱な防禦線を突くのが更に至當であつて、早い話が東洋に於ては佛蘭西は露西亞より遙かに微力である。吾々の領土に接觸して暹羅があるが、此國が全く日本の勢力範圍であつて、國王の儲嗣に日本の皇女が娶はしてある上に、其内閣には二人の日本人が大臣となつて居る。而も其内の一人が陸軍大臣であるといふに至つては、日本の軍事的勢力の強大を忖度するに難くはあるまい。従つて暹羅の軍隊は日本式の兵器で武装し、日本の教官に依つて日本式に訓練されつある。のみならず、一切の軍需品は日暹兩國の共同使用に任せてある。他日日本遠征軍が此國に根據を置くやうなことがあつたら、暹羅國民は歡呼してそれを迎へるだらうと思ふのだ。

吾々は斯の如き侵入者に對し、如何なる手段を講じて其殖民地を守るべきかだ？ が、そんなことを考へたところで一笑の値もない。吾輩はさうなつた日に、劈頭第一の打撃を佛蘭西が受けなければならぬと信じて居る。一體日本人といふ奴は想定敵國の意圖を能く了解するといふ伶俐な方法を取つて居る。で、彼奴等は露國が其の同盟國たる佛國の殖民地に、何等の異變のない間はイザ知らず、一旦危急が湧いて來た時には、其の全力を提げて北方から、救援に來るといふことを、チャンと打算して知つて居るのだ。それは慥かに有り得べきことで、吾輩もさう信じて居る。が、それにも係はらず、吾輩の了解のできないことがある。それは本國政府の優柔不斷な所として無責任な態度である。巴里政府は今露國の現狀を知らない筈はない。吾々は全く同盟國たる露西亞を救ふべき順番にあるではないか。舊中立宣言の一部を放棄して、新たな解釋を加ふることに同意したのは、明らかに英國に媚びんが爲めであつて、吾々は吾々自身に對する陥穽を掘つたやうものなんだ。若し佛國が何れかの敵國と戦はなければならなくなつたとした時に、斯ういふ中立規則が確保されてある以上は、吾々は現在の露國のやうに、身を置くに處のない、窺状に陥らなげりやならん。何れにせよ。今此處に居て君等の現狀を能く了解することのできる吾々のみが、忠實なる露西亞の眞の同盟者であるといふことを信じてくれ給へ。それは同盟の成立た

前から、久しく兩國の間に存在した友情の意味ばかりでない。實に吾々の胸から湧く純粹な眞意なので——。』少將は熱心に余に物語つたことがある。

(六七) 巴里に聞えると大變だ (國佛の提督私的同情)

四月十六日、生糧品を満載した汽船「エリダン」が西貢から入つて來た。

ア、久振りて新鮮な王菜汁が吸へる！ 満一箇月といふもの、吾々の口腹は斯ういふ献立に對して密閉されてあつたのだ。不味い罐詰物に飽いた後の生糧品！ 吾々の咽喉は糧食船の姿を見たいけどもゴロ／＼鳴つて居るのだ。

ケー大尉、エム大尉、それに氣球乗の専門家が「エリダン」に便乗して來た。

三人は旅順が開城するまで居残つたが、病氣に罹つて居たので、捕虜となることを免れ、聖彼得堡政府の要求に依つて、上海に送られた連中であつた。彼等は健康を恢復すると同時に、波羅的艦隊に加はる爲めに、カムラン灣にやつて來た。彼等の談話は總て悲觀すべき材料に充ちて居た。で、さらでだに衰退の色を見せて居る士氣を、此上沮喪させることは到底できないので、吾々は三人に對して餘り審しく旅順の情態を話さないやうに求めた。

彼等の語るところに依ると、ステツセルの態度は非常に非英雄的であつて、籠城軍中には一致も團結も見られなかつた。彼等の見たところは、余が昨年七月、旅順で觸目した士氣の頹廢に、更に一段の甚だしきを加へたものだ。

コンドラテノ將軍の戦死は、唯一最後の權威者を喪ふたと同じである。そして此要塞を卒伍の方のみに依つて支へるといふ悪風は、廣く且つ深く籠城軍の中に瀰漫つて居たのだ。開城前第一線にある者は五千人を超えなかつたといふのに、而も二萬三千人が降服して居るではないか。

「畜生！ 何處に隠れてやがつたんだい！」

此疑問から戦慄すべき光景が現出された。毆られる者もあつた。殺される者もあつた。開城後第一線を退いて市街に戻つて來た兵士は、飢餓に勞れた軀を襤褸の軍服に包んで、見る影もない凄惨な姿に化つて居た。彼等は日本軍に引渡すべく準備された潤澤な被服糧食の貯藏に對して、其節制を守るとは到底できなかつた。彼等は寒さに顫えて居たのである。彼等は餓えて居たのである。して見れば其潤澤な被服と糧食が大牟盜取され破壊されたのに無理はないではないか。其日、ジョンキール少將は「デスカルテス」に坐乗して、カムランの南二十哩ナトラン灣に向つて拔錨したが、翌日直ぐ引還して來た。

四月十八日、天候は全く定つた。晝間は風があるが夜になると風ぐのだ。余は提督からジョンキール少將を訪問すべき命令に接した。それは「試運轉の爲めに明日出港する」といふことを報告する爲であつた。

余は服装を更めて、殆ど吾が胸から外したことの無い、露西亞のセントウラヂミール勳章の代りに、佛國から贈與されたレジオン・オブ・オノワ勳章を佩び、「デスカルテス」に少將を訪ふた。

「ディアナの入港しました當時は、種々閣下の御厚意にあづかりまして——」

余が尙ほも言葉を續けやうとすると、少將はそれを遮つて、

「イヤ、それはお互ちや。」といふ。

「で、特に私が提督に乞ふて閣下に調するやうな譯であります。それに私自身及び友人までが、閣下の一方ならぬ御盡力に依りまして……就中、艦の事に就ては非常な御面倒をかけましたことでした。あの場合、假令、閣下の折角の御盡力が水泡に歸しましても、それは閣下の罪ではなかつたのです。」

少將は當惑したやうな風に、

「叱ッ！ 叱ッ！ そんなことはいはんでくれ給へ。巴里政府にでも聞えろと大變だ。」と押へる

やうにいふ。

余が提督から命ぜられた使命を傳へると、少將は非常に喜んでいふた。

「イヤ、何うも、それは態々恐縮でした。吾輩が露國艦隊の秘密を聞かうとは思ひも奇らんことであつたのぢや。然し、提督が吾輩を信じて、それを知らせて下さつたのなら、吾輩の光榮是に過ぎるものはない。何卒、提督に然るべく吾輩の感謝を傳へて下され。」

少將はナトランから本國政府に波羅的艦隊の投錨を電報した。そして開戦當初の中立宣言に依つて、行動する豫定であるといふことを附け加へていつた。少將の意見に依ると、吾々は全く適法に行動しつゝあるので、彼が「デスカルテス」に坐乗してカムランにあるのは、主として仁川や芝罘で中立違反の行爲があつた日本に對して、佛國の領海を防禦する爲めであつたのだ。

「吾輩は吾輩の取るべき道を知つて居るのぢや。吾輩は一發の彈丸を發射せずとも、佛國を旗を領海の境に樹てることはできるのぢや。」

ア、余は何うして見ず知らずの他人であるところの、此佛蘭西人が好きなのだらう？ 何故此佛蘭西人との間に結ばれた短時間の交際を、忘れることができないのだらう？ それは恐らく行く先々から狩り出されたたよりのない生物を、正直に眞摯に憐れんだ其言葉が尊かつたから

であらう！

「イヤ、測らずお目にかゝれて愉快でした。何卒、自愛して下さい。吾輩は再會の日を待つて居ますぢや。若しも君が成功されたならば、若しも……然しそんなことは豫言はできませんが、若しさうなつた暁には佛國がまだ正式に廢棄しない宣言が効力を恢復して、「デイヤナ」を波羅的艦隊に加へることができるとも知れませんか。さうなつたら、君、結構ぢやないか。え？」

「感謝に堪えません。閣下。」

余は少將と堅い握手を交換して「デスカルテス」を去つた。

(六八) 果せるかな退去の要求 (廿四時間の猶豫あるのみ)

四月十八日、午前八時、提督は二個の戦艦と巡洋艦「アウロラ」を率ゐて出動した。そして自差修正と二三の艦隊運動を行つたが、實際の目的は艦隊附屬の給炭船「キエフ」、「キタイ」、「ジュビター」、「クニヤズ・ゴルチャコフ」の諸船が、西貢に向つて出港するのを護衛する爲めであつたのだ。吾々は是等の諸船からかなり澤山の石炭を積み取つたので、此上彼船等を伴ふとするならば、最う少し石炭を補つて置く必要があるのだ。で、彼船等は西貢に入つて貯炭所から

カーチフ炭を積み取り、それを巡洋艦隊に供給する爲めに、或海上で艦隊を待ち合はすべき任務を帯ばせられた。そして其の會合點は追つて電報で知らせる筈であつた。「キユバン」、「テレーク」、「ウラル」の三特務艦は、日本の假裝巡洋艦の攻撃に對して、彼船等を護衛する爲めに西貢港口の警戒を命ぜられた。

四月二十日、艦隊は石炭を積んだ。「キユバン」、「テレーク」、「ウラル」の三隻は、任務を終えて、無事にカムラン灣に歸つた。三隻共に敵の隻影も見なかつた。給炭船は何等の故障もなく西貢に入港したのである。

四月二十一日、正午頃、ジョンキール少將が、氣の毒さうな面色をして、旗艦を訪れて來た。彼は本國政府の命令に依つて其領海から艦隊の立去ることを要求した。それが爲めに二十四時間の猶豫を與へるといふのだ。一體何うしたらいいのだ!? 戦に敗れる、者は禍なる哉! リウネウキツチ將軍麾下の貔貅が若し大山將軍を奉天で破つてくれたならば、吾々は平和に且つ自由に、此處でネボカトフの艦隊を待つことができたのだ——。

オ、! ネボカトフ艦隊の派遣といへば、今始めて吾々がそれを待つといふ意味を知ることができた。つまりそれは「戦闘隊形を整へる爲め」にだ! 其餘の事は天佑に依るの外はないとい

ふあはれにも危険な依頼心の爲めにだ!

何たる馬鹿げたことなのだ!? ネボカトフ提督が其艦隊を率ゐて、ノコノサイノヤツ來なければ、吾々は日本艦隊の監視を避けて、最う半分以上も浦鹽斯德へ近づいて居るのに——!?

一體それは誰の罪であるか。いふまでもない、敵弾の洗禮をすら受けたことのない、そしてさういふ處へ出るのを怖れてブル／＼顫えて居る、白面の戦術家の罪に定つて居るんだ!

ケー中佐がいふやうに、ロヂエストンスキー提督に相談などするな! 何でも彼でも有りつたけ派遣つちまへ! 一分一秒でも後れると取り返しが付かないことになるぞ! 此際一隻の軍艦一門の大砲でも、素敵に役に立つんだ! といふやつなんだ。

成程一隻の軍艦でも大事である。が、それは問題が軍艦であるときに於てのみ眞實である。木履のやうなものを浮べてそれが役に立つとは、何といふ滑稽な反語だらう。又、僅かに一門の大砲でも威力は怖るべきものである。が、穴の開いた鐵の塊だけでは、何うにもならないぢやないか。

余は斯ういふ文字を日記に誌さなければならぬ事を、吾れながら痛ましくもあり不快だとも思ふ。が、それを二度と讀まなければならぬのは、更に／＼痛ましいことではあるまいか。

「僕は貴下に何ういひましたかね？ あの人は實際そんな馬鹿ぢやありませんと、いつか僕のことを感じてますか。あの人はね。暢気に安樂椅子へ腰でも掛けて、吾々のことを批評でもして居るでせうよ。が、それなら一向構ひませんがね。唯、滅茶苦茶なことをいふから怖しいんです。それに輿論が些ともさういふことを咎めないといふのは驚くぢやありませんか。僕は始終聖彼得堡と通信を續けて居るので先生方の秘密は大抵知つて居ます。貴下はケー中佐が一身の利益の爲めになることなら、あらゆる手段を用ひるといふことを御承知ですかね？ 御覽なさい。あの人の議論は悉く千九百〇四年十月に於ける、ピリレフ提督の報告を擔ぎ上げる提灯論ぢやありませんか。其報告でいすねえ、吾々の所謂戦闘提督——何處の海戦に出たことがあるのか知りませんが——は、吾々を援助させる爲めに老朽艦隊の派遣を可能とした上に、更にその必要をすら絶叫して居るんだから堪りませんや。一體あのケー中佐の攻撃とか反駁とかいふものは、問題中心ではなくて一種の人身攻撃ですからねえ。何うです？ アズエラン提督が海軍大臣の印綬を解いて、ピリレフ提督が其後釜に据はると、先生屹度陸進するに定つてますから——。全くあの人は費用と損失とから必ず利益を見出すことを知つてますからねえ。ハッハッハッ！」とエヌ大尉はいつた。

余は彼が是程興奮したのを見たことがない。

(六九) 悲惨なる漂浪的狀態 (英國政府脅迫の結果か？)

四月二十二日、吾々は夜を徹して、「タンポフ」、「マーキュリー」、獨逸石炭船、糧食船などの出港を見送つた。

午後一時、ジョンキール提督の吾々に與へた二十四時は遂に経過した。で、全艦隊は錨を抜いて外洋に出た。然し、灣内には特務船と巡洋艦「アルマーズ」だけが残つた。が、此「アルマーズ」は艦型が普通の軍艦と異つて居るので、如何に炯眼な敵でも軍艦とは思ふまい。

旗艦「スワロフ」では參謀艦長會議が開かれた。提督は其席上でいつた。

「佛國政府が吾々に對して退去を要求することが、正當であるか何うかは今論議すべきことではないのぢや。尤も「デスカルテス」が英國軍艦でもあれば、そりや又考へなきやならん。場合によつては吾々は武力を用ひんけりやならんかも知れん。さうすれば、英國は吾々を追出すに足る艦隊を集中するぢやらう。然し、今は吾が露西亞の同盟國であるところの佛蘭西の領海に居る。而も吾々を高壓的に退去させやうといふのではない、寧ろ退去を懇請して居るやうなものぢや。

で、乃公は抜錨せんけりやならんことになつた。然し、カムラン灣の附近及び佛蘭西の領海外に、總ての給炭船と戦闘に加はる資格のない汽船だけを殘して置く覺悟ぢや。乃公の本國政府から受けた命令は、ネボカトフ艦隊の着くのを待てといふにある。乃公は此命令に服従せんけりやならん。乃公は西貢を經由して努めて聖彼得堡と連絡を保ちたいと思つてゐる。そして浦鹽斯德まで直航するに充分な炭水の補充をしやう。が、若しネボカトフ提督がそれまでに着かなかつた場合には最う外に仕方はない。吾々は吾々だけで前進するのみぢや。さうぢや、前進あるのみぢや！ 如何なる場合に於ても前進あるのみぢや！ 何卒、諸君は此「如何なる場合に於ても」といふことを、深く心に期して下さい！』

提督は冷靜な平生事務を見るやうな調子で斯ういつた。斯ういふことは提督には珍らしいことで並居る者も一種憂鬱な感に打たれた。

斯うして安南海岸に於ける吾々の漂泊は始まつたのである。而も痴鈍なそして異様な軍艦の集團を、公式に吾々は太平洋第二艦隊と呼ばなければならぬのだ。

余は、哀愁の念に驅られた此數日の間に、かなり日記の頁を澤山書き埋めた。が、這麼閉暇の多い時書いた日記は、何となく力の抜けたものであつたのだ。讀者は從つて日誌の日順を追ふて

讀むに困難するだらう。余は出来るだけ物語を簡潔にしたい。

前にも書いた通り、吾々は四月二十二日に、ジョンキール提督監視の下にカムラン灣を抜錨した。吾々の見解に依つて、中立規則の適用範圍外にあると信じた特務船だけを錨場に殘して。

で、是等の船舶が灣内に在つて、佛國の中立保護に満足し、本艦隊も領海外に在つて、是等の船舶と連絡を保つだけに止まり、露國艦隊が其同盟國たる佛國の領海を、一種の根據地として使用するといふ誘りを他から受けるやうな、一切の海戦行爲を慎しむならば、ジョンキール少將も佛國殖民地官憲も、現狀を承認するといふ内約だけは吾々に與へて居た。實際、吾々に取つて是以上適法に行動することは不可能であつたのだ。然るに聖彼得堡及びパリ政府は、全く是と見解を異にして居たのである。

余は正確な證據を握つて居ないから、パリ政府が英國政府の脅迫を受けて、吾々に不利な要求をするやうになつたのか、或は聖彼得堡政府が先づ讓歩したのか判断に苦しむが、要するに結論は一つであつて、軍艦は勿論のこと苟も露國々旗を掲揚した船舶は、斷然佛國の領海に留まることを許さないといふのである。

吾々が此通牒に接したのは四月二十五日であつた。で、詮方なく提督は特務船を含む全艦隊を

提げて、無念の齒を咬み鳴らしつゝ、外洋に浮んだのである。ジョンキール少將は「デスカルテス」に坐乗して、吾々の漂流行を見張つた。彼は吾々が領海外に去るのを、其同情ある監視の眼を以て見送つた。そして吾々の大艦隊が視界から消え去るまで、彼は艦橋に立ち盡して其眼から双眼鏡を放さなかつた。

「デスカルテス」はそれから西貢に引き返した。恐らくジョンキール少將は本國政府に向つて、「波羅的艦隊は安南の海岸を東方に向つて去れり、されど其行先地は不明也。」と報告したに相違ない。

（七〇） 憫笑すべき本國政府の回答（顛へ上つた巴里政府）

敵地は早くも指呼の間に迫つた。吾々は此怖ろしい悪魔に對して本艦隊の安全を保たなければならぬといふ、緊要な大問題に逢着したのである。全艦隊が斯ういふ境遇に在つて、茫漠たる南支那海を漂流しつゝ、ネボカトフ艦隊を待つと同時に武力の薄弱な特務船隊を保護するといふことは、到底出来ない相談であるので、提督は窮餘の一策として遂に次の手段を取ることに決心した。それは斯うだ。吾々を監視しつゝあつた「デスカルテス」が、西貢に引き返した以上は、吾

吾の踪跡を追跡して、それを佛國官憲に電報する者はなくなつた譯だ。そこで、絶望的境遇に淪落した艦隊に對する唯一の門戸たるヴァン・ホン灣に錨を投げ込むといふ一策である。

提督は其夜全艦隊を率ゐて灣内に入つた。さりながら假令一時的のものであつても、此灣は決して理想的のものでなかつた。といつて、艦隊は此灣を出でて何處へ行く目的もないのだ。それに疲れ切つた人間に休養を與へるといふことも必要であつた。怠惰は何處までも忌むべきものはあるが、水兵等に對して適度の慰安と休養を與ふることは、指揮者の當に考へて置かなければならぬ必要であつたのだ。

ヴァン・ホン灣の都合のいゝことは、佛國官憲が駐在してないことと、電報連絡の缺けて居ることであつた。ところが、それも何にもならなかつた。といふのは、一箇月に一度此處へ寄港し魚類を購つて土地に必要な物資を卸して行く沿岸通ひの小汽船があるが、時もあらうに、其船が恰度折悪しく吾々の投錨した日に入つて來た。そして超えて二十七日に西貢に向けて出港した。彼船は西貢へ着くまで、豫定の各寄港地を経由する筈である。

萬事再び休矣である！ 同船が西貢に入つて吾々の投錨を報告すれば、艦隊は再び追立を喰ふに定つて居るのだ！ そして艦隊のヴァン・ホン灣寄港は、海底電線に依つて二十九日までには

全世界の知るところとなるに相違ない。

ヴァン・ホン灣の南二十哩、ナトランに於ける佛國委任官吏は、果して廿四時間以内に退去すべき命令を吾々に傳達した。彼は表面ジョンスキール少將と同じく吾々に過去を迫るには迫つたけれども、彼は亞非利加西岸のアングエラ・ベケナに於ける獨逸殖民地の「少佐殿」のやうに、吾々に對して感謝すべき手段を取つてくれた。

ナトランからヴァン・ホン灣までは海上僅かに二十哩に過ぎないので、若し彼が艦隊に對する退去命令を持つて船でやつて來るとすれば、其日の内にもヴァン・ホン灣へ着くことができるのに、彼は旅程を海上に取る用意をして居ないといふので、態々不便な陸路を取つて五月二日に旗艦に到着した。それでも彼は夜を日に繼で急行したので、「スワロフ」を訪問したときには殆んど困憊しきつて居た。

退去命令を受けた以上は仕方がない。五月三日、提督は全艦隊を引連れて灣内から錨を抜いて外洋に乗り出した。巡洋艦「ギツチエン」に坐乗したジョンキール少將は、西貢から來つて艦隊の領海外に去るのを監視した。彼は又斯うして、

「波羅的艦隊はヴァン・ホン灣を出で東方に向つて去れり、されど其目的地は不明也」と巴厘政府

に報告するのだ。

然し、今度は彼も吾々が視界の外に去るのを確めたのでは満足しなかつた。彼は、波羅的艦隊が海底電線の連絡のない他の港灣に投錨するのを警戒する爲めに、二十四時間海岸を巡航するといふことを通牒して來た。

五月四日、艦隊は再び舊の錨地に歸つた。吾々は佛蘭西の交渉を無視して、其領海に錨を投れるといふことを、自ら顧みて惡むべきだと思ふ。全く佛蘭西が吾々の行爲に就て非難するとしても、それは實に止むを得ないことだといはなければならぬ。

五月五日、艦隊航海長エフ中佐と余の二人は、電報連絡のないやうな、適當なる碇泊場を捜す爲めに「ラス」に便乗してヴァン・ホン灣を出た。

吾々はヴァン・ローとポート・デイヨットを踏査した。此二箇所の中では後者の方が適當であつたが、缺點は測量が行き届かないで海圖が不完全であつたことだ。殊に危険な珊瑚礁があるらしくも思はれた。

艦隊が錨場を此處へ移す前に、吾々はナトランから暴風襲來の警告に接した——其處へは外洋から來た振りをして驅逐艦が一隻派遣されてあつた——是は吾々に對する不可抗力であつて、

此が爲めに艦隊が避難所を求むるのは、敢て中立宣言の附則に抵觸するものでないのである。果せるかな、長濤は外洋から灣内へ躍り込んで来た。哨戒任務を帯びて灣外にあつた小巡洋艦は、是が爲めにどんなに苦しんだか知れない。が、颶風は艦隊から遙か北方に偏した過程を取つたので、艦隊の錨場には左程の混乱も起らなかつた。

グアン・ホン灣は外洋から見透かされる缺點があつた。佛國土地官憲は吾々に對して非常に寛大な態度を示したが、吾々は五月七日に至つて、艦隊の安南海岸の中立港に入つたことが、世界各國の新聞紙に論議されるやうになり、一面に於て日本が怒つて佛國に嚴重な抗議を申込み、英國がそれに有力な援助を與へつゝあるといふことを知つた。

パリ政府は是に頼へ上つた。そして殖民地官憲に向つて、雷霆のやうな叱喝を加へた。それと同時に、聖彼得政府も内心微懼付き始め、パリ政府の抗議にすら斯ういつて答へた。

『それは當方の過失では御座らぬ。手綱を放れた馬は全く如何ともすることのできない儀で御座る。當方にはそれを制御する権力も御座らねば又、それを致す術も存じ申しても居らぬ。ロヂエ・ストンスキーは氣儘に振舞ひつゝあるので、何も彼も彼自身の責任で御座る。されば貴方に於て見當り次第、勝手に摘み出されたとして當方に於て何の異存も御座らぬ。』

噫！ 吾々は斯ういふ情けない境遇の下に、所謂戦闘隊形を整へなければならぬ。ニコライウ・ゴドニツク！ セラヒム・サロヴスキ！
是では全くやりきれたものではないのだ。絶望した人々の心は鉛のやうに重かつた。

(七一) ネボカトフ艦隊來る (悲惨なる漂泊尙は續く)

五月五日、午前四時、ネボカトフ艦隊が新嘉坡を通過したといふ情報に接したので、提督は五月八日、「リオン」と「イズムール」と「ドゥエーブル」と「ゼムチューグ」、此二隊を連絡の爲めに出港せしめた。

五月九日、朝、全艦隊は再び拔錨して外洋に出た。「ギツチエン」に坐乗したジョンキール提督は、三度び吾々の監視役に當つた。

噫！ 如何なれば吾々は、斯のやうな痛ましい屈辱に甘んじなければならぬか！ 吾々は到處から叩き出されるのだ！ 安息のない酷たらしい漂浪を、吾々は何時まで忍ばなければならぬか！ 吾々はまるで國のない猶太人のやうなものだ！

吾々の同情者ジョンキール提督は、吾々の姿が見えなくなると、廿四時間後に、「波羅的艦隊は

東方に向つて去れり、但し其行先地は不明也」と報告し得るやうに、安南海岸を巡航したのである。

午前中に哨艦が歸つたが、ネボカトフ艦隊に關しては、何等の報告も齎らさなかつた。

午前十一時、「モノモク」から「ニコライ一世」に送る無線電信を感じた。正午頃、吾々はネボカトフ艦隊と無線電信の連絡を終えた。そして午後三時頃には、業々しくも「太平洋第二艦隊特別戦隊」と唱へられた「扁平鐵」と「木履」の集團から成つたネボカトフ提督麾下の艦隊が吾々と會合を終えたのである。余は此刹那に受けた印象は後に至つて語りたと思ふ。

午後五時、ネボカトフ提督は「スワロフ」を訪問した。彼はロヂエストンスキー提督と爾後の行動に就て交渉した。

吾々の準備は整つて居るのだ。然るにネボカトフ艦隊は是から石炭も補充しなければならぬ。汽機汽罐の検査もしなければならぬ。ロヂエストンスキー提督の發した戦闘に關する命令も閱覽しなければならぬ。で、ロヂエストンスキー提督は如上の必要から、ネボカトフ提督にボート・デ・イヨット寄港を命じた。

提督は艦隊を率ゐて目的地に向つた。吾々は依然として外洋に漂泊して居た。

五月十一日、石炭を随分消費したので、それを補充する必要が起つたが、長濤が高く何うすることもできない。で、止むを得ず提督はヴァン・ホン灣に入る決心をした。佛國官憲から例に依つて退去を命ぜらるゝまでには、石炭は積み終はるだらうといふ見込であつた。

ヴァン・ホン灣に入ると、全艦隊は直ちに石炭を積み始めた。吾々は夜を徹して狂氣のやうに働いた。そして翌十二日の拂曉、知らぬ顔をして灣外に去つた。全くあれだけの作業を一夜の内

に仕遂げたといふことは、驚くべき成功といはねばならぬ。

艦隊は洋上に漂流して五月十四日まで待つた。其日にネボカトフ艦隊は炭水を補充し、航海準備を整へて來り加はつた。

「ア、やれ、やれ、とうとう一所になつてしまつた！ 何人も恐らく斯う思はないものはなからう。

（七二）運命の神は盲目に非ず（噫！ 又士氣の沮喪！）

余は波羅的艦隊が安南の海岸に寄らない漂流の淺間しい姿を曝すやうになつたまでの出來事を述べたが、尙ほ少しく進んで各艦船の軍規風紀に就て有の儘を語つて見たいと思ふ。

餘りに強く張り詰められた弓絃は、決して長く持ち堪えることのできるものでない。假令、それがはち切れなくとも、何時か力は弱るものである。余の最も不安に思つたのは實に此點であつて、艦隊の士氣に斯ういふ怖るべき結果が起ることは、由々敷大事といはなければならぬ。然るに、不幸にも、余の此不安は實現した。提督がネボトカフ艦隊を待ち合はすべき命令に接したことが知れ渡つた其日に――。

『そんなこといつたつてそれは無理だ。余がさうだからといつて他人が必らずさうだとはいへない。ネボトカフ提督を待つ爲めに、艦隊の士氣が沮喪した證據が何處にあるか。先づそれを承はりたいものだ。』

斯ういふ人があるかも知れない。宜しい、余はそれに對して二三の實例を挙げやう。

四月十六日に提督が碇泊せる艦隊の豫定警戒方法に改變を加へたのは何の爲めである？あれは艦隊の安全を確保する上に一步を進めたのではなくして、提督が自ら下した命令の履行が困難であると知つたからさうしたのである。即ち哨戒任務にある巡洋艦驅逐艦哨艦が、其責任を盡すことのできないが爲めではないか。各艦長は部下の提督に兵員が困憊して、不注意に基く機關の故障が間斷なく起るといふことを報告して居る。而も一週間以前、艦隊の豫定行動がマラツ

カ海峡通過後、躍然として浦鹽斯德に直航するといふにあつた時には、現今困憊して蛆虫の如くだらけて居る水兵等さへ、活々として立ち働いて居たではないか。

四月十七日、提督が哨戒驅逐艦の數を二隻に減じたといふのは、偉大なる彼が如き人格を以てしても、猶ほ且つ辭書に「不可能」の文字のあることを認めなければならなかつたことを證據立てるので、同時に彼が如き絶大の威望を以てしても、部下に其命令の遵奉を強ふることができない程、水兵が疲勞の絶頂にあつたことを表現するものである。

艦隊乗組員の間には蟠居つて居る不平を仔細に描寫することは、余に取つて却々困難な企てである。が、要するにそれは次のやうな結論になるかと思はれる。

『吾々は今行つてできることすら行つて許されないので。さうかといつて、一々許可を仰いだ日には、機會はツン／＼お先へ失敬して經つて行く。時代後れの舊世界に頑張つて居る連中は自ずから眼が眩んで、目指す旭日帝國を眼前に控へて居る吾々よりも、正確な判斷を有つて居ると信じて、事々に吾々を指揮命令しやうとして居るんだ。それで吾々は斯ういふ先生方の命令に對して、一向頭が上らないから厄介だ。然し、吾々は海軍々人としての義務を重んじなければならぬ。だから命令に依つては生命を捨てる位は何でもない。吾々は決して微懼々々して居るんぢや

ないのだ。唯、前途に何等光明ある希望を有つて居ないだけなんだ。運命の神が盲目だなんていふのは間違つた話で、運命の神程總ての事象を能く判断するものはないのだ。日本艦隊と彼羅的艦隊と比べて見りや、何方が何うだといふことは直ぐ知れるぢやないか。」
人々はぼんやりする程疲れきつて居た。彼等は、強烈な意志と斷乎たる決心とを有つた、一部少数者の刺激に依つて、僅かに惑亂することを免かれて居た。

(七三) 殺風景な海賊的活劇 (泥酔水兵の上官侮辱)

四月二十日、提督は艦隊命令で次のやうな誠筋を各艦に與へた。

『無線電信機的作用を遺憾なからしめんと欲する過去八箇月間の努力は、次の如き悲むべき結果となつて現はれ來れり——昨四月十九日、艦隊出動中、特務船隊に對する特別命令を傳達せしめんと欲し、僅に十五哩の距離に在る「アルマーズ」を、一時間半を費して呼びしも、同艦は遂に旗艦の送電に對して何等答ふる處あらざりき。此に於て旗艦は止むを得ず「オレーグ」を呼ぶところありしも、是又平然として些の感應する處あるなし。而して「ゼムチューグ」、「イズムールド」、「ドニエーブル」、「リオン」の諸艦船も、均しく旗艦の無線電信に對し注意を怠り、「アルマ

ーズ」、「オレーグ」二艦に向つて信號を以て、旗艦が彼艦等と呼びつゝあることを注意し、其無線電信機の不完全を誨ゆる手段をも取らざりき。本日午後二時、本隊に接近しつゝある特務艦「キユバン」、「テレーク」、「ウラル」の一隊より、無線電信來るべき筈なりしを以て、旗艦は是に對して嚴密なる警戒を加へ居りしに、遂に何等の感應をも見ざりき。而して旗艦「スワロフ」の無線電信機が、其能力を發揮する能はざりしは固より遺憾なりと雖も、全艦隊を通じ「キユウバ」の通信を中絶し、能く一艦の之を旗艦に傳達するものなきに至つては、遺憾更に言語に絶するものといはざるべからず。旗艦は此外同じく無線電信を以て哨戒任務にありし「リオン」を呼ぶころありしと雖も、同艦も亦遂に感應せざりしが如し。同艦の艦長は不完全なる無線電信機を有する哨艦の任務が、絶對無意義のものなることを思はざるべからず。希くば麾下各司令官及び各艦長は、嚴重に茲に留意せんことを！」

勿論、提督が斯ういふ誠筋を下すのは當然であつた。然し、彼は此希望が麾下各司令官各艦長に容れらるゝと信じて居たであらうか。余は提督がさう信じなかつたと考へる理由を有つて居るのだ。

命令反抗者が再び現はるゝやうになつた。不平は事々に勃發した。人々は教育訓練の權威を願

みないやうになつた。

西貢から糧食船でも来ると、殺風景の海賊的活劇が演ぜられた。各艦から糧食を積み取る爲めに、糧食船に派遣された水兵等は、自放自棄で葡萄酒樽や火酒の入つた木箱を叩き壊し、罐のやうに飲んで狸々のやうに泥酔し、有ゆる醜態をさらけ出して耻ぢなかつた。士官がそれを叱り付けると、彼等は朦朧とした醉眼を見張り、渾丹のやうに赤くなつた顔に冷笑を浮べて、無禮極まる痰阿を切る者さへ出た。

「何でえ、何が何うしたてんでえ。俺が口へ俺が勝手に酒を注ぎ込みに、何の不思議があるけえ。へん、餘り見損つて貰ふめえせ、筧捧臭い。叱言などいはれておたまりこぶしが、フン、聞いて呆れらア。」

「不可能」の文字がないと信じた提督の信念は、痛ましくも根底から崩れて、暗澹たる幻影が悪魔の使徒の如く提督の周圍に跳梁した。

四月二十日、提督は艦隊命令でいつた。

「疲勞を防ぎ戦闘準備を整備せしむる爲め、自今驅逐艦の哨戒任務を廢す……昨日一驅逐艦が錨を紛失したるは、同艦が其任務を怠つて猥りに碇泊せしか、若くは碇泊せんとせし形跡を説明す

るものにして、斯の如きは實に許すべからざる怠慢といはざるべからず……。」
提督は「疲勞を除く爲め」といつて居る。秋霜烈日の如き偉大なる提督も、軍規を無視した一驅逐艦の罪を責むる代りに、彼等に安息を與へなければならぬほど、總ての元氣は疲弊して居たのだ。

(七四) 不動泰山の如き口提督 (將校駄小説を耽讀す)

懊惱と倦怠と困憊と墮落とに荷けられて、吾々が單調な漂浪の首途に上つてから、總ての事象は益々激しく淪落の淵に落ち込んだ。

艦隊は晝間悉く運轉を停止して、不安の眼を地平線に曝し抜く。煙や見ゆ？ 潜航艇や見ゆ？ 吾々の視覚は唯此二様の不安の爲めに、意地悪くも鞭たれつゝあつたのだ。

日没後は、這ふやうな三哩の速力で、艦隊は暗い波に彷徨ふた。此三哩の速力は辛ふじて航行序列を保ち、敵の水雷襲撃に對して急に速力を増し、適當な防禦陣形を整へることのできる最低限のものであつた。

提督は間斷なき緊張を人々に要求した。嚴密な警戒、萬全の策、氷の如き冷靜、利刃の如き果斷

總て是等が、戰時狀態の下に、六箇月間熱帯の海洋を過ぎて来た、人々に課せられたる重税であつたのだ。

従つて訓練も操練も單に形式的に過ぎないので、何等の精神も何等の力も籠つて居なかつた。人々は唯豫定の日課に依つて、機械的に動くのみであつた。航海中絶えず士官室を賑はして居た海軍將棋も、今は誰にも顧みられなくなつた。嘗つて何人のポケットからも放たれことのない、戦術書や海軍史にさへ手を觸れる者がなくなつた。

非番の士官は、いつもゴロ／＼して荒唐な駄小説に讀み耽つて居る。就中最も持て囁かれたのが、クリヤノヴスキ女史の「ロチエスター」であつたが、彼等は假令束の間でも、斯うして生の存在を忘れて、「魔術師」や「人生の鍊金藥酒」や「火星の人類」や「匈牙利伯爵の冒險」の不思議に心を奪はれて居たいのであつた。余が斯ういふと笑ふ人があるかも知れないが、事實は何處までも事實であつて、人々は唯一途に周圍の現實から遠ざからう／＼として焦慮つて居るのみであつた。

「此類廢のどん底にあつて、提督は常に變らない！ 彼は決して疲れない！ 彼は吾々を導いて居る！ 彼には勇往邁進あるのみだ！ 彼は尙ほ確乎たる自信を有つて居る！」

人々は斯う信じて疑はなかつた。然し此判断は正鵠を得たものであらうか。彼等は眞に能く提督を知り、且つ其胸底の衷情を究めて、然る後に斯ういふ判断を下したのだらうか。余はそれに就いていふところはないが、彼等は少くともさう信じやうとして居たのだ。そして其運命を提督の掌に中の托して居たのである。

(七五) 日本艦隊の踪跡 (ホルネオ島北方に於ける)

艦隊が暗黒な安南の海岸を三哩の速力で航海して居る時、提督が全艦隊に向つて突然水雷艇防禦操練を強い、溶けるやうな熟睡から疲れた水兵を呼び醒すことに就て、適當な理由を見出し得る者があるか。全艦隊の探海燈は海上に偉大なる電飾境を出現する。恐らく是等の大光芒は地平線を超えて五十哩の遠きに及ぶであらう。

光芒五十哩！ 若し附近に敵が居たとすれば、煌々たる探海燈は却つて、敵に艦隊の所在を示すやうなものではあるまいか。

「提督は何うかしたのぢやないか。あんなことされちや堪らないね、敵の驅逐艦にをいで／＼をきめて居るやうなものだせ。」

余はエス大尉にいつた。

『全くですなア、何うする積りでせう？』

エス大尉は斯ういひながら、興奮した握手を余にくれた。

『どんなことがあつても構はないのかも知れませんが。屹度さうなんでせう。敵の驅逐艦だつてまさか全艦隊を沈めるやうな事はしますまい。多少は残して置くでせうからね。ハツハツハツ！然し、何です。天佑に依つて敵を全滅するなんて、そんな途方もない野心は、否でも應でも最う打捨らなくちやありませんねえ。それを思ふと日本は全く熟慮へて戦つてますよ。彼等は管らないことで、やきもきしませんからねえ。彼等は常に大局に眼を注いで居るんです。商賈で例へりや卸賣一式といふやりかたなんです。』

無闇に勝利者を批評することはできないが、若し險惡な天候に妨げられて（恰度又今頃が一年中で荒天勝ちの期節だ）日本艦隊が對馬海峡に於て乾坤一擲の大決戦の機を逸するとか、又は濃霧の爲めに（今は又恰度此濃霧の期節だ）みす／＼吾々を浦鹽斯德まで見逃してしまふやうなことがあつて、得意の「卸賣」の見込をがらりと外したら、東郷提督は要南海岸に於ける吾々の漂浪期を狙つて、十八番の水雷襲撃を試みなかつた失策を悔ゆるだらう。

が、余は軍令部に於ける露西亞獨特の參謀連に——此連中はいつも事件の濟んだ後に、豫言することを得意として居るんだ——希くば此謎を解かせたいと思ふのだ。

聖彼得堡の參謀連は、ロヂエストンスキー提督が、充分偵察に力を盡さなかつたといつて提督を責めて居る。余は此點に就て意見を吐かうとは思はない。それは歴史が倚故最良なく判斷してくれる。若し其歴史を造つた者が、一切の秘密記録を發表さへするならば、事實の真相は必ず解決されるものである。

斯ういふ連中は、戰場からの報告に誤られたか、それとも、責任の全部をロヂエストンスキー提督に轉嫁せん爲めに、故意に輿論を欺いて居るのか、兎に角、口を拭つて自ら好い兒になつて居る。余は正確に其是非を判斷することはできないが、艦隊が安南沖に漂浪航海を續けて居る間、一切の海戦行爲を見合はせるといふ約束を、佛國官憲に對してしたといふことをいつて置きたいのだ。パリ政府は殊に吾々が海戦行爲の根據地として、佛國の領海を使用しつゝあるといふ疑惑の世界に起るのを懼れた。吾々はパリ政府が吾々に對して、何等の便宜も何等の特典も與へてくれる意志のないといふことは、慥かに聖彼得堡政府から通牒を受けて居た。で、吾々は或特殊の汽船に依つて、諸方に派遣した秘密間諜の手から、必要な情報を求めなければならな

つた。吾々は實際出来るだけの事はして居たんだ。

余は責任を以ていふ。吾々は艦隊が日本海に侵入する十日乃至二週間以前に、驅逐艦を伴ふた敵の巡洋艦隊が、安南、東京、カムボチャ、暹羅の海岸に於ける港灣を、非常に細密に偵察したことを發見した。暹羅灣内には絶好の錨場を有する太古以來人跡未到の無人島が幾つもあるが敵はそんな處までも窺き廻つた。そして、忽焉として地球表面から消えてしまつた。然し、臆るげではあるが此日本艦隊の踪跡は、ボルネオの北方リオ海峽までは解つて居る。彼等は吾々をスンダ海峽で待ち構えて居たらしい。が、吾々が堂々とマラッカ海峽を通過したのを見て、再び諸方面に活動を初めたのである。彼等は一旦ボルネオに去り、四月上旬ベスカドア海岸のモボに集合したらしい。此方面に於てモボを除いては適當な碇泊地がないのである。(臺灣には大艦隊を收容するに足る港灣は一つもないのだ)。

モボでは敵は陸戦隊を揚げて、陸上防備を急造すると同時に、艦隊碇泊場の周圍を敷設水雷で防禦した。斯うして彼等は臨時根據地を此處に定めたのだ。

是から暫らく敵に就ての情報は杳として傳はらなかつた。是は敵の同盟國たる英國が、東洋に於ける海底電線の所有權を有つて居て、日本の爲めに秘密を守つたお蔭であつたのだ。實際彼等

は巧みに蹈晦したもので、宛ら空間から消えたかと思はるゝばかりであつた。

其内にネボカトフ提督が新嘉坡を通過した。此時敵は僅かに再び吾々の秘密問諜の眼界に姿を現はした。

翻つて吾々の方は何うであつたかといふに、無論聖彼得堡では艦隊がスンダ海峽を通過するものとして、和蘭政府とも交渉を開始すると同時に、石炭船をランボンへ派遣するなど、有ゆる準備を怠らなかつたのである。それで斯ういふことは總て嚴重な秘密の裏に行はれたけれども、何うして外間に漏れずに居るものでない、日本の耳へもチャンと入つて居たのである。

提督は自己の決断で針路をスンダ海峽を擇ばず、大膽にもマラッカ海峽を通過したが、彼は此計畫を何人にも告げなかつた。然り、絶對に何人にも——彼は全く自己一人の決心の命ずるところに従つたので、此事に就ては一語の暗號電報も海軍軍令部へ送らなかつた。然るにネボカトフ提督はデブチーを出發する時に、マラッカ海峽通過の意圖を、軍令部へ電報した。勿論其電報は秘密暗號ではあつたが、驚いたことには彼のマラッカ海峽通過の計畫は、英國海峽殖民地の總ての新聞に素張抜かれてしまつた。是等新聞はネボカトフ提督の新嘉坡を通過すべき正確なる日附を互に論議しつゝあつた。恐らく此事に就て盛んな賭金が行はれたことであらう。そして是等

の紛々たる言説は、波羅的艦隊のマラッカ海峡通過を信じない日本の態度を揶揄するが如き観が
あつた。

然し、彼等は是に就て無理のない判断を下した。それはスンダ海峡を通過する筈であつたロヂ
エストンスキー提督が、突如としてマラッカ海峡を抜けたところを見ると、マラッカ海峡を通過
すると號したネボカトフ提督は、必ずスンダ海峡を北に抜けるに相違ないと。然るにネボカトフ
提督さへ正直にマラッカ海峡を南下して新嘉坡の沖に現はれたのだ。

此二様の判断の齟齬は日本に取つては慥かに大打撃であつた。ネボカトフ提督が新嘉坡を通過
したことを知ると、敵は再びベスカドアに姿を現はした。然し、其處に永くは留まらなかつた。
彼等は總ての設備を放棄して北方に去つた。

それ以後に吾々の接手した敵の情報は、彼等が釜山の西方に當る馬山浦——絶好なる碇泊場——
に根據地を置き、潜航艇と驅逐艦とを伴ふた假裝巡洋艦香港丸日本丸を南方に派遣して居ると
いふことであつた。此情報は些の疑ふべき餘地のないほど正確であつたが、而も敵は猶太の漂泊
者のやうに安南の海岸に迂路付く吾々に對して何等の行動にも出なかつた。何故だらう？ 余
は敵の此意圖の裏に如何なる理由が存在するかといふことを發見しやうとも思はないが、若し敵

が吾々の威力を怖れたものだとするれば、其時こそ光榮ある平和を結ぶべき絶好唯一の機會ではな
かつたらうか！ そして其機會を失ふたのは何人の罪であつたらうか！ 想ふに是に答へ得るも
のは歴史あるのみである！

(七六) 緊張せる士氣の反動的現象 (失態續出し提督を惱ます)

實際、當時にあつては敵が假令吾々を全滅の厄に遇はせることができなくとも、少くとも吾々
に大打撃を與ふることは易々たるものであつた。

前にもいつた通り、安南の海岸を迂路付き始めてからは、事々悉く非なりといふ有様であつ
たのだ。余は其證據として、茲に又た提督の下した艦隊命令を引用しなければならぬ悲みに遭遇
した。

「昨夜、艦隊の半速航行中、巡洋艦「ナヒモフ」、戦闘艦「アレキサンダー」、「アリヨール」、
「オレーグ」、「シノイ・ヴェリキー」の五隻は、著しく後方に落ち、前線艦との距離制規の二倍
乃至三倍に展開せり。余は是等諸艦の艦長に對し、戦闘中斯の如き失態なからんことを望む。又
同夜水雷艇防禦操練に於て、戦闘艦「シノイ・ヴェリキー」、「ナワリン」、巡洋艦「ナヒモフ」

の諸艦の點せし探海燈は、其光力の微弱なる到底探海燈と稱するを得ず。斯の如きは實に發光性濃氣の放射線と何等擇ぶ所なし。是れ責任者が其機能と調整とに些の注意も拂はざりし懈怠の罪といはざるべからず。全巡洋艦隊は旗艦が規定の探海燈信號法に依り、消燈と射撃の中止を命ぜしにも係はらず、依然として照燈と射撃とを繼續せり。若し實戰に於て斯の如くんば、誤つて僚艦を射撃する悞なしとせず。」

「五月五日、哨戒任務を帯びたる「キューバン」は、二隻の驅逐艦を發見せしが、該驅逐艦は「キューバン」を見るや否や倉皇として、艦尾に佛國々旗を掲揚し、全速力にて汽走し去れりといふ。然るに「キューバン」の艦長は、駭駭逐艦が果して佛國驅逐艦なりしや否やを確認すること必要と思惟せざりしが如し。又同夜哨戒航行中なりし「ドミトリドンスコイ」の艦長は、無線電信を以て外洋方面に探海燈の光芒を認むと報告せしも、灣内に在りし旗艦も又丘岡を超えて、該光芒の上向せるを發見せり。而して其所在を方向より案するに、哨艦「ウラル」の位置線上にありしが如し。然らば「ウラル」は旗艦及び「ドンスコイ」よりも尙ほ遙かに該探海燈を明らかに望むべき理由ありといはざるべからず。然るに「ドンスコイ」艦長は「ウラル」に對し、該怪光を認めしや否やを確かめんとはせず、「ウラル」又無線電信を以て之に關し何等報告する處あらざりき。

而して余が「ドンスコイ」に命じ「ウラル」に該件に付き問ひ合はす處あらしめしに、「ウラル」は恬然として「ドンスコイ」の無線電信に答へざりき。此時に當り「ドンスコイ」は探海燈信號法を以て「ウラル」の注意を促すことを努めず、「ウラル」に接近する目的を以て狼りに所定の位置を去り、却つて旗艦無線電信の有効距離外に去り、遂に哨戒連絡の任務を放棄するに至れり。而も「ウラル」の回答を得るに實に九時間の長きを費し（午後八時—午前五時）、爲めに當夜の哨戒は甚しく不結果に終りたり。斯の如きは應變の處置を怠り、任務を尊重せざるの罪に職由するものにして、而も、如上の出來事が殆んど連日發生するは、深く本官の遺憾とする處也。」

提督は艦隊命令に斯う書いて居る。彼はさう書くことを至當と信じて居るのだ。然し、此場合余は義務として聊か辯ずるところありたいと思ふのだ。

「臨機の處置を缺き任務を尊重しない」のは慥かに事實である。然し、翻つて考へて見るに彼等が平素適當なる訓練を受けて居なかつたとすれば、提督の要求する處は彼等に取つて至難の事に屬さなければならぬ。個人の場合に在つても、大した時間を要しないでも、非常な熱心と日課の勵行とで、訓練の缺陷を補ふことは、必ずしも不可能ではないが、人間の耐久力は無限ではない。往昔、銃器の發明されない以前、弓は出陣の間際に絃を張つて、戰雲散じたる後は再び絃から放

たれ、静かな安息の時を與へられたものである。然るにロヂエストーンスキー提督麾下の波羅的艦隊には、絶対に安息といふものがないのだ。

マダカスガル島に着くと同時に昂然として熱沸した士氣は、ノシベに於ける一箇月の碇泊に影もなく消滅し、さればといつて、新たにマラツカ海峽通過の成功に依つて高潮に達した元氣も利用されずにしまつた。想ふにマダカスガルに於て昂つた士氣よりも、マラツカ海峽を超えた刹那の方が、遙かに緊張したものであつたには相違ないけれども、頽廢と消滅の度も又従つて脆いものであつた。宛ら跳濤の泡が消えて靜平な長濤に變つて行くやうに――。

(七七) 愈よ佛國領海を去る (佛國提督の訣別辭)

余の日記には、ネボカトフ提督麾下の艦隊が、一隻々々地平線の底から、其如何にも重々しい姿を現はして、吾々の艦隊に來り加はつた當時の光景が、悉しく誌されてある。

それは實に莊嚴なものであつた。人々は泣然として泣いた。彼等は一齊に歡聲をあげた。

「吾々は最う是で強くなつたぞ！ 今こそ敵を全滅することを望み得るのだ！」

人々の歡喜は此意味に於て湧き立つたのであらうか。決してさうではないのだ。斯様に考へる

のは、聖彼得堡に在つて、安樂椅子に凭れ込み、海上の經驗といへば、僅かに首都とクロンスタットの間を往復したに過ぎないやうな、賢明な戦術家位なものであらう。

ネボカトフ提督麾下の「重錘」を見て喜んだのは、唯彼等の友達の來たのを喜んでそれを祝福したに過ぎない。それも同提督の艦隊が吾々の威力を増したからでは決してないので、何時までもべん／＼と待つてゐる必要がなくなつたからであつたのだ。

此艦隊も長く吾々の心を悩ましたが、斯うしてとう／＼やつて來て見れば、最う何うすることもできないのである。然し、假りにネボカトフ提督の率ゆる艦隊の代りに、日本艦隊が現はれたとしたら何うであらうか。吾々は少くともネボカトフ艦隊を迎へると同じ程度の、歡喜を胸に湧かせ得たかも知れない。

提督は艦隊命令で新艦隊の來援を尊重し、是に依つて士氣を作興すべきを慫慂したが、それは單に形式的のものに過ぎなかつたのだ。二十八隻の戦艦から組織されたる英國艦隊との衝突が避くべからざる形勢に見えたとき、提督がヅキゴで發した命令に於ける高潮的文字、若くはマダカスガル島沿岸沖を航行中の復活祭に於て試みた提督の雄辯に比べては、新たに發せられたる命令の如きは、實に無味乾燥なものであつたのだ。

吾々が外洋に浮んで居る四日間、ネボカトフ艦隊はボート・デイヨットに碇泊して居た。此間同艦隊は一切の需品を補充するばかりではなく、海戦に必要なロヂエストンスキー提督の艦隊命令及び其他の回章に通じなければならなかつた。就中、需品の補充は出来るだけ至急を要する事情があつたのだ。それはジョンキール少將が佛國を代表して、何時退去を要求する爲めにやつて来るかも知れないからであつたのだ。

五月十四日、ジョンキール少將は果して「ギツチエン」に坐乗して吾々の眼前に現はれて来た。然し、其時、全艦隊は既に佛國領海の外に在つて、航行序列を整へて居た後であつた。吾々はジョンキール少將が故意に、波羅的艦隊に取つて都合の好い機会を擇んだのか、若しくは彼が偶然退去を要求する爲めに來て見ると、吾々が既に領海の外に在つたのかは知ることが出来ないけれども、兎に角、彼は是限り吾々に向つて領海外退去を「要求するの光榮を有する」必要がなくなつたのだ。彼は滿腔の熱誠を無線電信に罩めて、艦隊の「安全なる航海と來るべき海戦に於ける成功」とを祈つた。

ネボカトフ艦隊は海戦の第一義ともいふべき、實彈射撃演習を行ふことができなかった。何故なれば、所謂「第一に彈丸がない……」といふやつで、艦隊運動の如きは、航海中機會の許す範

圍内に於て行はるゝことゝなつた。吾々は海戦を眼前に控へて居るのだ。教練も訓練も最う斯うなつては時機に後れて居るのだ。

(七八) 朝鮮海峡突破の決心 (局面逆轉の計畫破る)

余は乗組員の健康状態に就て少しばかり語りた。一般給與の方法が完全に行はれたのと、提督が全艦隊の衛生上に嚴密な注意を怠らなかつたお蔭で、全員の健康は殆んど満足の状態に在つた。一萬人の人間が鐵函の中に押詰められて、六箇月間熱帯の海に浮べられてあつたにも係はらず、一つの傳染病も起らなかつた。

過勞に原因する精神錯亂は極く稀に起つた。余は今手許に統計を有つて居ないから、全艦隊に就ていふことはできぬ。唯「スワロフ」に起つたことに就いてのみいふのである。

余が前にも述べたやうに、ロヂエストンスキー提督はマダカスガル島で健康を害した。然し、彼は二日間病牀に横はつて居ただけで、彼は軍醫の注意をも斥け、彼自身の強烈な意志の力で、兩比艦橋に其姿を現はした。彼はそれ以來常に健康が勝れなかつた。で、何か特殊な興奮か努力でもした時には、直ぐにそれが彼の健康に影響すると見えた。具合の悪い脚を引き摺るやうにし

て歩くのが眼に立つた。實際提督は骨と皮とで造り上げたといつてもいゝやうに見えた。参謀長は安南に向け航行中局所麻痺の爲めに極く輕微の心臓病に罹つたが、それでも職務を廢するやうなことはなかつた。

艦隊航海長は食道癌に罹つたといつて、極く柔らかな食事を取つて警戒して居たが、軍醫は笑つて、

「何有、そんなことがあるものか、そいつは食道瘤なんだ。」といつて居た。

後任副官は生來非常に蒲柳の質であつたが、彼も軍醫の注意に依つて、阿片とモルヒネの御危介にならなければならなくなつた。水雷参謀エル大尉も何うやらそんな風が見えた。

見たところ頑丈らしい参謀エヌ大尉もとう／＼軍醫の處へ駈け付けた。

「君は今迄どんな藥劑を飲んでるね？」と軍醫が聞いたとき、

「主治醫は神経を鎮靜する爲めと、睡眠不足を救ふ爲めに、プロマイドの入つた藥劑を服めといつて居た。」と彼は答へて居た。

「スワロフ」乗組の士官中では、先づ此三人が病人らしい連中であつた。

艦長ジエー大佐は元氣の旺盛な人であつた。彼は敗戦を確信して居たが、天來の運命を悲觀す

るやうなことは決してなかつた。彼は一旦覺悟を定めてからは、唯艦と乗組員との爲めに計る外敢て餘念はなかつたのだ。

「吾々が何うなるだらうといふのか？ そんなことが解るものか。彈丸、水雷、毒瓦斯、重傷、窒息、沈没、總て是等で殺されるにしても、そりや悉皆全能の神の御旨と、それから、本國政府といふ不可抗力の壓迫に依るのだ。吾々は唯吾々の義務を盡せばよいのだ。イザ海戦となると敵艦隊の全砲火は先づ「スワロフ」に集中されるに定まつて居る。何のことはない敵彈の霰が降るやうなものだ。然し、乃公は既に必要な命令を與へて居る。で、乃公が死ぬれば、副長が指揮をする、副長が死ぬれば先任將校が、といふ風に相次いで、艦の操縦を受持つやうに何人の頭にも染み込ましてあるのぢや。若し「スワロフ」が愈よいけないとなつたら、自然の運命に任すがよい。が、其前に必ず提督を他の健全な艦に移すことを忘れてはならない。閣下に萬一の異變があれば、それこそ萬事休矣ぢや。乃公は唯閣下が必ず其千金を艦の敵火の下に曝さるゝであらうといふことを怖れて居るのぢや。さうすれば、敵彈は第一發目に閣下の生命を奪ふに相違ない。すれば、何も彼も最う駄目ぢや！」

艦隊に取つて重大なる損失はフェルケルザム提督の病死であつた。彼は素養あり經驗あり元氣

ある海軍士官であつた。彼はまだ艦隊には必要な人間であつた、ロヂエストンスキー提督の親友としても同僚としても。

彼はネボカトフ艦隊の来り合はつたときにはまだ生きて居たが、既に臨終の日が眼前に迫つて居た。

彼は永久に安息の國に睡つて居る。彼はロヂエストンスキー提督のやうに、露西亞艦隊敗戦の惨を見なかつた。彼の遺骸を収めた柩は、旗艦「オスラビヤ」の上甲板中央、聖像の下に据えられた儘、日本海の底深く沈んで居るのだ。彼の死後士氣の沈衰を慮つて「オスラビヤ」の橋頭から少將旗を卸さなかつたので、今も尙ほ冷たい波に揺られて、彼の悲惨な最後を弔つて居るかも知れない。

余は安南海岸の漂浪行に於て、エス大尉から艦隊のことに就て多くの智識を得た。余はそれを語りたと思ふ。

ロヂエストンスキー提督の最初の意圖は、旅順の封鎖を破つて太平洋第一艦隊（旅順艦隊）と合同するにあつた。旅順艦隊と波羅的艦隊と聯合し、是に浦鹽斯德艦隊を加ふれば、四隻の戦艦八隻の装甲巡洋艦から成立つ日本艦隊を威壓して、局面を逆轉することができるといふのが、

波羅的艦隊東航の第一義であつたのだ。

然るに旅順艦隊の全滅と旅順要塞の閉城は、此劈頭計畫を根柢から覆した。で、提督は更に第二策を立てた。それは優勢な軍艦を選抜して突進艦隊を編成し浦鹽斯德に強航して、日本艦隊の勢力に打撃を與へてやるといふにあつた。ところが、不幸にして此計畫も海軍軍令部の同意するところとならなかつた。提督は遂にネボカトフ提督の増援隊を待合はせて、遂に佛國の領海を去るべく餘儀なくされたのだ。

斯くて猛烈果敢な提督は、道を朝鮮海峡に取るに決して、是に就て必要な方略を立てた。

特務船「キユパン」、「テレーク」の二隻が太平洋を迂回したのも、日本艦隊の注意を促がして其勢力を割かしむると同時に、此方面に於ける貿易線を脅す豫定であつたのだが、何故か此二隻は日本海岸に其姿を現はさなかつたので、敵は其所在に對して何等の注意をも拂はなかつたのである。

提督の命令に依つて、艦隊は愈よ突進準備を急いだ。各艦は出來得る限り需品を満載した。特務船「アナツール」、「イルテツシユ」、「コリヤ」も亦一切の必需品の搭載を終えた。工作船「ゼニア」は艦隊機關長及び幕僚造船技師の必要とする人員材料を、悉く「カムチャツカ」に移し

た。六隻の特務船は西貢に、七隻の特務船及び「ゼニア」は上海に向つて出發した。

「アナヅール」、「イルチツシユ」、「コリヤ」、「カムチャツカ」は、艦隊に従つて、其運命を共にしなければならなかつた。此四隻の外に曳船「ラス」、脚筒船「スヅキル」、病院船「アリヨール」、同「カストロマ」の四隻も、活劇の舞臺に一個の役を受持つことになつた。

で、曩きに西貢及び上海に派遣された特務船は、炭水糧食を積み取り、豫て命せられたる會合地點に向つて出發すべき準備を整へて待つて居た。

艦隊は五月十四日、愈よ安南の海岸を去つた。

(七九) 士氣大に振ふ (希くば敵と遭遇するまで続けかし)

五月十四日、今日は日曜で露西亞の節句日である。斯ういふ日に航するといふのは全くいふ前兆である。艦隊は午前六時に拔錨を始めて、午前八時には航行序列を整へ、偉大なる艦隊の集團を灣の外に浮べた。提督は特務船隊に向けて信號した。

「各驅逐艦を曳航せよ。」

例に依つてジョンキール少將は「ギツチエン」に坐乗して、多少示威的態度で吾々の出發を

監視した。

少將は今こそ初めて波羅的艦隊が、佛國の領海を去りきつたといふことを、巴里政府に報告することができるとだ。彼は無線電信で艦隊の前途を祝福した。ア、彼は實に同情ある紳士である！吾々は彼の祝福が全く眞摯であつたことを思はずには居られぬ。吾々は何を以て彼の好意に酬ゆべきであらうか。

「左様なら、閣下御機嫌よう。」

午前十一時、長蛇の如き艦隊は北へくと伸びた。速力九浬、希くば天佑の吾等の上にあらんことを！

艦隊の士氣は再び緊張した。恐らく此状態は敵に遭遇するまで續くだらう。其處此處には諧謔を弄する者などがあつた。

「第三艦隊の司令長官は「スラワ」に長官旗を掲揚するさうだ。然し最う名譽の收穫はないだらう。假令、彼が極東へ来たとしても、何も居やしないからね。さうすりや何うすることもできないんだ。」

エス大尉は曇つた顔をしてブツ／＼いつて居た。彼は海圖に入れられた艦隊の針路を指して、

「地獄へ落ちて行くやうだ。」といつて居た。

総員集合と祈禱の後に、吾々は出港を祝する爲めに、強麥酒の盃を乾した。

エス大尉は再び語り出した。

「疫病を祝ふやうだね。」

余は彼の不吉の言葉をたしなめた。勿論怒つてゐるのではない。笑ひながら彼を叱り付けた。

彼は何故さう悲観するのだらう！ 吾々には何も彼も能く知れて居るのだ。吾々は斯うなつて

は總ての事を忍ばなければならぬ。吾々の思ふやうにすることは到底出来るものではない。何うせ人間といふ奴は一度しか死なないのだ。

五月十五日、何等の混雑も異變も起らなかつた。夜更けて自分は士官室を覗いて見た。と、機關長ダブルユー君とケー君(豫備少尉)とジー君(同上)の三人が、サンドウイッチを摘みながら、麥酒を飲んで居た。

「何うした譯だい？」と訊くと、

「航海者にも似合はないことをいふぢやないか。聖彼得堡と此處とは經度に八度の差があるせ。今頃は首府の獨逸人は皆カテリネホフあたりで晝餐を食つてゐるぢやないか。」といつてハッハ

ツハツと笑つて居る。元氣のいゝ連中だ。

天氣は晴明であつた。氣温も和らかであつた。新嘉坡から香港に向ふ三隻の汽船を見た。

五月十六日。惨たる月光が波に落ちて、洋上は晝のやうに明るかつた。斯ういふ晩には探海燈は全く無用である。特務船を伴ふて行動の自由を束縛されて居る艦隊に取つては、敵の水雷襲撃は實に怖るべきものであつた。

故障がソロ／＼各艦船に起り始めた。錨地を去つて三日間に、汽船「タンポフ」が二度、戦闘

艦「アリヨール」、「ナワリン」、「シンキ・ヴェリキー」の各艦が各々一度宛故障を起した。無論そ

れ等の損傷は間もなく修理されたが、其度毎に艦隊の航程が後れるのだ。のみならず、それ等の故障が果して完全に修理されたか何うかといふことは甚だ不確實で、若し其場だけの責塞ぎであ

つたとすれば、敵艦隊と衝突した場合には由々敷大事が起るものと覺悟しなければならぬ。

提督は前衛偵察艦を無線電信の有効距離内に於て、出来るだけ前進させやうとしたが、無線電信機は到底旨く働くまい。して見ればそれは絶望である。噫！ 此の如き罪惡は抑も何人が發見

すべきであらうか！ 造船委員會は果してそれを、スラビーアルコ式の不完全に歸するか、それとも水雷士官の責任に歸せんとするか。

五月十七日、此朝「ナワリン」に新故障が起つた。艦隊はそれが爲めに五時間も進航を妨げられた。偵察艦は距離を信號の利く範圍内に縮めて、艦隊の爲めに單に見張艦となつた。

午後五時三十分、「アリヨール」が舵機に故障を生じて一時序列外に去つた。

此日は實に暑熱が激しかった。太陽が人々の頭上に焙烙の焔のやうに輝いて居たときには、誰も彼も其威力に打たれて沈黙するの外はなかつた。

五月十八日、夜は平穩に更けた。拂曉、全艦隊は洋上に漂泊して、石炭積載を開始した。テボ

カフト提督麾下の各艦は、洋上積載に慣れなかつたので、成績はまるで成つて居なかつた。

午後三時、艦隊は石炭を積み終つた。石炭船「タンボフ」と「マアキユリイ」は西貢に引き還

した。艦隊は信號で彼船等の援助を感謝した。午後八時、艦隊は序列を正して進航を始めたが、突如として新たに故障が起つた。「タンボフ」が西貢に還つたので、彼船の曳航した驅逐艦を、汽船「リヴオニア」が代つて曳くことになつた。同船が曳索を取り終つて進航を開始するまでには一時半を要した。が、曳索は二時間ばかり経つと外れてしまつた。「リヴオニア」では何うも調子が悪いので「スヅキル」が代つて曳いたが、其間艦隊は僅かに三哩の速力で、地上を匍行する蛆蟲のやうに歩いて居た。

午後八時、吾々は艦尾に當つて一汽船を發見した。提督は「オレーグ」に命じて其船を臨検せしめた。同船は英國汽船「オールドハマヤ」であつた。船長は載貨が石油であつて、行先地が長崎であるといつた。

吾々は其汽船に續航を命じ臨検を翌日に延期した。

五月十九日、午前二時、「アブラキシン」の機關に故障を生じた。而も修理に廿四時間を要する

といふのだ。尤も其間六哩位の速力を出す位なら差問題は無い筈だ。何たる難有い仕合はせかい？

吾々は本國の海軍當局及び彼等の送つた斯の如き厄左な軍艦を呪はなければならぬ。

豫備少尉ケーは召集さるゝ前まで商船の運轉士であつたので、

「長崎までの石炭は有つて居ませうが、其他の炭庫は空虚です。然るに彼船はブリムソル記號まで沈んで居るぢやありませんか。石油なんでもは容量の割合には重くないのです。で、斯ういふ品物だと船艙へ積む外に、甲板積みまでやるんです。然しそれでは頭が重くなるから、バラスト槽へ潮水をいつばい張るんです。さうして石炭を普通に積んでも、ブリムソル記號は水線の上にあるものなのです。ところで「オールドハマヤ」は何うでせう？ 石炭は残つて居ないし、載

貨は普通の船艙を満たすに過ぎません。さうかといつて、甲板積みを行つた形跡もない。それで何うしてあんなに船脚が重いのでせう？ 可怪しいぢやありませんか。そこで僕は石油箱の底に何か別に重いものが隠匿してあると思ふのです。』

さう聞いて見ると、船長が必要な船舶書類を有たないといふのも怪しむべき點である。で、乗組水夫を訊問して見ると、船長手飼の水夫二人を除くの外は、出帆の前日乗組んだばかりで、荷役の時には居合せなかつたことが解つた。従つて石油箱の底に何が入つて居るかといふことを知つて居なかつた。臨検に立ち會つた船長と例の二人の水夫と機関長は、臨検將校の訊問に答へない——といふより、寧ろ答へることを避けて居るやうに見えた。スルト、水夫の中から獨逸生れの奴が、例の二人の水夫の話を立聞きしたといつて、

『前部船艙には彈丸、後部船艙には大砲が積んであるらしいですせ。』と臨検將校に密告した。

「オールドハミヤ」の訝しむべき理由は是で充分となつた。で、提督は同船を拿捕して浦鹽斯德へ護送する決心をした、然し石炭が充分でなかつたから、「リヴオニア」から六百噸の石炭を同船に分配することになつた。各艦から士官と水兵とを派遣して、積載作業を助けさせた。艦隊は是が爲めに、其日の午前中漂泊しなければならなくなつた。

午前十時、吾々は他の汽船に停止を命じた。然しそれは諾威汽船で載貨も何もなく南航するのであつたので間もなく解放した。

提督は此漂泊の間を利用して、艦隊命令を各艦に配布した。此命令は日本沿岸通過中に於ける夜間航行序列及び機械水雷の警戒に關するものであつた。

午前十一時三十分、全艦隊は夥しき其暗車で、靜かな海に波紋を描きつゝ北向の途に上ぼつた。

「リヴオニア」は拿捕船「オールドハミヤ」の曳船準備を急ぎつゝ一方に於て石炭の移載に勵んだ。此間臨検隊は「オールドハミヤ」の船艙を嚴重に搜索したが、故意かそれとも荷役を急いだ爲めか、積み方が非常に紛糾して居たので、一々それをひつくりかへして見ることは容易でなかつた。殊に水兵等は此種の作業に慣れて居なかつたので、搜索は一層困難であつたが、船脚の重い割合に載貨の案外に尠かつたことは、疑惑を益々深くさせた。

五月二十日、午前五時、前夜から吹き續いた強風は、漆黒の海に波を煽つた。其都度激しく艦首や舷側に碎くる潮の飛沫は、上甲板に落ちて早瀬の川のやうに流れた。「リヴオニア」と拿捕船「オールドハミヤ」は艦隊と分離した。

跳濤は依然として艦を襲ふた。舷窓を悉く密閉したので船室は蒸し暑くて堪えられない。動搖は緩やかな週期で吾々を悩まして居た。

余は夜の明けのを待ち兼ねて上甲板に出た。清浄な初夏の曉の空気がどんなに余を慰めてくれたことであらう。余は是だから海洋が好きなんだ。最う下甲板へ降りて行くのは厭やになつた。

波はまだ騒いで居た。海面をなでるやうな輕風が、ソヨ／＼と波を渡つて居た。斯ういふ時に深呼吸を行ふのは愉快なものだ。

艦隊は今臺灣と非律賓との間に横はるバタン、サバタンの諸島を過ぎりつゝあるのだ。

正月二十一日、吾々は暗車の一廻轉毎に敵に近きつゝあるのだ。が、昨日は何事も起らずに過ぎた。今朝、「オールドハミヤ」から陸檢隊が歸つて来た。彼等も船艙を全部搜索することは不可能であつた。然し彼船は拿捕されることに決定して、單獨宗谷海峡を通過して浦鹽斯德に航行を命ぜられた。で、其監督將校として「スワロフ」からテ豫備少尉が同船に乗組を命ぜられた各艦からも水兵を撰抜して同船に送つた。

（八〇） 徹頭徹尾前進せん（總勘定をするんだ）

船長、機關長、運轉手などは、後に面倒の起るのを慮かつて、悉く退去を命ぜらるゝ筈であつた。彼等は同船が拿捕を免れることができないと見て取つた時、既に自ら沈没を企てたことすらある。それにしても、彼等は何處へ移さるゝのであらうか。何れかの軍艦にでもあるか。

提督は、中立國の人民を砲火の下に曝すことを敢てしなかつた。で、彼は赤十字旗を掲揚した病院船「アリヨール」に便乗させて、附近の中立港に送ることにした。

「オールドハミヤ」の高等船員を受取つた病院船「アリヨール」は意外の信號を掲揚していふた。「無病健全なる五人の英國人來船せり。如何に取扱ふべきや？」

提督は之に對して、次の入港地まで、「彼等の健康に留意せよ」といふやうな答へを與へた。

午後二時、最初に「ゼムチューグ」、次に「オスラビヤ」、最後に「スヴェートラナ」が、相亞いで碧空に泳ぐ一個の輕氣球を發見した。「スヴェートラナ」の如きは其高度と方向をさへ報告した。で、「オレーグ」と「ゼムチューグ」の二艦が、直ちに其方向に派遣されたが、何等の結果も齎らすことができなかった。「スワロフ」でも此氣球を見た者が尠くなかつたのだが、余は不幸にし

て其所在を發見し得なかつた。

副官エヌ大尉は其氣球が圓形のものでなく、繫留索の切斷された飛行鳥若くは飛行機の形をしたものだといつて居た。其氣球は非常なる高空を南方に向ひつゝあつたといふことであつた。余は、若し氣球に人間が乗つて居たとしても、敢て彼等を怨むやうなことはしまい。

日没頃から空が曇り始め、物凄しい雷鳴は聽て沛然たる雨を伴ふた。

五月二十二日、夜、視界は濃氣に閉されたが、清涼の氣は水のやうに流れて居た。人々は初めて熱帯から足を踏み出したことを思ふた。午前八時、吾々は針路を北二十度東に變じた。此針路は艦隊を宮古及び琉球の間に導くべき筈である。

空は依然として曇つて居た。其上霧が降りて波はかなり高かつた。北々東の風が眞向から艦隊を威壓した。

昨日は「キユバン」、今日は「テレック」、孰れも艦隊を去つて、太平洋を浦鹽斯德へ直行した。

風は北東に變じた。提督は艦隊運動の開始を命じた。是は主としてネボカトフ提督枝隊の爲めであつて、同枝隊が航海中何等斯の如き訓練を行はなかつた缺陷を補はん爲めであつた。

運動は支離滅裂を極めた。噫！何たる悲惨なる光景であらう？

斯の如き天候では石炭を積むことができなかつたが、其代り日本の領土たる附近の島々から、艦隊の所在を發見される憂がなかつた。即ち、吾々の存在が世界の何處にも知れないといふことになつて居るのだ。謎！謎！波羅的艦隊が今何處に居るといふことは、全く深い謎に相違なかつた。吾々は、明日、琉球列島が全く視界の外に去つた後に石炭を積み取つてからは、一隻の汽船にも出會したくないものである。日没後、海は平板のやうに静かになつた。

五月廿三日、午前五時三十分、全艦隊は洋上に停止して石炭積載を始めた。波は無かつたが何となく天候が訝しまれてならなかつた。

雨が時々降つて來た。

各艦隊は旗艦から、浦鹽斯德に入る迄、是が最後の石炭積載であることを諭達された。吾々は二十六日朝の石炭庫に制規の容量を見るやうに、最善を盡して積載作業を勵んだ。艦隊が石炭を積み過ぎたといふが如きは、事實を誣ゆる短見者流の謂であるのだ。

ノシベ以來長途の航海に病軀を悩ましたフェルケルザム提督が遂に昏睡状態に陥り、體温が華氏九十五度、脈搏六十を數ふるに至つたとき、余は艦隊軍醫長を捉へて、

『フェルケルザム提督の容態は何うだね？ 體温九十五度で脈搏六十といふのは、つまり何うい

ふことになるんだね？」と訊いて見た。

彼はつぶやくやうに、

『到底駄目だね。』といつて行つてしまつた。

フェルケルザム提督の旗艦「オストラビヤ」の艦長は、提督の死後と雖も決して司令官旗を撤せざらんことを秘密に命ぜられて居た。それは過敏になつた艦隊の神経を動揺せしめないが爲めであつたが、超えて廿七日の晩、鐵火の響きと、敗衄の叫喚とを聞きながら、提督は遂に最後の息を引き取つてしまつた。

戦鬪の夜に於ける提督の最後！ 人々は必ずしも其感情に特殊の刺激を受けなかつたかも知れないが、少くとも怖るべき凶兆として見たことであらうと思はれる。

艦隊が最後の石炭積載を行つて居る間、最後の艦隊命令が發せられた。

五月二十四日、天候は益々險惡の狀態に陥つた。然し、幸なる哉！ 艦隊は整然として最早何等の故障も何等の遲滯の原因も起さなかつた。強敵を眼前に控えた吾々に取つては、是が何よりの仕合せであつた。士氣は有聲に緊張して人々の面には最後の決心が現はれた。

五月二十五日、雨は夜を徹して暗黒な下界に降り注いだ。夜が明けても空は灰色に曇つて、疾

風に伴はれた驟雨が、時々思ひ出したやうに艦隊を襲ふた。

提督は石炭船を解放する前、各驅逐艦に命じて最後の石炭を積み取らせた。何故なれば浦鹽斯德へ入港する間には、到底斯る機會がないと信じたからである。が、險惡な天候の爲めに、作業は遂に成功しなかつた。然し特殊の出來事が起らない限りは、各驅逐艦は炭庫に持合はせの量だけで差間は起らない筈である。斯ういふことがあるから豫備といふことは必要であるのだ。

楊子江口を左舷九十里に見て支那海を北上しつゝ、艦隊は石炭船隊を上海に送つた。特務船「ドニエール」も「リオン」の二隻は之と共に同行した。此二隻は楊子江口まで石炭船を護衛すると同時に日本南方の諸港及び黄海に通ずる通商線を脅かす爲めとであつた。

艦隊は彼船等に對して興奮的意味を有する信號を掲揚して其別離を送つた。吾々の視界は僅かに二哩乃至三哩に減じた。それが爲めに臺灣の南方から今日に至るまで、艦隊は何者にも發見されてあらんことを望んで止まなかつた。

海は暗濶として夜よりも暗かつた。エス大尉は艦橋を降りたり昇つたりして居た。余は彼を捉えて話しかけた。

「ねえ、君、考へて見ると、吾々も随分遠方へ来たものぢやないか。そして——。」

「そして——？」

「而も、尙ほ前途遠遠なりぢや。」

「さうです。吾々は徹頭徹尾進むんです……然し、貴下は何とかいひましたね？ 僕は一寸追懐

せないのです……オ、さう——「總勘定」をするんでしたつねね！」

——(完)——

附録 漁船砲撃事件真相

(一) 惨絶なる砲火の犠牲

吾々はヅキゴーに投錨して、漁船砲撃事件の火の手の旺なのに吃驚してしまつた。英國の諸新聞の如きは波羅的艦隊を號して「狂犬艦隊」といつた。

「斯の如き艦隊は木國に召還するか、然らざれば宜しく破壊すべし。」といふのが、彼等共通の論法だから驚かざるを得ない。

彼等は漁船砲撃事件の性質を「海賊行爲」であると強いた。けれども、「海賊行爲」が個人的利益を目的とする以上、假りに百歩を彼等に譲つても相手にするに足る論法ではない。

それよりか、注意すべきは、英國の諸新聞が、「露西亞水雷艇が拂曉まで現場に居残り、其戦友を救助しながら、被害者漁船に對して何等機宜の手段を取らなかつた」といふことを攻撃しつゝある一事であつた。

此事は無論被害者たる漁夫の口から擴がつたものに相違ないが、彼等は是に就て、
「古代の野蠻人でも偶然戦鬪の犠牲となつた者の生命を奪ふやうなことはしない。然るに波羅的艦隊は無辜の漁夫に對して殘虐を恣にして居る。斯の如き罪惡に對して、露西亞が充分満足な解決に努めなければ、其罪惡の跡は宜しく血を以て拭はなければならぬ。勿論、波羅的艦隊を召還して、其司令長官、艦長、各士官を法廷に於て答問すべきであるが、彼無慈悲なる水雷艇長に對しては、殊に嚴酷なる處分を望まなければならぬ」といつて猛烈に攻撃の毒矢を放つて居た。が、吾々から見れば、是は所謂「頭隠して尻隠さず」である。

「拂曉まで現場に露國水雷艇が一隻居残つた」

此事は少くとも水雷艇の存在が事實であつたことに裏書するものである。吾々は幸にして炯眼な見張番の爲めに、怖るべき襲撃を免れたけれども、若し水雷艇の襲撃に對し、艦隊が砲火を以て之を撃退する場合に、偶然無辜の人間が傷いたとしたら、それは勿論同情すべきである。然しながらそれを何うするかといふことに就ては、吾々に絶好な前例がある。旅順の要塞戦では砲火の爲めに、婦人小兒までも生命を奪はれて居る。是は婦人小兒が砲火の主要目的でも副目的でもなく、眞に偶然の不幸であつたので、露西亞政府は之に對し深厚な弔意を表し、共遺族に損害を

賠償して居る。そして、是が斯の如き場合に處する最善であるのだ。

余は彼是理屈がましいことをいふのを避け、後に至つて聞いたことを物語らう。

ロヂエストンスキー提督は英國の新聞の、漁船砲撃事件に關する論調を見るや否や、直ちに倫敦露國大使館附海軍武官に打電して、

「常夜波羅的艦隊附屬の驅逐艦は、本隊より二哩以上も前方に在たので、決して漁船の被害場所に残るべき筈はない。されば砲撃の翌朝まで現所に居たといふのは、露西亞水雷艇ではなくて、艦隊を襲撃せんとして其目的を達することのできなかつた水雷艇であつたのだ。而して彼艦は損傷を修理しつゝあつたか、僚艇を待ち合はせつゝあつたものに相違ない。」と抗議すべきを依頼した。けれども、此抗議は遂に何れの新聞紙上にも現れなかつた。と同時に、手前勝手な英國新聞も不思議にそれまで頑強に主張して居た彼等漁夫の證言を、ぶつたり忘れたやうに掲載しなかつた。

尤も這麼ことは、巴里の列國調査委員會で、英國委員が、「英國漁船に過失はあつたに相違ない。が、現所には絶対に水雷艇は居なかつたので、其處を航過した「カムチャツカ」が水雷艇と誤認したのは、操縦上に過失のあつた其漁船であつたものと見える」と主張したのに比べれば、決し

て氣にするほどの事ではない。

英國委員は「カムチャツカ」が、疑問の海上を十月二十二日の拂曉に通過したことから、「夜が明けてから漁夫の見た水雷艇といふのは、恐らく「カムチャツカ」を見誤まつたのであらう」といつて居るが、余は全世界の経験ある航海家に訊いて見たい。何處に、白晝、乾舷の高い特殊の形をした「カムチャツカ」を、水雷艇と間違へるやうな間抜けの漁夫があるかと？ 殊に海上往來の「海犬」ともいはれた英國の漁夫に、そんな馬鹿なことをいふ奴がある筈がないでないか。

全く漁夫の幼兒でもさういふ埒もないをいふものでない。而も堂々たる英國海軍將校が、「カムチャツカ」を水雷艇といふに至つては、驚を以て鴉と強ゆるよりもまだ酷い。

それよりも尙ほ遙かに確實な證據は、艦隊の乗組員が肉眼で確かに水雷艇を見たといふ事實其物である。即ち彼等は煙突及び橋の數、上甲板の艦装、外舷の色等から、水雷艇が艦隊を襲はんとして居たのを知つたので、而も其水雷艇を實見したのは、單に一隻の軍艦にとゞまらずして、連絡のない五隻の軍艦が同時に、同一の判斷を下したのではないか。

(二) 日本水雷艇長の告白

夫れから九箇月ばかり後のことである。余は佐世保の日本海軍病院で、對島海峡の海戦に於て負傷した戦友士官から、隣接の病室にリウマチスを悩みつゝある日本の水雷艇長が居るといふことを聞いた。當時、ルーズベルト氏の斡旋に依つて、ポーツマスで日露兩國間に媾和談判の進行中であつたが、一日余は其士官と會見する機会に遭遇した。彼は全く過去の出來事を露骨に物語つた。で、其病も歐羅巴から歸朝航海の間を受けたのであるさうで――。

「歐羅巴の秋は全く日本の冬よりも酷いですね。」と彼はいつた。

「秋ですと？ それは何月頃のことです？」と余は訊き返すと、

「十月ですよ。吾々が特別任務を帯びて派遣されたのは十月下旬だつたのです。」

「十月？ それちやア吾が波羅的艦隊の出發と同じ時ですね？ 何うして吾々は君等の情報を開

かなかつたでせう？ 一體何國の國旗を掲揚して居たのです？ で、何時蘇士運河を通過しまし

た？」

「ハッハッハッ、それでは貴下は餘り訊き過ぎるといふものでせう。何國の國旗つて？ 無論日

本ではありませんでした。然し、何うしてそれが露國に解らなかつたか、先づそれをお考へになるのが第一ではないでせうか。何時蘇西を通過したと仰有るんですか。吾々はフェルケルザム提督の枝隊の直ぐ後からでしたよ。」

「それでは、多分、例の漁船砲撃事件に關係がお有りでせうね？」

「ハツハツハツ、さういふ御質問は些と吾々に取つて迷惑ですな。」

彼は笑つて斯う答へた外に、何等具體的の告白を余に與へなかつた。が、余はそれで何も彼も了解することが出来たのだ。余は千九百〇四年十月から十一月にかけて、歐羅巴の新聞紙に四隻の水雷艇隊が英國東洋艦隊に加はる爲めに東航するといふ、今から考へると何だか變な記事を見たことがあつたが、日本水雷艇長のいふ處と、此水雷艇隊との間には、慥かに離るべからざる關係があつたに相違ないのだ。

余は巴里の列國調査委員會に於て吾が露西亞の委員が、經驗ある海員が「カムチャツカ」を水雷艇と誤認したといふ、滑稽にして不合理極まる矛盾を、何故強硬に反駁しなかつたか、其理由を知るに苦しむ者である。然し歴史は慥かにそれを證明するに相違ない。

千九〇四年十一月、シユワスコフ式魚形水雷を、北海の南東岸に於て一漁夫が拾得した。當

時其水雷の外形は歐州繪入新聞に掲載されたが、余はそれに就て疑惑を有つて居る。

一體魚形水雷といふものは、其總ての部分に製造工場の名と製造番號とが彫つてあるので、若し魚形水雷を拾得した者が此點に注意すれば、其水雷が何時頃何國の海軍に賣られたものであるかといふことを知ることが出来る。ところが、北海で拾はれた魚形水雷が、是等の材料に依つて如何なる判斷が下されたか、余は不幸にしてそれを知ることができなかつたが、漁船砲撃事件と此水雷との間に、一種の因縁があると判斷することは、蓋し至當の結果であらねばなるまい。

調査委員會に於て、露西亞委員は水雷艇の存在に就て、又其發見に就て、被害漁夫から充分な證言を得ることに努力しなかつた。尤も是等の交渉は總て外交當局の權限内に在つたことなので、目的を達する上に不便が多かつたと思ふが、想ふに露西亞外交當局は露西亞臣民に對して甚だしく不忠實である。然るに英國の外交官は決してさうでない。苟も英帝國臣民の利害に就ては、有ゆる手段を盡してやまないものである。例へば英國領事であるが、彼等は其同盟國の利益をも尊重し、屢々本國の官憲に向ひ、海軍力を以て波羅的艦隊の前進をすら威壓せんと企てたものである。其海軍の示威運動が戰爭の原因になるとなるまいとそんな事には頓着せず、盡すべき義務は些しも躊躇することなく盡して居るのだ。

「そんなにやかましくいふことはないぢやないか。それで君達の顔は立つたといふものだから、我慢する方がいゝさ。兎に角、そいつが一番無事でいゝよ。」
露西亞外交當局の漁船砲撃事件の結果に對する態度は斯うである。噫！吾又何をかいはんやである！

(三) 巴里に於ける列國調査委員會の報告

波羅的艦隊が北海に於て英國ハル漁船隊を日本水雷艇隊と誤認して砲撃した事件に關する調査會議は、英露米佛埃五箇國の委員に依つて組織され、佛國委員海軍中將フルニエ氏を議長とし、一千九百〇五年一月十九日巴里に於て開催されたが、二月廿五日左の如き決議書を發表して同會を閉鎖した。

(一) 調査委員會は千九百〇四年十一月廿五日、聖得彼堡の宣言に基き、當會議の調査に附せられたるハル事件に關する事實を蒐集し、慎重に之を審査したる後、茲に本會調査委員多數の意見を發表するに至つたのである。而して此報告書中各要點は、特に委員の認定を明記したもので、本件の起源及結果は勿論之より生ずるところの、責任の歸着をも併せ知るに充分であると

信せられる。

(二) 露國太平洋艦隊は司令長官海軍中將ロヂエストンスキーの指揮下に屬し、東洋に向け航行中、千九百〇四年十月二十日、石炭積載の爲めスカーゲン岬附近に投錨したのである。一方に於てロヂエストンスキー中將は、本國より屢々敵水雷艇の襲撃があるかも知れないといふ情報に接したので、之に對し必要と思考した警戒手段を取つたのである。

(三) 次で艦隊は六部隊に分れ、各隊順次抜錨して北海に入つたので、ロヂエストンスキー中將は自ら最後の部隊を指揮して居た。

(四) 翌二十一日艦隊の諸隊は相次で英國汽船「デロ」號と行遇つた。而して同船長の宣言は露國より提出されたる報告書中に含まれた事項と符合して居るのである。

(五) 最後に「ゼロ」號に行遇つたのは「カムチャツカ」であつて、同艦は汽罐故障の爲めに各隊より遅延して居たのである。而して此遅延は次に記すところの事變の原因となつたのである。

(六) 同日午後八時頃、「カムチャツカ」は瑞典の汽船「オルデバロン」號及び數隻の不明なる船舶に遭遇して之を砲撃し、同艦長は無線電信で、「本艦は四方より水雷艇の攻撃を受けたり」と司令長官に報告したのである。

(七)豫てより敵水雷艇の攻撃があるかも知れないといふ通告に接して居た司令長官は、同じく襲撃を受けんことを慮り、各艦に「敵水雷艇の攻撃を豫期し、之に對し一層警戒を加ふべき」命令を下したのである。

(八)調査委員の多数は、當時司令長官が、甚だ不安であると信じた状態に鑑み、右の命令は戦時に於て常規に外れた不法の處分であるとは認めない。

(九)翌二十二日午前一時、當夜は殆んど暗黒であつた。艦隊最後の二隊はハル漁船隊の常に漁業に従事する附近を通過した。當時各漁船は、英國證人の一致せる陳述に依つて、總て制規の點燈をして居たといふことである。

(一〇)艦隊先頭部隊の司令官フエルケルザム少將が、漁船に接近し探海燈を以て之を照し、其漁船隊であることを認め、平穩に其航海を繼續したことは、後に至つて明瞭となつたのである。

(一一)先頭部隊通過後、右の漁業場に来つたのは、ロヂエストンスキー中將の旗艦たる「スワロフ」を先頭とした最後の二隊であつた。此時漁船隊の指揮者は、豫て漁業者の約束信號であるところの綠色火箭を放つたので、此一事は艦に露國の將校をして疑惑を起さしめた原因となつたのである。而して現に此疑惑に襲はれた「スワロフ」の見張員は、直ちに艦橋より夜間用双眼鏡

を以て、水平面を偵察したのであるが、此時右舷の方向に當り、凡そ三千六百乃至四千米突の距離を隔て、海面上に一船舶を認めたのである。然るに此船舶は何等の點燈をも示さず、其上に艦隊に向つて進行し來るやうに見えたので、「スワロフ」では此船舶を以て怪しむべきものと推定したのである。次で此船舶は探海燈に依つて照されたが、見張員は同船を以て、正しく大速力を以て進撃し來る、一水雷艇なりと信じたので、司令長官は此船舶に對して發砲を命じたのである。此點に對する調査委員の多数意見は該行爲の責任及び漁船砲撃の責は、ロヂエストンスキー中將に歸すべきものとすにあつたのである。

(一二)發砲後間もなく「スワロフ」は其右舷に當り、一隻の小船現はれ其進路を妨ぐるを認め、之と衝突を避くる爲め、已を得ず、針路を左方に轉じ、探海燈に依つて此小船を照して初めて漁船であることを知つたのである。此に於て司令長官は信號で「漁船に對し發砲すべからず」との命令を下した。然るに證人の陳述に依れば、探海燈を以て右の漁船であることを確むると同時に、旗艦の見張員は右舷に又一隻の船あるを認め、同船は曩きに右舷砲撃の目的物であつた船舶と同一の船であつたので、是又甚だ疑ふべき船舶なりと認定したのである。此に於てか砲火は更に此第二の目的物に對して加へられ、茲に兩舷砲臺の發射を見るに至つたのである。

而して諸艦は始終同一の速力を保ちつゝ、嚮導艦の通跡に入り其最初の針路に復したのである。

(二三)司令長官は艦隊の規約に従ひ、各艦の砲撃すべき標的は旗艦の探海燈を以て照しつゝ、之を指示せしめたのであるが、各艦も亦襲撃豫防の爲め各々其探海燈を以て、自艦の周囲を照したが爲めに、従つて混雑を生ずるの止むなきに至つたのである。右の砲撃は十分乃至十二分間であつたが、漁船に少なからざる損害を與へ、二人を殺し六人を負傷せしめ、漁船中「クレーン」號を沈没し、「スナイプ」號、「ミノ」號、「モーレメン」號、「ガル」號、「マゼスチー」號の五隻は多少の損害を被り、且つ巡洋艦も亦多数の弾丸を受けたのである。

茲に調査委員の多数は各艦が如何なる目的に對し、砲撃を加へたかを知るに充分な調査材料のないことを明言して置く。然しながら、總ての漁船が敵對行爲を敢てしなかつたことは、全委員の認むるところであつて。尙ほ委員の多数意見は漁船中にも其附近にも、水雷艇の存在を認めず従つてロヂエストンスキー司令長官の砲撃は正當でないと思はるものである。然るに露國委員は是に同意をせずして、發砲の原因は正しく疑はしき船舶に在り、即ち同船舶は敵對の目的を以て、艦隊に接近し、之が爲め發砲を促したものであると主張したのである。

(一四)右夜中射撃の原因如何を察するに、「アウロラ」が四十七密及び七十五密の弾丸數個を受

けた事實に依つて見るときは、同巡洋艦及び恐らくは其他の露艦も「スワロフ」に後れ、而して「スワロフ」は之を知らなかつたので遂に第一の發砲を引起したものと推定することが出来る。蓋し斯の如き誤謬を生じた理由は、同艦を後方より見るときは、毫も外に現はるゝ燈火がなかつたのと、且つは旗艦の見張員が、夜間の視察法を誤つたのたにあつたものと見える。此點に就き調査委員は左舷砲射撃の繼續を引起したる理由を知るに足るべき、充分な調査材料のないことを證明する。而して右の如き場合であつたので、或る漁船は最初の目的物と混視せられ、遂に直接砲撃を受け、他の漁船は之に反し、一層遠ざかつた目的に對し、發射された弾丸を受けたものであるらしい。以上の觀察は或漁船に於ける當時の觀察と符合して居る。即ち同漁船は弾丸を受け且つ探海燈に照らされたので、直接射撃の標的となつたことを知り得たのだといふ。

(一五)右舷砲射撃の繼續時間は露國の提案に依つて見るも、尙ほ調査委員の多数は其必要とした時間を超過したものと考へられる。然し、此點に就ては、左舷砲射撃の時間に關し、前に述べたと同じく、調査材料の甚だ不充分なことを證明する。要するにロヂエストンスキー中將が既に認めた漁船に對しては、艦隊の實行した射撃の標的物とならない様に、始終及ぶかぎりの手段を取つたことは、調査委員一同も喜んで承認するところである。

(一七)斯くて「ドミトリドンスコイ」が其番號を信號するに至つて、司令長官は「發砲停止」の命令を全艦隊に信號せしめた。本事件の發生以前及び當時に於て、艦隊の安危上、司令長官をして其航路を繼續するに躊躇せしむべき、種々不安心の事情があつたことは、調査委員一同の充分承認するところである。然し、ロヂエストンスキー中將が英佛海峡を通過するに當り、漁船隊附近で發砲したこと、及び國籍不明なる同漁船に救助を與ふるの必要あることを、沿岸諸國の官憲に通告する手段を取らなかつたのは、調査委員多數の遺憾とするところである。

(一八)調査委員は茲に報告を終はるに臨み、以上述べ來つた認定中には、ロヂエストンスキー中將及び艦隊乗組員の軍事的價值及び其人道的觀念に對しては、毫も之を毀損すべき性質を含んで居ないことを宣言するものである。

露艦隊全滅行終

大正二年十月十一日印刷
大正二年十月十日發行

露艦隊全滅行
定價金一圓二十錢



著者	押川方存
著者	阿武信一
發行兼印刷者	東京市小石川區三軒町八番地 鹿島光太郎
印刷所	東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

發行所

東京市小石川區三軒町八番地
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
振替貯金口座東京一八四四番

武俠世界社

319
290

終